中央公論

本號目次



LITTLE SUMMER.

By Frank Walton.

中央公論

第十八年

第五號



國民の世界的常識

蚤も人と共に生く、虱も人と共に生く。種々の寄生蟲が他の高等動物と共存するが如き狀態に於て、同じ人間に生れながら世界より劣等國民と擯斥され、辛ふじて共存の榮を辱ふするが如きは、意氣地無き亡國民又は半亡國民といはるゝか撰を異にせる吾人日本人の決して堪へ得べきことに非ず。躰力に於ても、智力に於ても、ハタ金力に於ても、他の一等國民の下風に立つは吾人の斷じて欲せざるところなり。

既に列國民競爭の圈内に投ず。世界の先進國民に比肩し、並驅し、雁行し、若くは一等を拔んでざる可らず。如此の地歩を占めんと欲する、先づ國民をして多く世界的事業に着手せしめざるべからず。世界的事業は世界的人物の多少に依て興廢す、而して世界的人物は必ず世界的常識に富める國民の裡より生ず。何をか常識の人と云ふ、「自己の位地を自覺して之に要する必要の智識を悉く具へたる人」なり。果して我國民は各文明國民の大競走に加はれる一員としての自己の地位を自覺せるや否や。之に要する智識を備へ居るや否や。有ゆる階級を撿し去て、吾人は如何にも我國に於て世界的人物の尠く隨て世界的事業の擧がらざるの無理ならざるを知れり。櫻と富士の山と藝者と女郎を除非して、世界より日本の國自慢無しと云はるゝの御最千萬なるを自覺したり。

一

試みに帝國の政治家と稱し、或は代議士と呼ばるゝ諸君に向て問へ。マセドニア事件は東歐の時事問題なり、

其後奈何に成り行きしかと。トラスト問題は亞米利加に於ける物議の種なり、今後奈何に落着すべきかと。此頃の質問を受けて兎に角にも相當の返辭を爲し得る人果して幾許ぞ、更に手近き自家頭上の問題たる滿洲に於ける露國撤兵問題に向て問へ、濠洲に於ける我移民排斥運動に向て質せ、刻下の經濟政策に就て求めよ、當來の社會問題に就て叩け。よしやお茶を濁す丈けにもせよ、一個の定見を述べ得るの人果して幾人かある。朝と云はず野と云はず、帝國大小の政治家を通じて、週刊タイムスを讀む人僅に六人、貴衆兩院を通じて、政治家年鑑を所持せるもの僅に十八人とは、二年前吾人が新紙の報道に依て聞きしところなり。自家の本領に向てすら此の如し、世界的常識の缺乏せるこれを以て其一般を覦ふ可し。此の如き政治家代議士に日本の運命を托せざる可らざる國民も亦禍なる哉。彼等が自家の責任を自覺して少くとも政黨たるものは主義に依て合し主義に依て離るべきものなるを覺るの時期は今後猶幾年を要すべきか、思へば心細さの至りならずや。

商業國としての日本、工業國としての日本、將來如何なる方針を以て立つべきか、自家の素養は如何にすべきか。此等の大局に考を及ぼせる實業家其數果して幾人ぞ。世界の大都は勿論、東洋の沿岸にすら政府の保護無き一私人の事業が毫も擧らざる所以は如何、殖民移住熱の少き所以は如何、東對岸の亞米利加カリホルニヤの一洲すら殆んど日本と廣さを同ふし、而して人口は僅かに我國の一府縣に及ばずと稱す、同じ「文無し」の天秤棒より仕上るならば運命を此新世界に試みんとの野心ある小僧番頭の存外に少きは何故ぞ。西の支那南の濠洲、舞臺は廣し、同じ此身代を賭するならば、內地に於てせずして花々敷海外に開戰せんとの野心有る投機師未だ出でざるは何故ぞ。これ皆實業界の空氣が世界的常識に欠乏せる故に非ずや。いつも防禦的商戰にのみ安んじ、才取主義、緣日商人的主義、只店頭に猫背をサラケ出してペコ〳〵頭を低げ媚を付くの練習をなすを以て能事とするが如きは決して世界的日本

の實業家に非ざるなり。

一

我國の文字に就て、我國人の躰育に就て、惡風俗に就て、惡習慣に就て、若し教育家諸君にして自覺心有らば、必ず先づ世界に對する競爭上、國運進歩の妨害物として、自家直接の責任よりこれら重要の國病問題を鋭意解決するところあらんとするなるべし。而も此の如き點には全く冷淡無頓着にして、依然狹義の忠愛說や、漢字保存論に籠城し以て世界の大勢に抗せんとするもの猶多し。萬人一様紙型版的人物を作り出すことや或は實用に疎き沒常識の人間を作り出すことのみに汲々たるは悉く然り。これ皆教育家なる階級が世界的常識に欠乏せるに職由せずんばあらず。

一

曾て我社の同人中、一米國雜誌社の依囑を受け、日本の諸新聞より其論說の東洋問題又は一般外交的問題に就て世界に紹介すべきものを飜譯したることあり。當時堂々たる帝都の大新聞にして、世界に紹介するに足る議論は之を發見する能はず、毫も世界の大勢には接觸せずして唯病犬の嚙付く如き人身攻擊の文や、根據無き空言と極端なる僻論のみあり。偶ま見るに足るものを發見し詮索し來れば、一度英米いづれかの雜誌に現はれたるものゝ飜案に過ぎず。半年間僅に二個の論文を譯送して止みたること有りき。思へば一個の世界地圖すら備へざる編輯局多く又はルーター電報の飜譯に持て餘せる新聞社のみなる今日の現狀なり。世界的常識の上より判斷して當面の諸問題を論斷する新聞記者は果して幾人かある、よしや如何なる主義にもせよ讀者を一定の方向に導かんとして、第一面第二面及び第三面を編輯する新聞社は果して幾社か有る。社會各思潮の先鋒たる新聞すら我國は未だ世界的ならざるなり。

一

宗教家は奈何、云ふまでも無く有ゆる階級中尤も自覺心無き社會たり。佛教徒然り、基督教徒然り、我國目下の大問題たる精神界の統一は如何にして之を謀らん

とする、此亂れに亂れたる精神上の亂世を如何に解決せんとするか、之を基督教徒に問ふ知らずと答へ、之を佛教徒に問ふも知らずと答ふ。寸前暗黒、唯其日暮しに盲動するのみ。特に之を佛教徒に見る、暹羅的錫蘭的なる亡國臭味の宗派は問はずもあれ、眞宗の如き日蓮の如き宗教的生命を持續し世界の大勢に順應して活躍し得らるゝ宗派すら、現今帝國の進運に寄與し、併せて將來の日本を指導せんとするの態度は毫も之を認むる能はず。青年界を捨てゝ老人界に退き、教育有る階級を捨てゝ無教育なる階級に退き、都會を捨てゝ地方に退く。吾人は實に彼等に向て世界的なるよりも先づ東京的なれと云はんとす、帝都の中心に一個の會堂をも有せず、青年男女に對し、中等以上の階級に對し、全く逃避的態度を採れり。所詮は社會外に退ひて日一日に細まりつゝ行くことと日光の下に在る雪達摩の如くならん。

一

一々他の階級を擧げ來るの要無し、學者も官吏も書生も藝人も有ゆる階級が世界の競爭圏に投ぜし國民の一員として自己の職分に對する自覺心に欠け、世界的常識無きは悉く然り。誠にこれ我國時弊の最大なるものに非ずや。

如何にして之を匡正し、之を養成すべきか。社會教育の方面より、先覺者の有ゆる手段を以て、力を致すべきは素よりなりと雖、吾人は吾人の宿論たる教育行政の根本より刷新すべきの最も必要の事たるを信ず。(前年教育界の時弊として詳言せり)要は現在の年老ひたる國民をして自覺心を養成せしむるの困難よりも、今の中等教育を改善し數年後の國民をして健全なる常識國民たらしめ以て世界の大勢に應じ此時弊を救ふの捷徑なるを言ふにあり。局に國民教育の要路に在る人は三顧四顧するところありて可なり。(楓堂)

印度探險の方針

亞細亞大陸に對する學術的探險、實業的規畫、其他各種の事業が我邦人に依て經營せられざる可からざるは

吾人屢之を云へり。而して此種の事業は韓國支那の一小部分に對して着手せられたるの外未だ何等の消息をも聞かざりしなり。然るに去年大谷光瑞師の一行が中央亞細亞前後印度及び支那に對して大探險の壯擧に着手せられしを初めとし、邦人の印度に着目するもの近來漸く多きを加へ、學者宗敎家政治家實業家等の彼地に至るもの往々にして有り。且つ印度各地より我國に學ぶ爲めに來れる學生は益多きを加へ、ヒマラヤ山間の小獨立國ニポールよりすら數多學生の來朝せるあり。思ふに今後、彼我の關係益頻繁となり、我國人の彼地に至るもの彌よ多きを加へん。

吾人は我國の學者特に宗敎家の責任として印度に對して是を調査し研究し探險すべきの大必要を認むるものなり。

此際に方て吾人が印度探險の方針に就て一言せんとする又決して無用の言に非るべし。頃者幸ひに社友上原芳太郎氏の大谷師に隨ひ、親しく印度內地探險の苦酸を嘗めて歸朝せられしあり、氏の經驗談を基本とし加ふるに吾人が曾遊して目睹せるところを參酌し、いさゝか讀者に報ずるところあらんとす。

讀者の既に知れる如く、亞細亞南邊三大半島の中間に位せる亡國印度は、人口に於て二億八千五百萬を有し、面積に於ては實に我邦に十四倍せり。屬邦の統御に就て特別の技能を有するジョンブルが鋭意畫策せる文明利器の應用は到る處に試みられ、鐵道の施設最近の統計には已に二萬四千七百零七哩の大延長を示すに拘はらず其版圖の大或る特種の調査探險を試むるに當ては、猶鐵路の非常に不足なるを感ずるなり。加ふるに氣候の險惡を以てし、毒獸の侵害を以てし、大古の深林を以てし、茫漠の荒原を以てし、飢饉を以てし、惡疫を以てし、錯雜せる言語を以てし、御し難き人心を以てし、英領以外處々に散在せる土王の小版圖を以てし、前代多々の興亡を經たる亡國癈殘の歷史を以てす。これが探險に從事し、學術に宗敎に獲るところあらんとする其困難豫想の外に在り。隨て其方法に於て大に注意するところ有るを要す。

（一）探險者の行動に就て　　印度探險者が土人に對しての行動は果して奈何なる態度を採るべきか、これ劈頭に講究し置くべき要件なり。「決して土人に同化する勿れ百事英國人の爲すところに倣ふべし」此一語、他邦人が印度を探險するに當て先づ第一に記憶し置かざるべからざるの敎訓なりとす。何人も此語を聞かば怪訝の念に打たれん、土人の習慣風俗に同化してこそ初めて各種の便宜を得べきに、却て彼等に同化すべからずと云ふ大に其意を得ざるが如しと雖、凡て亡國民を相手に事業を成功せんと欲せば必ず先づ之を制御せる國民の行動に倣ふべし。これ獨り印度にのみ止まらず各國亡國性の人民に對しては皆然らざるは無し。特に印度の如く、言語の一致無く、宗敎の統一無く、階級制度の惡慣と、土人間相互に共同心の全く缺けたる國民に對しては此敎訓は最も必要の條件なり。若し第一着に此方針を誤らば、何等の仕事も成功し能はざるべし。盖し英國人の行動は、印度人を御せんか爲めに數代の經驗に依りて得たる結果なれば、精心細意その爲すところを注意し、之に倣ふは尤も策の得たるものなり。

（二）必要なる土語　　探險者は英語の外是非土語に通ぜざるべからず。然れども印度は世界に於て最も言語の錯雜せる國なり、アリアン語と云ひ、ドラビデアン語と云ひ、コラリヤンと云ひ、カシと云ひ、其他凡てに於て八大語系に分れ其中アリアン語系中の一個なるインヂツク語脈一個のみにて十四の言語(ランゲーヂ)と百二十五の地方話(ダイアレクト)に分れ居れり。他皆之に準じて知るべし。則ちカルカツタ市民はボンベー市民と話す能はず、アグラ市の人間はマドラス市の土人と語相通せず、州に依り縣に依り悉く其語を異にせり。此の如く混亂せる土人語を一々習熟せんこと到底不可能の事に屬す。然れども幸ひにして各語の中ヒンドスタニー語のみやゝ共通の性質を帶び英語の全く通ぜざる村落にても一村一二人のヒンドスタニー語に通ずるものは全土到處これを見出し得べし。探險者は必ず此ヒンドスタニー語を學ぶの必要有り。

（三）印度探險の季節　は每年十月より十一十二一二の五個月に限らざるべからず、則ち十月に發程して翌年三月上旬には是非印度を去らざるべからず。然らずんばヒマラヤ山間の凉地其他恰當の地を撰んで暑を避け、再び十月を待て着手すべし。三月以後の季候は炎熱到底外人の堪へ得るところに非ず。特に七八九の頃、モンスーンの印度洋上の濕氣を送りてヒマラヤの大障壁に當て雨となり、雨季の始まるに當てや、低氣壓の爲め一種不快の熱氣頭上を壓し、之に慣れざる外人は直ちに疫神の擒にするところとなるに至る。若し夫れ熱を避くるに寒を避くると同じく窓戶を鎖さし毛布を纏ふて熱風を防ぐが如き苦熱と、連月常雨舟を街上に往復せしむるが如き淫霖とに至ては、風光明媚の溫帶國に住める吾人日本人の想像外に有り。此季節に於ては、ホテルとステーションのみに賴りて往返する觀光一遍の紳士的旅行すら猶堪へ難きところとす、況んや深く內地に入りて斷碑廢礎を探らんとするに於てをや。これ探險の季節を是非十月より三月までの五ヶ月間に局らざるを得ざる所以なり。

（四）旅行劵と探險具　印度內地處々英國に屬せずして土王の版圖に屬する所有り、此等の版圖に入るには是非特別旅行免狀を得ざるべからず。若し土王版圖內に鐵道の橫斷するありて、只滊車にて通過するのみならば別に必要無きも、然らずして探險的旅行を爲さんとするに此免狀を持參せざれば何事をも爲し得ざるべし。これ印度內地に入らんとするものゝ特に注意すべき事なり。探險具に關しては通常探險者の携帶する器具を準備すれば足る只天幕は是非入用なり、印度にて天幕を購ふものはカンプル市の製にかゝるものを需用すべし。革類の產出を以て名高き同市は、亦天幕の製造に於ても有名にして、同市產のものは特に堅牢なりとす。

（五）旅行費及び苦力の賃金　通常都會に於て一日十ルーピー地方村落に於て一日七八ルーピーの割合を以て計算すれば足る。地方驛亭（ベンガルー）の在る處にては一食一ルーピーを以て食物を得べきも驛亭無き地に滯在するに

は是非食物を携帶し、或は運搬せざる可らず。又土人を賃して諸種の勞役を命ずるには、大抵一日四アンナより八アンナまでの賃銀にして足るべし。一ルーピーは約我國の六十錢一アンナは一ルーピーの十六分の一なり。

(六)案内書及び地圖　印度に關して案内書尠きに非るも、多くは不十分にして少しく精細の調査を爲さんとするものに向て憑據するに足るべきもの一も是れ無し。唯ハンターのインペリアルガゼッチヤに依るを要す。此書は新舊兩版有り、舊版は九冊にして新版は十四冊有り、云ふまでも無く新版の分を撰ぶを要す。地圖に就ては四哩一吋のインヂアンアトラスに依るを便利とすべし。一哩一吋のスタンダードサーベーの如きは、一地方の一局部を精細に見んとするに際して必要なるも大抵は四哩一吋の分にて十分ならん。

(七)古蹟探險に標的とすべき書籍　印度本國にては歴史的舊趾を尋ねるに當り依て以て標的とすべきの記錄は全く之を缺けり。而して却て外國人の手に成れるもの、則ち玄奘の西域記の如きは印度の古蹟を尋ねるに當て世界唯一のものたり。彼が宗敎的熱誠を以て忠實に記載せる紀行は、其後幾度の興亡に依て堙滅せる癈趾、特に印度敎の興起回敎徒の大侵入等に依て殆んど痕跡すら失へる佛敎の遺蹟を探るに當て、他に疋儔無きの寶典なり。印度の歴史的舊趾を再現し發掘し、種々の功績を與へたる有名なるカンニンガム大佐の如きも、其參考とし標的としたるものは唯此西域記のみなりき。彼の佛陀誕生の地が已に明白なるにも拘はらずクシナガラの未だ分明ならざるが如きも全く西域記に其場處を明示せざるに依る。今後世界の學者が印度を探險するに際して、先づ西域記を十分に精讀するは最も必要の事なり。

西域記に依て印度の古蹟を討査せんとするに就て、今回大谷光瑞師の探險は其實驗より歸納して吾人に重要なるヒントを與へたり。玆に附記して同書を讀む者の爲に資するところあらしめんとす。其一は西域記中の里數に就てなり。各都城の位置距離周回等、玄奘は一

々之を記しあるも、從來一里の距離を幾許として算せるかを知るに由なかりしが、今回多くの場合を實檢せる結果は記中に誌せる里數を英哩に換算するに、百里以上に記せる里數は是を七除し、百里以下に記せるものは是を六叉は五半を以て除し得たる數が大體に於て誤無き哩數となるを慥め得たり。且つ玄奘の記せる不遠の二字則ち「茲を距ること遠からず」等の文有る場合は一淸里以内なるを知り得たり。此發見は全書に依りて印度古蹟を開かんとするものゝ爲に一の鍵を與へられたるに同じ。他の一は西域記の文章に就て之を讀むものが決して懷疑的態度、研究的態度を以て讀むべからずして、全く信仰的態度を以て讀むべきことなり。則ち原文通りを其儘に信仰して讀まざれば、實地の探查に當て却て五里霧中に彷徨ふの結果を生ぜん。師の一行が數十の土人々夫を督して王舍城の舊趾を探れる時に際しても、靈鷲山(Gridhrakuta)の位置に就て、西域記中

「宮城東北行十四五里。至姞栗陀羅矩吒山。接北山之陽、孤標特起。旣棲鷲鳥。又類高臺。空翠相映濃淡分色。」

等の文有り。實地を探險せずして之を讀みたる者は、孤標特起の文字の如き之を解するに苦み、種々牽强の說を爲したるも、實地に之を探れば王城の北方に當る所謂北山の陽に、其半腹に當て一大巨巖の兀として起れるあり、其形高臺の如くして其邊鷲(バルチュール)鳥多く、四邊の天光地景、如何にも「空翠相映濃淡分色」の景容詞が適切なるを覺えたりと。其他之に類したる實例數多有り。すべて原文を懷疑的に解釋せずして信仰的に之を讀めば一々實地に適合するを見たりと。此等も亦實に後繼の印度探險者に採て實に重要なる點と云ふべし。

印度探險の手段方法に就て吾人の言はんと欲するところ決して之れに止まらず。然れども其枝末の細を措き、其梗概を記せば以上の如し。此最古の歴史を有し、最大の宗教を出だし、大哲人を出だし大文學を出だしたる多趣多面なる邦國を、學術より宗教より之を

探險し世界に貢献せんとするは實に曠世の事業なり。須らく長き年と多くの人を以て繼續事業として之に着手し初めて之を大成するを得べし。今や此の如き事業は先づ宗敎界の方面より着手せられたり。而して第一回探險の結果は近き將來に於て社會に發表せられんとす、二回三回四回五回今後其結果を大成して世界の進運に供給するところは定めて大なるものあらん。宗敎界以外の方面は果して奈何。吾人は學術に、實業に、其他有ゆる社會の各方面より印度に向ひ西藏に向ひ中央亞細亞に向て着目する邦人の踵を接して起らんことを望むものなり、又必ず是れ有るべきを信して疑はさるものなり。吾人か此時に方り印度探險の方針を說く豈徒爾ならんや。（探震）

▲印度に於ける猛獸

印度政廳最近の報告に依れば、昨一年間土人の害獸を狩りたる數一万七千二百頭、其懸賞の爲めに拂へる金十万四千ルーピー、又虎の爲めに人命を損したること九百四十三人。

日本國民の弱點と其救濟法

普通學務局長　澤柳政太郎

國民に通じての長所があつたならば其長所は社會の總ての方面に現はれ、國民に通じての短所があつたならば又其結果は社會の各方面に現はれるものと思ふ、故に長所は益々之を發達せしめ短所は注意して之を補ふことを務めるのは即ち社會國家の發達を圖るところの根本であると思ふ、世人多く歐米の富强を見て其直接の原因を求めて或は資本の充實、或は國民の謹儉貯蓄の風に基くと言ふけれ共、自分の考ふる所は歐米の富强は根柢に於て其國民の特質より生ずるものと思ふ、固より一時偶然の原因よりして起るものもあるけれ共詮議をすれば多くは國民の性質より生ずるものである、果して國民の性質より生ずるものとすれば其性質に溯つて發達の方法なり又は改良の方法なりを求めぬければ其目的を達するものでは無い、我日本は三十年來著しい進歩をなしたとは言ひながら、是は唯々我邦の歷史上の發達に考へ若くは東洋諸國の進歩の有様に

較べて言ふのてあつて、近世の歐米の進歩に較べて見たならば誠に遲々たるものである、殊に近來政治、宗敎、敎育其他社會の各方面に現はれて居る現象に考ゑれば慨嘆すべきもの多くして快心のことの少いのを見ては我邦將來の進歩は甚だ思ひ遣らるゝ、世人の常に口にするところの慨嘆すべき事柄といふものは其根柢を考えて見たならば多くは國民の弱點より發するものであるやうに思ふ。

主要なる三個の缺點

今其弱點なるものを一々列擧したならば殆と際限も無い位てあるが、主要なるものを擧げて見れば

第一には我國民は勤勞を厭ふ、安逸を貪る、自分の勢力を現はすといふことに熱心で無いといふ事である、言換えればenergetic(エナアゼチツク)の國民で無いといふ事である、勞を惜み安逸を貪るといふ事が恰も各自の利益であるが如くに考え、又其人の怜悧なる爲であると考え偶々勤勞を厭はず常に働く者を見ては愚であるが如くに考える、固より勤勞といふことと其ものは快樂では無い、併なから勤勞の結果といふものは快樂であり又滿足である、單に勤勞其ものを見たならば如何なる人も之を好む者は無い、併なから勤勞の結果に至つては又大に心に滿足を與ふるものである、若し勤勞せずして勤勞するものと同一の結果を收め得るとしたならば如何なる人も勤勞せさる事を欲するであらう、併なから此の如き道理は決して無いのである、勤勞の結果は直ちに利益若くは愉快を生せぬとしても自分は其職分を盡したといふ精神上に於ける滿足は何人と雖も感することが出來る、此結果のみを以て考えても勤勞は最我々の爲す事を値するものてある、殊に勤勞の有形上の結果はよし自己に大なる利益を生せざるものにしても他の爲には必ず相當の利益を生するものである、此勤勞といふものは其報の無いといふことは無いのである。

不幸にして我國民は此勤勞に服することを好まない國民である、之を英米若くは佛獨の國民に稽ふるに、彼等は其間に性質を異にすることがあるけれ共概するに勤勞を好む、有爲活潑の國民である、といふ事を失はない、彼等は仕事をなすを以て愉快と考ふるか如き有樣である、其仕事の自他に與ふる利益、若くは精神上に感ずる滿足を顧みず、仕事其物を樂むの國民である如くに見える、彼等は我國民の多くか考えると全く正反對に、勞を厭ひ安逸を貪るのは不利益の最甚しきものとして考ゑることてある、他人の安逸なるを見ては

其懲を嗤ひ憐むもの丶如くある、我國民は他人の安逸にして居るのを見ては之を羨むの有樣とは、全く正反對のやうである、此性質は種々の事業の上に現はれて居ると思ふ、即ち政治上に於ても教育上に於ても實業上に於ても現はれて居るのである。

宇宙自然の現象は殆と皆勢力の現象である如く人間社會の現象も亦此勢力の現象の外ならぬ、即ち勢力ある者は益々榮え益々進步し勢力の少きものは自然に衰える、又大なる進步をなすことは出來ない、我國民にして仕事を好む所の國民となるにあらざれば世界の舞臺の上に於て歐米人と相馳逐するといふことは到底適はないことであらうと思ふ、國民は大に此惰眠を破つて活潑に仕事をなすといふ風を養はなければならぬと考える。

●第二には目前の利害に敏くして遠大の計畫をなすの性質を缺いて居るといふことである、我國民の怜悧なることに至つては世界各國の國民に劣らぬことであらふと思ふ、目前の結果を冀うが爲に、其結果を來さんが爲には國民の爲す所は甚だ活潑であるやうに見える、我國民は甚だ性急である、國民の名譽とし不名譽とするところも亦目前の毀譽に存して一生の襃貶を考ふることが少い、目前の名譽を得るが爲には彼等は務めて已まない所の風がある、併ながら遠大の名譽を博し永遠の謗を避ける方法に至つては頓着せぬところの國民である、學生が目前の試驗の爲に勉强する其勉强の度合は如何なる國の學生にも劣らぬと思ふ、文學者が一時社會の注目を惹く所の著述をなすにも亦深き素養と長き年月の耐忍を要せずして、巧みに一世の耳目を惹く所の著述をなすことがある、併ながら其人の名譽名聲は僅かの間にして消失せてしまう、商人が直接の利益を謀る爲には甚だ怜悧なるが長き間の利益を謀るに至つては遺算が頗る多い、之を歐米人に較べるに彼等は甚だ遲鈍なるが如く甚だ呑氣なるか如くあるけれ共が、永遠の勝利を期する事に至つては最周密なる注意を持つて居る我國民の中には歐米人の宣教師に見るが如く根氣强く仕事に從事する者は一人も見出すことは出來ない、彼等が外國に渡航して商業を營むには殆ど一生を賭し其生涯を外國に費すことを以て念とするが如くあるが、我邦の商人は非常なる希望を持ち非常に熱望して外國に渡航しても二三年にして早く本國に歸らんことを思うて、一生を海外に費すといふやうなことを考ふる者は一人も無いと言つて宜い。

我邦には此欠點を警める所の格言には乏しく無い、即ち「小成に安んずる勿れ」とか「大器は晩成す」とか「人の毀譽は棺を蓋うて定まる」とか、頗る此點に關しての名言が多い、詰り是等の名言の多いといふことは寧ろ國民の短所といふものを早くより自覺した爲ではは無いかと思はれる、若し此の如き訓誡が國民を警醒する效能があつたとしたならば我國民は最遠大の考のある國民てなければならない、然るに今日の有様を以て見るに最小成に安んずる國民であるといふのは、此性質は由來する所の甚だ遠いものであるといふことを證するに足るてあらうと思ふ。

第三に我國民の弱點は度量の狹いといふ事であらうと思ふ、此頃の所謂島國的根性と言ふのが我國民の通弊てある、猜疑、嫉妬の念の強くて恰も婦女子の如き性質である、寛大なる所の度量といふものに乏しい、人の缺點を指摘するところの明に至つては我國人の最長する所である、恐らくは他の弱點を見出し皮肉に之を云ひ現はす能力は他の國民に於ては見ることの出來ない所であらうと思ふ、唯々他の缺點を見出すといふ事ならば倘ほ恕すべしてあるが、他の長所、美質を認めざるといふ缺點を我國民は併せ持つて居るやうに思ふ、既に他の缺點を見、其長所は之を認めない故に他を攻擊し之を憎むといふことは當然の結果である、此點は仕事をなす上に於て非常なる妨害をなす所のものであらうと思ふ、國民の多くは缺點を公けに曝されたる所の疵物である、是等の人といふものは社會の表面に立つて大なる仕事をなすことは固より出來ない、偶々缺點のなき事業家があつても人は之を認めずして其成功を妬むとしたならば其人が大なる仕事をなすに付て妨げとなることは當然である、此點に關しても歐米國民を見るのに、甚だ異つて居る所のものがあると思ふ、彼等は他人の缺點を見るといふことは甚だ敏くない、縱し他人の缺點を認ることがあつてもそれは他人の事として之を指摘することを務めない、それに反して他の成功を稱贊するといふ事に至つては甚だ吝で無い所の美風を持つて居るやうに思はれる、此美風は事業をなす者をしては益々事業をなすの便宜を與え缺點のある者をしては其缺點を顧みて善に進ましむる所の功能があらうと思はれる、實に我國民は政治上の爭を見ても其爭といふものは多くは公明正大なる主義の爭にあらずして感情の衝突より來ることが多い、其感情も亦猜疑妬嫉の情よりして起る所のものが多い、實業上に

於ても猜疑嫉妬を以て充されて居る、會社の改革と言へば乗取策の爲てあると言ひ、又改革を言ふ者も會社の自己の選びたる重役といふ者を疑がうて已まない、甚しきは外國に至つて外國人と競爭する如き場合に於ても邦人は互に相排擠して邦人同士の成功といふものは互に妨げるが如き情のあることを免れない、又我文學の如きも殆と猜疑嫉妬の文學であると言つても宜いかとも思ふ、我國民は團結するところの力が無いと言ふのも即ち此缺點がある爲てあらうと思ふ。

如何にして此缺點を矯正す可きか

以上に擧げたる缺點を細別したならば幾つにも之を分つことが出來やうと思ふ、今少しく是等の缺點を矯正するところの方法に付て言へば、勿論國民の性質に基く所の缺點を矯正するといふ事は極めて困難なる事てある、殆と其方法を知らないと言はぬければなるまいと思ふ、併なから强いて其方法を求めたならば自分は

第一には國民若くは國民中の識者なる者をして是等の缺點のあることを自覺せしむるが改良の第一段てあらうと思ふ、或點から論ずれば我國民は甚だ已惚根性に富んて居る所の國民てある此已惚根性を形容したる所の言葉といふものも我邦には多い、即ち「神州の男兒」てあるとか、「東方の君子國」であるとか我國民は地球上に於ける國民中最上位に位する者であるといふやうな考を漠然なから持つて居る者が多い、此考がある以上は以上の如き缺點を脱却するといふことは出來ない、若し公平に觀察したならば我國民は國民として決して誇るべき性質を持つて居るもので無いと思はれます。

例へば我國民に忠君愛國の精神に富んで居るといふことを言ふ、是は事實である、併なから忠君は扨置き愛國の精神に至つては歐米の國民は皆有して居る、或は其愛國心が我國民の愛國心よりも一層强固なる基礎を有して居ることでは無いかとも思はれる、獨逸人は其父國を愛するの情の甚だ厚いといふことは明かなる事柄である、彼は獨逸國の近代の進歩といふものを以て最誇るべきものとし又將來に於て其進歩といふものが際限なく現はれるものと信じ、のみならず歐羅巴は總て獨逸化するところの命運を持つて居るといふことを信じて居る、佛蘭西人には佛蘭西人の愛國といふものがある、英吉利人にはアングロサクソン人が世界を統一するところの運命のあることを信じて居る、更に亞米利加の如き自由の行はれ數多の聯邦より成つて居る

國にして尙合衆國民と稱する愛國心は極めて强烈なるものである、彼等は歐羅巴の先進國よりも最完全なる又善良なる幸福なる國は合衆國であるといふことを信じて居る、彼等は經濟上に於て世界の中心とならん事を期し、今や將さに之を實にせんとして居る、更に進んでは他の點に於ても又世界を亞米利加化せんとする所の考が漸次に起つて來て居る、忠君の精神は我國民特有の精神であるけれども、愛國の氣象に至つては獨り我國民の占有するところのものでは無い、其他道德上の觀念に至つても我邦は左程世界に誇るべき所の美質を持つて居らない、正義の觀念の如き寧ろ我は彼より劣るであらうかと思はれる、彼國民は一般に金錢を重んずるところの國民即ち所謂拜金宗の國民であると言うて居る、併ながら我國民も公平に比較したならば拜金宗ならざるものであるか大に疑のあるところである、殊に金錢に對する考は歐米人に於ては健全にして我邦の國民の考は少しく病的であるかと思はれる、我々は金錢は安逸を貪り奢侈をなし放蕩をなす所の資本であると考えて居る、歐米人は金錢を以て安逸の資本とする考は無い、事業をなす所の資本と考えて居る、我國民は金を溜めれば則ち居宅を美にし衣食を奢り更に放逸に耽るを以て金錢の用をなしたものとして居る此點に於ては歐米人の考とは大に異つて居る、夫故に彼の金錢を愛するのは金錢其物を愛するにあらずして金錢に依つて爲さんとするところの事業を愛するのであると言つて宜い、我國民の金錢を愛するのは安逸放蕩を愛するのであると言つても宜いのである、然らば我國民の拜金を排斥するのは頗る偏頗なる觀察であると言はぬければならぬと思ふ、此の如く我國民の長所といふものは詮索して見ると甚だ少く而して其缺點に至つては頗る多い、然るに自ら己惚れて地球上に於ける最優等なる國民であるといふ如き考を持つて居つたならば決して我短所を補ひ長所を發揮する時機といふものは到來せぬ、夫故に我國民中の識者は國民をして能く國民の缺點を自覺せしむるといふ事を務めるのが先づ進歩に上るところの第一歩であると思ふ。

第二には列國競爭の激甚なることを了解することが必要であらうと思ふ、今日歐羅巴並に亞米利加等の國際的の競爭といふものは非常に激しいものである、不幸にして我日本は東洋の一隅に僻在する爲に其激烈なる所の競爭を感ずることが甚だ鋭敏で無い、交通の便が開けて歐米と東洋との間といふものは接近したとは言

ひながら、歐米諸國間に於ける所の交通の便宜なるに較べたならば實に非常な相違である、隨つて此各國の激烈なる競爭を厭することが甚だ少い、如何に我國民が安逸を好む國民であつても、如何に我國民は猜疑心に富んで居つても、又如何に我國民は小成に安んずる所の國民であつても歐米諸國と相馳逐して行かねければならず又其間に非常な激烈なる競爭が一分一秒の間も已まぬといふことを悟るに至つたならば大に自ら顧みる所があらうと思ひます、此智識を國民に普及さするといふことは改良を謀る所の最必要なる手段であらうと思ふ。

第三には敎育の力に依る外は無いと思ふ、然るに其敎育の任に當る者も又上に述べたところの矯正されねければならぬ缺點を有して居るものである故に頗る困難事に屬するけれ共、併ながら敎育の主義方針をして宜しきを得しめて此缺點を矯正する方向に向はしむる外は無いのである、之が目的を遂するに付いても其效果を目前に期し少しの缺點のあるものを見て直ちに之を攻擊して、長所は之を認めないといふ如き事であつたならば遂に矯正するの日が無いのである、要するに缺點の明かである割合に之を矯正する所の方法といふものは甚だ適切なるとを得ない、是は何人が考へても非常なる名案があつて僅少の年月の間に矯正するといふことは六つかしいと思ふ、要するに其矯正法の根本は國民の自覺心を喚起するにあるものと信ずるのである

(荒浪市平氏速記)

社會問題の歸趣

幸德傳次郎

人の生れて地に落つ先づ發するの呱々は即ち乳を求るの聲である、所詮人間第一着の問題は即ち衣食の問題である、カールマルクス曰く『有史以來一切の社會組織なる者は經濟上の生死及分配の方法が、之が基礎たるものである、政治や學藝や其他インテレクチユアルの歷史は皆な此基礎の上に建ち、唯だ此基礎よりして初めて解釋し得るのである』と、果して然れば現在將來の社會問題の解決に任ずる者の緊要事は、先づ此基礎の如何を講究するに在らねばならぬ、換言すれば現在の生産分配の方法は果して如何の狀であるか、其將來は果して如何にあるべきか、あらしむべきかを見なければならぬ。

世には現在の生産分配の方法、即ち所謂資本家制度を

以て、常住不斷の組織と信し、過去も現在も如此くて將來も亦此くなるべしと信する人が尠なくない、是等の人は全く社會進化の理法を解せぬ瞶々者流で早晩非常の失望驚愕に陷ねばならぬ。

蓋しヘラクリタスは曰く、万物は皆な流れ去ると、孔夫子は曰く、逝者如斯しと、宇宙の万象は盡く是れ新陳代謝の鎖に過ぎぬ、其本末相續き因果相受け、小事の端なく轉々し化々する幾億万年、曾て一徹の常住もなければ、一忽の不斷もないのである、獨り產業の組織に於て此進化の大法則を脫し得るとが出來るてあらう乎、論より證據、古代の歷史は、明白に現時の經濟組織が、唯た一時過渡の事象に過ぎないとを、吾人に說明して居る。

古來幾多の社會組織が盛衰興亡し來つたのは、實に其基礎たる產業方法の進化し革命せるに由るのである、而して予は其變易の迹を大別して、大躰四つに別ち得ると思ふ。

一は　共產制の時代
二は　奴隸制の時代
三は　封建時代
四は　則ち現時の資本家制度

てある。

歷史以前は元より詳確に知り得ない、併し濠洲、南阿パタゴニア等の土人の蕃族の狀態に徵して研究した結果は、大古蠻人の生產分配の方法が大抵共產主義（コムミユニズム）を採用したとは、今の歐洲社會學者の殆と一致する所てある、レウイスモルガンの計算に依れば、人類の初めて社會生活を爲してより約十万年の歲月を經て居る、而して其九万五千年は純然たる共產主義の時代であつた、此時代の所謂社會は無論血族の集合で、其富は之を協同て生產し必要に應して之を分配する、社會即ち家族の團欒で、他の血族若くば部落とは熾に攻伐する代りに、其一社會は實に和樂の社會である、豈又私有資本私有財產なるものあらんやだ、而して吾人の尤も注意すべきは今日社會の技工器械の基礎たる者が多く此時代に發明せられとてある。

論者多くは曰ふ、社會は爭鬪に依て進步する者である若し共產主義の制度にして採用されんか、社會の進步は直ちに休止されねばならぬと、果して然らば吾人人類は古代の共產制度の時代より、直ちに退步し墮落して仕舞はねばならぬ道理てある、而も殆と禽獸と擇ふなき蠢爾たる世界から一躍して、高等なる社會生活

を形成して數万年間之を持續する間に於て、今日の文明の基礎を据へたではない歟、彼の人類は自然力を自家の用に供する發明中、尤も驚く可き靈能を發揮したものは弓矢である、車輪である、舟揖である、是等皆な此時代に發明されて而して今日諸種の技工の根據となつたものである、次て動物の馴養や、耕作や、魚肉の貯蓄や、紡績や、鎔鑛や、皆な當時の進歩の過程を遡るに足るのである、殊に航海用のコムパスの如き、當時の人間が常に天躰の運行を注意して、斯る發明をしたかと思へば、實に人間天賦の能力に驚かざるを得ないのである。

而して是等は元より何人の發明でもない、社會の發明である、時代の發明である、千万人の智識經驗、幾千万年の智識經驗を蓄積し集中した結果であつて、文明の進歩が決して一個人の智能に非す、一個人の資本に非す、唯社會全躰の力に依て初めて見る可きを證するものであらう、是れ單に個人の利益てふとの外、何物をも眼中に措かざる個人主義者の尤も反省すべき點である。

此共産制度の平和を破つた第一の原因は、奴隷の現出である、而して奴隷の現出亦實に經濟上の原因より來つたとを認めねばならぬ、例せば從前の生擒者を屠戮して食つた者が、今度は宥して或は牧者に或は工人に生産的に使用するとゝなつた、奴隷の制度は今や吾人の口にするだも恥つる所であるが。而も當時に在ては實に非常の進歩であつて、又必要なる段階と言はねばならぬ、埃及、アッシリアの智識や、アゼンの藝術や、羅馬の文明や、實に奴隷の賜であるとは、フリイドリヒエンゲルの明言する所である。

奴隷と名くる生産機關の現出し増加すると共に、私人の手に富を所有するとが多くなる、從つて交換が始まる、利益を目的とする商品が出來る、其媒介として一大怪物、即ち金錢が出來る、私有財産から蓄積して、富を以て富を得る手段が出來る、而して强盛なる蕃族が領土を擴め殖民地が繁昌する、交通も便利になる、人口も増加する、從來の小社會を成すのに唯一のセメントたりし血縁は、於是て全く効力を失ふて、首長が生し階級が生し、同時に共産の制度は其迹を絕つに至つた。

次て戰爭は益々盛に奴隷は益々多くなつて、生産は一に奴隷に依て爲される、希臘羅馬の社會は實に其基礎を奴隷に置て、奴隷の爲めに養はれたのである、レビ

ダスが其大兵を戰場に留た費用も、奴隸の生產であるハンニバルが十七年間伊太利に出陣したのも西班牙の銀坑に於ける奴隸の勞働の結果である、而して奴隸は獨り耕作及び採鑛に從事するのでなく、多くの技工、多くの藝術も亦彼等から出るに至つた、プラトも奴隸であつた、イソップも奴隸であつた希臘羅馬の市民が其自由を誇り其文明を誇り嬉々洋々の生活を送つたのは唯た彼等に幾十倍する多數の奴隸の自由と幸福を犠牲としたる結果である、而も此憐れなる階級は、當時の社會に必要なる生產機關として、已むを得ざるの制度であつたのである。

然るに奴隸の制度から生した社會の亡滅に歸して一轉して封建の制を現したのも、亦是れ經濟の方法之が原由を爲したのである、土地は耕耘し盡された、鑛山は採堀し盡された、奴隸の膏血は殆と絞り盡された、そして羅馬末年の奢侈淫逸と腐敗の費用の要求は限りがない、於是て盛んに攻伐は始められた、領土の擴張は始められた、貢租は無限は誅求された、而して内部の潰頽と外部の叛亂とは一時洪水の如く羅馬の文明を洗ひ去つた。

羅馬に通するの大道は荆棘となつた、天下瓜分して、小區域の生產、小區域の分配は、封建制度の保護に托せざるを得ないのである、於是乎、農僕（サーフ）である、自由勞働者である、彼等の生產は自家の用を充たし、封建君主に納租し、餘り有れば即ち地方の小市場に輸したのである、於是て豈に貧富の懸隔あらんや、經濟の競爭あらんや、次て城市の漸く繁榮し、自由勞働者の富漸く蓄積するに從つて、彼等が生活の獨立と自由とは中世紀の美術技工の進步に於て、大なる貢献を爲したのである、而して自由勞働者の生產益々增加して、農奴の必要益々減し、彼等の解放漸次に行はれて、生產分配の方法は極めて無事に太平に且つ和樂なる現象を呈して居つた、彼等の生產は其納租を以て封建君主の保護に酬るの外は、個人の器具を以て、個人の生產に從事し、而して個人の所有、消費、交換の自由を有した、曾て資本家の壓虐を見ぬのである、賃銀奴隸に墮するの憂ひなかつたのである、但た時勢の推移は長く是等經濟組織の狀態を存續するを許さない、所謂殖產的革命は封建の舞臺を覆へすべく來つた。

所謂殖產的革命は、二種の勢力の發現である、一は市場の擴大である、城市の繁榮、交通の便利より經濟的疆域は益々擴張して、地方的より國家的に、國家的よ

り世界的となつた、就中喜望峰の回航、亞米利加の發見は、當時產業の組織に大變化を促した、商品生產に向つて無限の增加を促した、從來個人的生產機關は到底之に應するに堪へぬ、資本の集中、協同的生產方法於是て來る、二は即ち蒸滊機關の發明である、從來の個人的產業は全く之が爲めに打壞された、生產は全く社會的協同的となつた、此二種の大潮流は注いで殖產的革命となつて、今日の資本家制度を出したのである。

如此く人類衣食の生產分配の方法は、決して常住不斷でなくて、進化の氣運に從つて、自然に幾變遷を經過したのである、故に今日の資本家制度を以て常住不斷の物となす可らざるは勿論、現在及び將來の進步が一に資本家の賜で、吾人人類は全く資本家なくして生活し得ずと思はゞ、是れ大なる誤謬である、彼のモルガンや、ロックフエラーや、カーネギーが現時の文明を作つたものではなくて、現時の文明が却つて彼等を作つたものである、市場の擴大が生產の增加を要求し、生產の增加は社會的生產を要求し、社會的生產は、資本の集中を要求し、資本の集中は彼等資本家の現出を要求した、而して彼等資本家は實に此の歷史的氣運の命令に余義なくせられて、資本集中、生產增加てふ天職を成遂けたのである、夫れ唯た其天職を成遂けた、彼等は最早現時社會に無用の贅物とならねばならぬ、彼等は其集中せる資本、其增加せる生產を以て、永く彼等自身の用に供するを許されぬのである、然り資本家制度も決して進化變遷の法則を免るゝことを得べきでない然らば則ち彼等は如何に變せんとする歟。

予は今の資本家制度の社會に及ぼす趨向に就て甚た多きを言ふを要せぬ、社會的大產業は個人的小產業を壓倒した、從來獨立の生產者は變して資本家の雇役者となつた、所謂賃銀奴隸なる者は生した、而して資本の集中益々大なるに從つて賃銀奴隸の數は益々增加せざるを得ない、其數增加して生活は益々苦しくならざるを得ない、而して一面に於ては資本家彼等自身の競爭激しくなる、生產益々增大して市場は欠乏する、次で來る者は恐慌である、一千八百廿五年以來生產過剩の爲めに來る所の恐慌は、殆と十年每の定期となつて、而して恐慌至る每に、資本家の倒產、工場の閉鎖、多數勞働者の失策、其結果は獨り優勝なる大資本家の暴利である、如此にして今の經濟界は全く弱肉强食の修羅場、品よく言へば自由競爭、惡く言へば即ち無政府である、社會は何時迄も此無政府の狀態に堪へぬので

ある。

於是乎ツラストは起つた、資本家の競爭を休止せんが爲めに、生產を制限せんが爲めに、商品の價格を保たんが爲めに、ツラストは實に已むを得ざるの勢ひてある、世には自由競爭を以て社會進步の唯一原因となす論者が多い、併し競爭には必ず勝敗の決がある、今やツラストの起るに及んて最早競爭と進步との餘地はないのてある、生產增加の爲めに生した資本家は、生產制限の具となつた、有利の產業は遂に少數階級の專有となつた、社會全躰は彼等少數の爲めに全く其死命を制せらるゝに至つた、モルガンやロツクフエラーは事實的に工業的封建君主となつたのである。

故に勞働者は直に彼等より其生產を恢復せざる可からず、社會は彼等より其土地資本を恢復せざる可らず於是乎勞働組合は益々彼等に對して團結を强めて來る國家の干涉、非ツラスト立法の必要は到る處に叫ばれる、資本家制度の弊毒は今や其極度に達して、正に一轉の機會を待ちつゝあるは今日歐米の實狀てはない歟予は遠からずして更に產業的大洪水の天に滔するを疑はぬのてある。

次て來る者は何ぞ、言ふ迄もなく、生產の機關を資本家の專有より奪ふて、社會公共の手に移すものでなければならぬ、社會協同の生產物を資本家の手に推積せずして、社會公共の必要に供するものでなければならぬ換言すれば即ち社會主義的制度でなければならぬ。社會主義の希望は、空想でもない、夢想でもない、古來歷史の進化する所以の理法は現時の社會が到底之に歸着する者なることを示して居る、之に忤ふ者は亡ひ、之に順ふ者は昌ふ、予は將來の社會問題解決に任する者は、一に此方針に從ふの外なきを信するのである。

我國民體育の現在と將來

左は我國の衣食住改良に就て最も熱心なる主唱者たり且つ實行者たる氏が講演を速記同志社員の筆記したるものなり

萬國躰育會日本委員代議士　山根正次

諸君、本日は我邦體育の現狀に就てお話し致さうと思ひます、此中にお集りの方々は大多數青年學生の諸君である、故に諸君の中には大學者となりて百世に渉る

處の眞理を極むる方々もありませう、或は大政治家となる方もあらう、或は大事業家となられる方もありませう、其他大宗教家大教育家色々の方が混つて居らるゝに相違無い、此中に於て私は訥辯をも顧みず淺學をも顧みずして御話することの出來るのは私の最も光榮とする處であります、私は此の未來の豪い方になる方々の前に於て御話すると云ふ光榮を得ると同時に諸君に對して非常なる心配を持つて居るものであります、それはどう云ふことであるかと申しますると、斯の如き豪いものになれる、大學者になれる大發明をされる處の人々であるのでありまするが故に、私は殊更心配のことがあるのであります、則ち諸君が若しも千萬一其の素志を遂げないで目的を達することが出來ない樣になつてはどうであらふかと云ふことの心配を持つて居るのであります、豪傑たること能はざる時に障害が起りましたならばどうでありませう、障害は始終起り易いものである、それを私は氣遣ふて心配して居るのであります、何故かと申しますると人間と云ふものは生活に依て此の世に居るものであるから、若し此の生活を失つた場合に於ては言はぬでも分つたことで死んで仕舞うのである、死んで仕舞ふ以上は致し方も御坐いませぬ、如何なる大壯圖を抱いて居つても死んでは實に駄目であります、それであるから私は諸君に於ても亦豪傑の事業を成功しない中に身體が先づ倒れる樣なことがあつては遺憾千萬であるから、是が即ち私の心配の堪へぬ處であります、それであるから私は爰に體育と云ふことを御話致すのであります。

今日青年諸君が學問なり事業なり日々勤勉して居らるゝのは諸君の目的を遂せらるゝが爲めでありませう、然るに諸君にして體育と云ふものが足りないで身體が薄弱であつた時はどうでせうか、如何に心中では勇氣が勃々として居つても殘念ながら目的と云ふ者を失はなければならぬのであります、凡そ身體の强壯と云ふものは如何なる人間にも必要であります、それは身體が弱くては何事も出來ないからであります、昔の諺に「命有ての物種」と云ふことがあります、生命と云ふものは身體に依つて保存せられて居るものであるから、一朝身體が危くなると生命も自ら危くなるのであります、生命が先きに無くなつて身體が後に生存されるものではありませぬ、生命を保つと云ふ上に於ては先づ身體の健全を謀ると云ふことが自然の法則でありませう、さうして身體と云ふものは强壯でないと充分に働

けない、勞働即ち直接に手足を使ふものばかりではありませぬ、腦力即ち知識や學問を以て働いて居るものも同様であります。

身體が强健でないと其の腦力を充分に働かせることが出來ぬのであります、徃時は知識のみを貴んで體力と云ふものを輕蔑して居つたのであります、是は實に間違つたことであります、世の中の諺に「大男總身に智慧が廻はり兼ね」「馬鹿のノラ肥り」と云ふ樣なことがある、成程病的に太りたる者にはかゝることも有りましようが是は體格の充分立派に發達したる者を輕蔑した言葉であります、今日ではかゝる言は據ろのない[illegible]語であると云ふことは分りまして御坐います、勿論健康でも無く只大きい計りの男が何時でも豪いと云ふ譯ではありませぬ、（大笑）併し乍ら身體が健康で無ければ充分なる仕事が出來ぬことは慥かであります、成程日本人は矮くても割合に腦漿が多いと云ふことを田口博士が云ふて居ります、又獨逸人は大きく見えても必らず皆が皆豪いと云ふ譯はありませぬ、併し大きな奴に豪い奴も居ります、否豪い奴は大概大きい、「ビスマルク」抔と云ふ者は六尺以上の人でありました、曾てビスマルクが日本の右大臣岩倉公を見た時に（岩倉公は私の如き一寸法師的の人であつたが）其の時に「ビスマルク」が言つて居る……大きな男だ……「矮(ちいさ)な男は大きな男である」と云ふ言は獨逸の諺にあります、それは即ち智慧に絡(から)まつて肥らぬと云ふことを謂ふたことであります、それを言ふた「ビスマルク」は偉大なる大きな身體を持つて居つた人であります、是はチョッと醫を申したのでありますが大きな人にも總身に智慧が廻り兼ねの方でなしに好く廻はつた大きな奴が中々多いのであります、（拍手）夫れて身體と云ふものが健康を欠いて居ると云ふことては學問上にも充分にやることが出來ませぬから全身の腦力の發達と云ふものが遲くれて參るのであります、此點は將來に仕事を持つて居る靑年諸君は殊に注意を加へねばならぬ處のものであります。

私は體力の必要を認めねばならぬ一例を御話し致します私の知人に一人の娘をもつて居つたものがあつた、妙齡になりましたが故にどこかへ片附けねばならぬと親は始終心配して其子の嫁入先きを見附け出さうと頻りに探がして居つた、或る處の周旋人が言ふて來た、斯う云ふ處に豪い奴が居るから御前樣の阿孃さんを遣つたら好からう、資産もあり學問もあり位記も持つて居

る高等官でもあり學士でもあると云ふた、娘の親は大喜びて親類の一人に斯う云ふ處から貰はれたがどうてあらうかと云ふことを相談した、さうしますると其の親類のものは成程申分の無い佳婿てあるが、其の婿の身體の强健は如何てあるかいくら他の條件が立派ても後來即ち夫たる可き人が强健てない以上は仕方ないてはないかと言ふた、そこて御醫者から手を廻はしたり色々の取調べをしたことがある、さうするとどうもあの人は弱い、如何にも頭の働は今日はよい樣てあるが體質が既に薄弱てある、斯う云ふ處に娘を遣つた日には後て娘が難儀をするてあらうと云ふことを云ふたのてありますから其の緣談を謝絕したと云ふことがありまする、相違ありませぬ、其の親類の考へた如く其の者は三四年經ちますとゲッゲッ痰を喀いて終に肺病に罹つて死んだのてあります、(大笑)それて若し此の處に遣つて居つたら其の娘は非常に不仕合になる、こんな場合に於て實に弱い者は困る、血統をよく正さねばならぬ丈夫なる所に遣らねば大なる所の目的は達することは出來ないのてありまするが故に、假令其のものは一時學問がよく出來ても立派なる位置を占めて居つても役に立たぬものである、それて斯樣に身體の不健康なる人と云ふものは成業の人ても非常なる不幸を來すのてありまする。況んや前途洋々たる所の青年諸氏にあつて體力薄弱と云ふことは、由々敷所の一大事てありまするから、殊に體力の必要なる所以はよく御分りにならうと思ひます、どうしても體力が必要と云ふことになりまするとどうすれば體力が盛んになるかと云ふ問題が起るのてあります。

體育を學校時代に局るの非

私は此の體力を盛んにする方法と云ふものは此の體育と云ふ事を盛んにしなければならぬと考へるのてあります、是は私が言ふ迄もなく人の既に言ひ盡して居る所てありまするが、併し今日我國に於きましては一般に體育の發達が至つて幼稚てあります、體育と云ふものは私は從來熱心に唱へて居る所てありまするが此の方法に就きましても種々研究を致して居ります、それに就きましては現在の一般の風俗を改め學理に適當した體育をやらなければなりませぬ、諸君御存じの如く此節小學校に於て何れも體操をやつて居る、身體の運動を怠らない樣にと云ふことになつて居るが、是は甚だ宜しいことて御坐いまする、併し此の體育と云

ふものは特に學校の生徒のみではない、何人でも必要なものであります、少年でも老人でも體育は死ぬまで必要であります、然るに日本人は學校に居る間は體育と云ふことをやりまするが學校を出た日にはもう體育は全く學校と共に止めて仕舞ふといふ樣な次第であります、私は先年官命を奉じて歐米各國を廻はりました其時に又日本體育會の幹事でありました故に萬國體育會にも出席を致しまして、日本の萬國體育會の委員に擧げられて居りまする、其時に於て歐米各國の體育の狀況を視ましたが何れの諸國に於ても驚くばかりに發育して居りまする、どの國に往つても體育が盛んで御坐りまして、有ゆる階級一切の人々は皆體育と云ふとを熱心にやるのでありまする、何れの場所でも多人數來集する所に於ては倶樂部と云ふものがありまして、必らず一定の運動場が設けられて居りまする、そこで種々の機械が具へてありまして青年も老人も盛んに體育運動をやつて居りまする、私は歐米人と云ふものは身體を大切にして之を發育させることは熱心であると云ふことを視まして深く感じて居るのであります、此の間萬國博覽會の時に往つた、のみならず前に參つた際に於ても充分に此の體育の發達のことに就ては認めて居りましたが、再び參りまして尙更歐米諸國に於て此のことが盛んになつて居るのを視て益々感じたのであります。

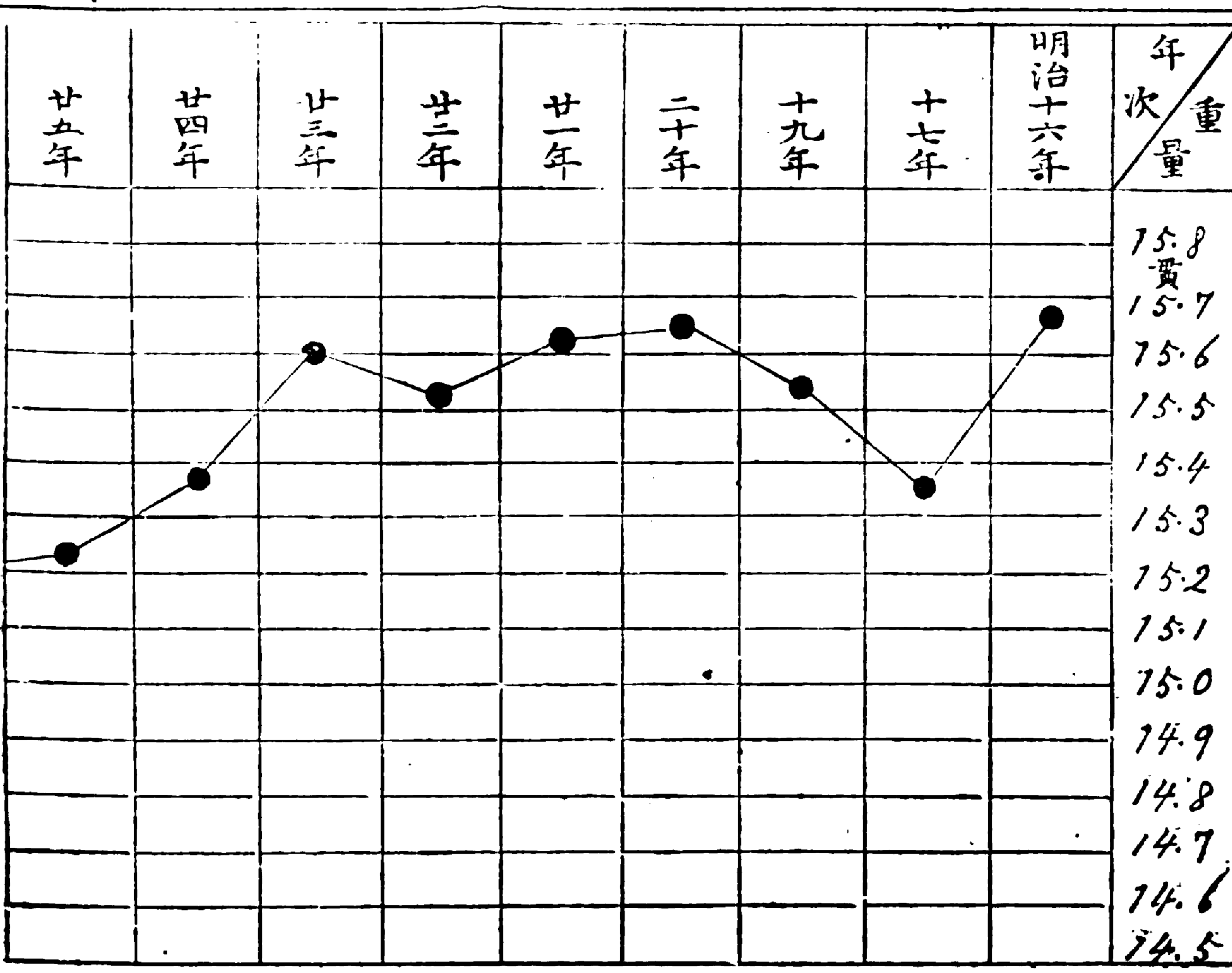
一體此の體育と云ふものが盛んになれば總べて人の身體と云ふものが强壯になるから非常に利益がありまする、其の第一番に身體と云ふものが强健でありますると總ての疾病に侵されることが少くなるのでありまする殊に又傳染病の如きに於きましても病氣に罹ることが少ないと云ふのであります、一定の業務に從事してよく働くことが出來るのでありまする、それで一國の學術も經濟も自ら進歩することになるのであります、私は過日來の選擧運動の演說を致して居りまする中の一節に體育のことを言ふて居りまする、其のことは何んであるかと云ふと、日本帝國をして後來非常な盛んな國にならしむるには何が一番よいか、どうしても此の生產力と云ふもの、日本の生產物が澤山出來て其の物を海外に餘計出して先方の金をフンダクル樣にしなければ迚も日本の國は貧乏になる、其の生產力の基になるものは何んであるか腕力であると云ふことを說いて居るのであります、（拍手）腕力が盛んにならねば長い間の勞働に堪へると云ふことは出來ないのでありま

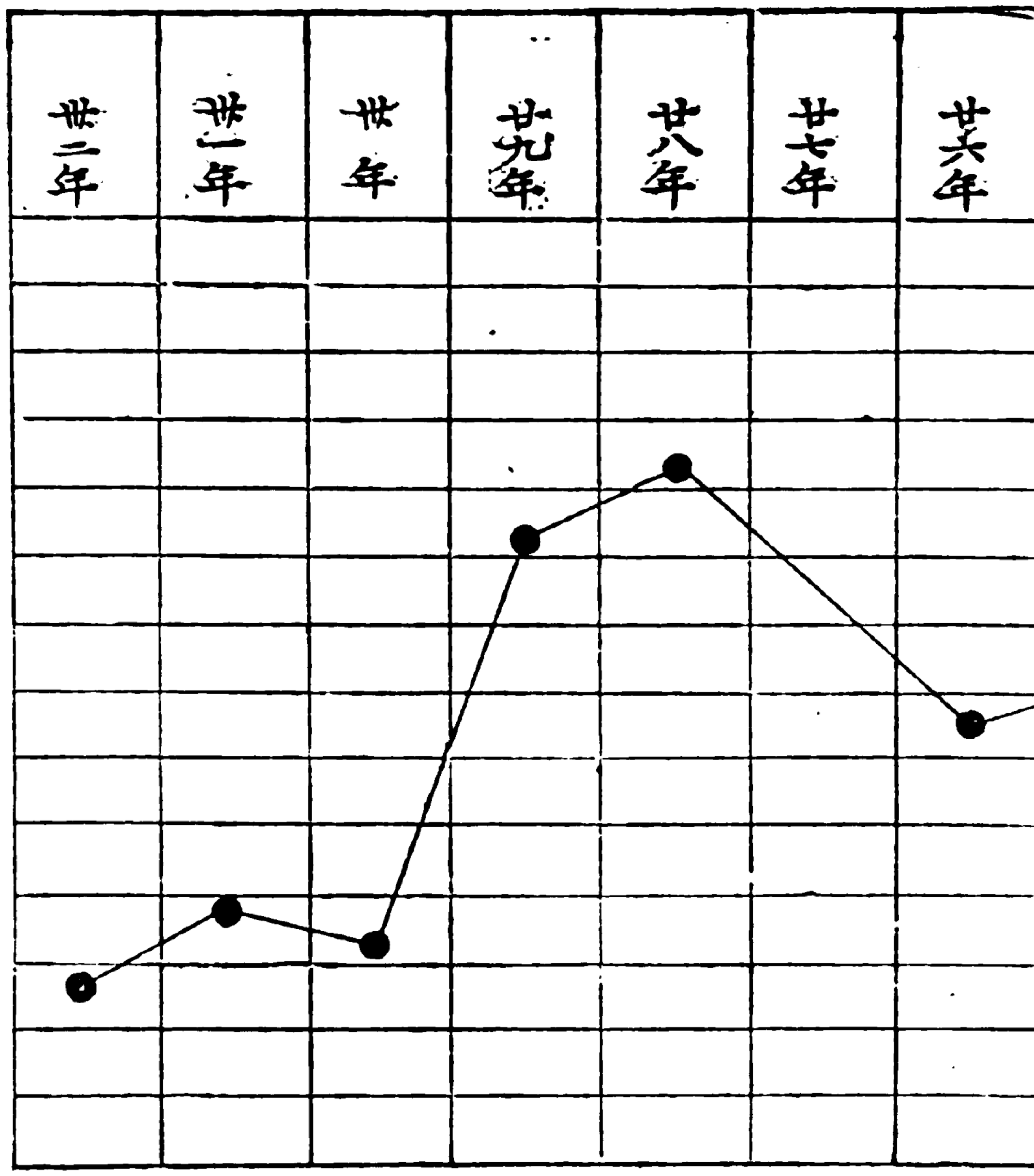
すそれで此の生産力の基になり富强の基をなす所のものは即ち此の身體の强健にあるのでありますそれであるから此の體育と云ふものが基になつて身躰が丈夫になれば生産力も從つて多く、金持ちになつて乃ち其の國富み其の兵は强いと云ふことになるのであります然るにそれと反對に體育と云ふものが衰へますると終に其の國は貧弱に陷るのであります、貧弱に陷ると云ふことは免れぬのであります、私は我帝國内の壯丁の體力に就きまして調べた所のものを見ると云ふと我國一般の人の體力と云ふものは段々惡るく成るのでありまする、恐るべき傾向を呈して居るのでありまする、故に私は此の體育論を非常に唱へねばならぬと思ふて居るのでありまする。

▲我國兵士の體量

（本表は陸軍省調査の年報に依り製作せしもの我國兵士の各年次に於ける體量なり）

此間の日本體育會が博覧會へ出品したものには三十三年迄のものが出て居ります、第一は明治十六年に於て取つた兵隊の重量でありますゝ其時に於ては日本の壯丁の重量の平均と云ふものは十五貫六百七八十匁あ



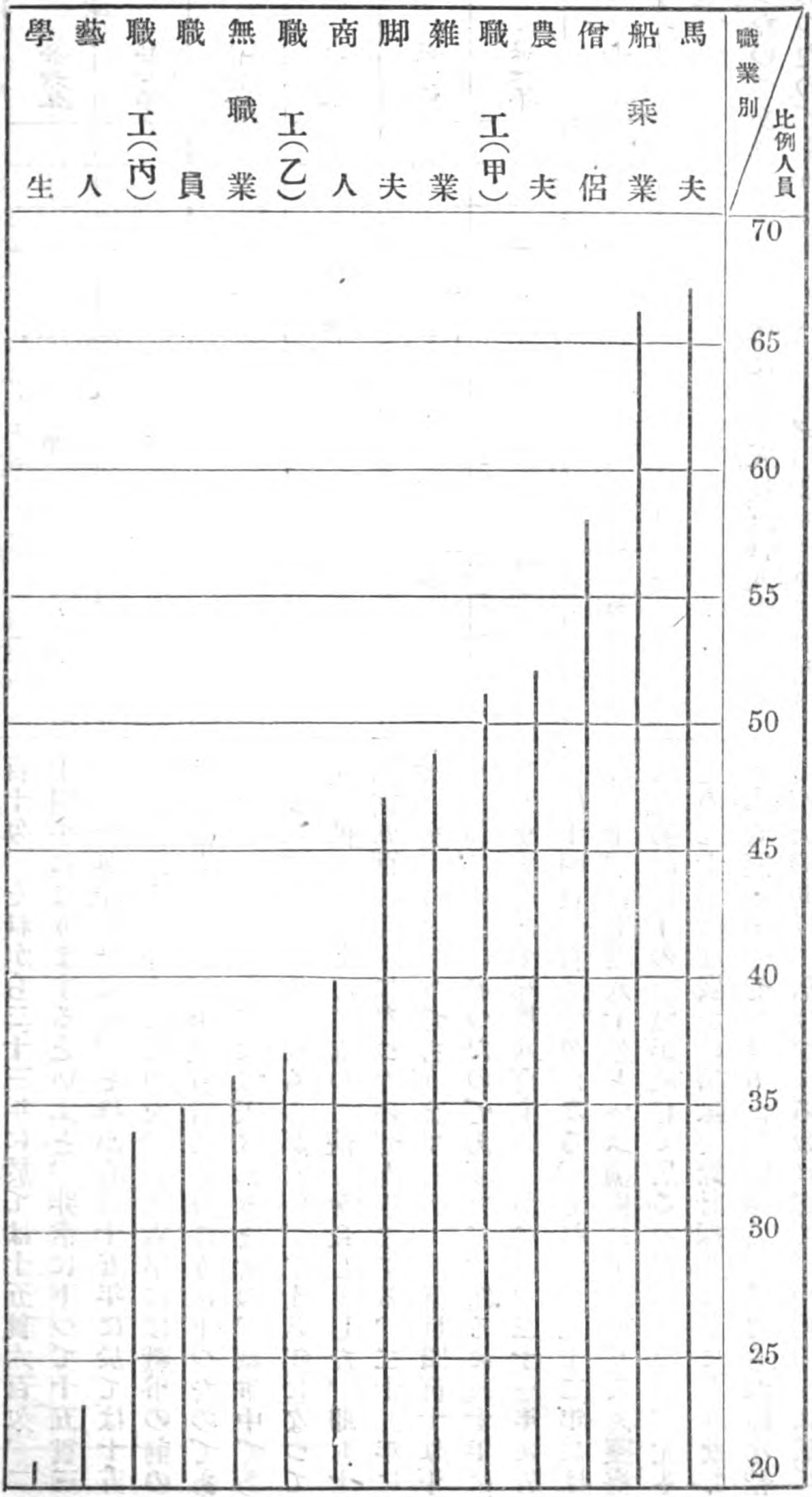


つたのであります、十七年には十五貫三百八十匁斗りあつたのであります、それから少しよくなつて十九年には十五貫五百二十匁斗りになる、それから明治二十年には十五貫六百三十匁斗りになつたのであります、

二十一年には十五貫六百匁二十二年に於ては十五貫五百十匁、それから二十三年に於ては十五貫六百匁、二十四年になりまするといふと、非常に下つて十五貫三百八十匁斗りになる、それから二十五年に於ては十五貫二百二十匁斗りになつた、二十六年には戰爭の前の歳でありまするが十五貫百八十匁斗りに下つたのでありまする、二十七年には表はありませぬ、戰爭中でありましてそれを拵へたものがない、二十八年になつて復た俄かに大分よくなつて恢復を致しました、即ち十五貫五百匁斗りになつたのでありまする、二十九年になりまするとどうでありまするか、十五貫四百十匁斗りしかない樣になつたのであります、然るに三十年になりまするど十四貫八百十匁しかない、三十一年に於ては十四貫八百八十匁になる、それから三十二年には復た十四貫七百八十匁といふ鹽梅に――斯う云ふ鹽梅に次第に壯丁の重量が減じて居るのであります、尤も此の三十年には俄かに兵隊を餘計採ることになりましたから惡るいのでも仕方がない採らねばならぬ樣な結果が大變助けて居りまするけれども、平均の上に於て重量を減じて居ることは諸君に於て分つて居りませう又壯丁の職業別躰格表を見れば

第二表

▲職業別體格表

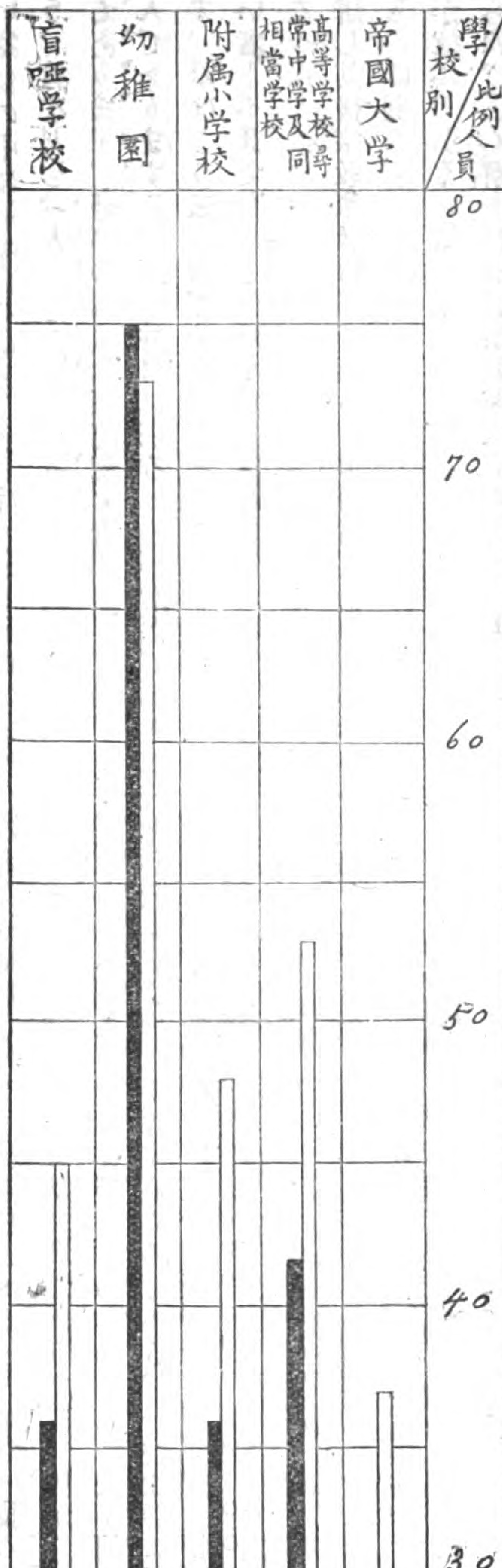


本表は明治卅二年東京市徴兵適齢者四千五百六十三人中甲種合格者の百分比例なり

是は體格を職業で分けたのであります、甲種に採られたもので何が一番餘計であるかといふことを職業別に據つて見ますると、馬夫といふものが第一であります る即ち馬子の類實際馬を牽いて歩るく人である、或は馬丁の如きものを云ふのであります、是が即ち一番てありまして甲種に屬する中でこれ丈の割數を占めて居る、六十五人强でありますそれの次に來るものは船乘業であります、是は常に船に乘つて艫を推して多くは好い空氣の中に逍遙して居る即ち旨いものも食ひませう、肴などを、(大笑)それから運動もよい、それが二番であります、是等の人は大概筒袍を着てよく運動する人でありまする、第三番目に來るものが僧侶であります、是はどう云ふ譯で是丈のことになるか、今迄は弱い者—不具であるとか何んであるとか云ふ者が僧侶になつたり或は私共の樣な醫者になつたのであります、併し其後宗教家敎育家であるとか醫者であるとか云ふものは弱くては出來ないと云ふことになつたのであるが故に、かく成績の好いのであるかも知れぬ、併し分らぬ、善く解すれば、宗敎家は道德心が俗人に勝りて居るから至然花柳病等に罹つた者が少ない故かとも思はるゝ(笑)それから次は農夫であります、農夫に次ぐ者は職工であります、其の職工はどう云ふ職工であるかと云ふと甲種職工則ち石工であるとか或は大工とか即ち四肢の勞働をさするものであります、其の次は雜業其の次は脚夫、其の次は商人であります、それから今度は職工の乙と稱する者、是は料理人だとか理髮師の如く常に家の中に居つて四肢の運動普からざる者であります、それから次が無職業それから今度は職員であります、それから職工の丙であります、丙の職工なる者は裁縫師であるとか靴を拵へるとか始終一肢のみを使用して下肢の運動を缺く者であります、尻から二番目が藝人であります俳優であるとか噺し家とか何んとか云ふ者は皆之に屬するものである、一番仕舞に屬する者は何んであるかと云ふと即ち學生である、此の中には大氣焰家も居らう、大政治家も居らう、大宗敎家も居らう(大笑)然るに實に賴もしくない、僅に席末を瀆して居る樣な有樣であります(拍手)

次でまた爰に示しましたのは文部省直轄の學生の生徒の體格百分比例であります、是はどうであるかと云ふことを御話致しまするとと、此の黑線は女であります、白線のは男であります、此の百人の中に對してどれ丈健康な者が居るかと云ふ比較表でありますが、盲啞學

文部省直轄學校 學生生徒體格百分比例表



本表は明治卅一年文部省調査の報告に依る　本表白線を劃したるは男黒線を劃したるは女

校に於きましては百人中女の方で健康と認める者が三十六人、男の方で四十五人でありまする、然るに幼稚園に於きましては身體檢査の結果健康と云ふ者がどうてあるか七十五人程女の方で丈夫なと認める者がある男の方は七十三人でありまする、然るに此の幼稚園に於て斯の如く立派であつた所の者が既に小學校に這入ると斯の如き有樣に陷るのでありまする、即ち三十六人になつて仕舞ふ、即ち盲啞學校の生徒と同じことになつて仕舞ふ、男の方は四十八人でありまする是は何んであるか、是は後來の教育家は餘程考へねばならぬことゝ思ふ、日本の國民なる者が學問をすると云ふことに就ては大變に力を入れて居るのでありまず、小學校時代から擔がれぬ程の澤山の書物を持つて、或は地理を習ひ或は算術を習ひ實に六ヶ敷いことを限りある

小さい腦へコテ〳〵踏込んで居るのであります、物を稽古する上に於ては矢張り即ち體育と云ふものを伴はねばならぬ、香の物に茶漬を喰はして六ヶ敷い學問をさして居るのであります、營養は足らず、頭には無理にツメ込む、直ぐさう云ふ結果が即ち小學校に於て既に不健康の者が澤山になつて健康者が僅にこれ丈けに下つて來るのであります、それから今度は高等學校尋常中學校それに相當する學校でありまするが、此の中學時代になると大分體育と云ふことを重んぜられて居る爲めと又此の間が一番椀白盛りて一番盛んなる頃でありボートレース等其他色々な體育に身を當てはめるからして、體育の力が大分よくなつて居る、とは云ふものゝ是は少しばかりであつて、百人中眞正の健康なる者が女が四十二人男が五十三人しかないのでありまする、それから又席末を瀆して居るのが大學生であります其の大學生は僅に三十七人となるのでありまする。

（未完）

余の見たる日本の國病

博士　リギヨル

三　悲しむべき現時の教育法

昔しプラトーンがアテナの民衆の語るらく『吾人は青年の教育に最も適應する學術と、青年子弟が人物たるべき必須の藝能とを發見する爲めに絶えず苦心しつゝありと』。

適々此語を借り來りて日本國民に贈らんかな。

維新の天日を拜するや日本の蒼生飢ゑ渴くものゝ如くに世界の學術工藝を吸引して、國家の隆運の爲めに光榮の爲めに息をもつかず飮み下しつゝ消化しつゝあり。抑も國家を隆ならしむるに於て最も必用なるもの唯一つあり、他無し即ち國民自ら教育する事即ち是れなり、譬へば教育は唾液の如きか、能く之れを喉に送り而して共に入りて胃の消化を助く、教育を荷にせる支那の國、朝鮮の國、安南の國、暹羅の國、波斯の國土耳古の國、凡て東洋諸國は日本を除くの外多く消化不良の病に罹れり、而して皆貧血、焦瘁、元氣を缺く。歷史上の『所謂大世紀』と稱する膨脹時代は日本に於ても他國に於ても皆教育の結果なりし。要するに教育以外に國家隆盛の源を求めんと欲するも得ざるなり。今日日本國民が此道理を觀取して、山村僻地に至るま

で青年子弟の教育に非常なる熱心と忠實とを以て、之れに就事せるを見ては誰か嘆賞せざるものなからん。然れども是れ半面の現象なり、余をして忌憚無く遺憾とする所を語らしめよ。

抑も國民教育に於て日本は何故に自國の祖先傳來の教育法に於ける善なるもの美なるものに注意を拂はざるか。

無論自國の道のみにては今日の時勢に對して不完全にして不適當なる事は誰人も能く知る所、今日の智育をして漢書を讀むに止まらしめば國民の精神を狹隘なる圈内に押し込めて、現代の社會に於て生活せしむる事を得ざるを知る、されど吾人の云ふところは是に非ず教育の實行的効果なり、余思ふに昔の日本教育は効果の點に於て悉く實行的なりき、故に智識に於ては甚だ貧しき教育なりしも商人は商賣往來に就て知れる所を實行し、其他の庶人は庭訓往來を實行し女大學を實行したり。されば教ふるといふ事(教授)は手段にして育てるといふ事(教育)を以て目的とせり、學ぶといふ事は人物を修養する事にして現時に於けるが如く單純なる理論上の事にはあらざりしなり。余の言はんとするところ則ち是れなり。

然り、かく實行に重きを置きしを以て昔の教育はの點に於て缺け自己の職掌に必用なる事を知るに過ぎざりし、武士は勘定を知らず、庶人は無筆を以て能事とせり、否寧ろ其職業以外に算筆を學ぶ事能はざりしなり。然れども今や自由の勢力伸張して殆ど總ての方面に亘り何人も資力あれば如何なるものをも自由自在に學ぶ事を得べく、布衣より起りて侯伯たるを得べきを以て學問の欲望急に高くなりて殆ど底止する所なし、こゝに於てか學問に對する廣大無邊なる趨勢と顯要の位地に對する計畫飽くなき欲望とは無量無數の憂ふべき現象と悲しむべき結果とを生ずるに至れり。見よ破産する父兄幾何ぞ、健康を害する青年幾何ぞ、代議士たらんと欲して得ず、大臣たらんと欲して得ず、其空想したる位地を欲して得ず、幸に學業を終へたるものも餘りに學者過ぎて農工商の業を輕蔑し、官位をのみ望みて、寧ろ社會に信用を博する眞面目なる位置に就くの操守あるものなきに至れり、かくの如く今日は空想野心の民、無用の人物を增す。彼等は一定の職業をも有せず、一定の位置にも就かず、而も之れを誇れり、彼等は唯空想に生活して自ら社會に有爲なる人物と思へり。或時は文學者となり、或時は辯護士となり、甚し

きに至りては改革者となり豫言者となり、進歩主義を唱へ、社會主義を唱へ、共和主義を説き無政府を説き常に奇怪なる又危險なる議論を撒き散らしつゝあり、而してかく寸毫も社會に益なき人間にてありながら、彼等自身には社會の爲めに憂ひ社會の爲めに盡せるものと思へり。若し今後の日本に於て改革の時來るとするも此種の人間將た何の用をかなさん。

かく學問といへる熱病が、劇しきにも拘はらず學問其物が案外に尊ばれず。人らしき人を作るに於て昔程の効果なし。これ他なし學問を學問の爲めに學ばざるが故なり、今人は古人の如く人物たらんが爲めに學ばず、眞の學者たらん爲めに學ばず、只金錢と位地と空想と虛僞とを得んが爲めに學ぶ、こゝに於てか知る。青年が學校に於て學びたる學問なんどは未だ以て人物たり學者たるに足らざるを、學校教育の目的を見ても唯其能力を養成して肩書を得る資格を造るのみなり。學校にては學問の鍵を得て社會に生活する第一階梯を得たるに過ぎずして現實の生活は學校を出てゝ後に始まるものなり。而して彼等青年は此鍵を捨て準備を抛て而も社會に生活するを以て、其行動の正路を踏む能はざるは論なきなり。

今日の青年如何にも記憶想像等の作用は寧ろ過大に發達せりと雖、判斷(實行的智識)意志、良心、心情等は決して發達せりといふべからず、故に其頭腦の中は店舖の如し種々雜多の品物を重積せるものはあれども、其思想に順序なく其行動に規矩なく其心情に高尙優美なる點を求めて得る事能はず。怪む勿れ其之を有せざるを、彼等固より之れを求めんが爲めに學びしものに非るなり。其種々なる知識は皆賣らんが爲めに之れを飾り列ねたるものゝみ、必ずしも自己の所有品にあらざるなり。

以上の如き日本の教育に於ける最大の缺點を補はんと欲せば、意思の修練即意育をして知育と併行せしめざるべからず、否寧ろ智育以上に出でざるべからず。意志は本來實行的能力なり。理論を以て養成せらるべきものに非ず、唯實際の練習によりて規畫せられ、左右せられ操縱せられ又堅固にせらるゝものなり。然るに此意志の練習こそ今日日本の教育界に最も缺けたるものなり。裁判所と牢屋に行きて見るに、其所には必ず智識の足らざる人物のみに非ず只意志の足らざるもののみ多きなり。

昔は意志教育に重きを置けり、寧ろ嚴に過ぎて機械的

に流れたりけり、然れども嚴に過ぎたるも今の如く規律なきに比較すれば余は寧ろ其嚴なるを取らん哉。勿論現時の青年には往昔よりもより多くの自由を與へざるべからず、但し之を與ふと雖禮讓と義務とを打捨つる迄には至るべからず、必定人を尊び己を尊ぶものは幾分か自己の言動を束縛して幾分の不自由を忍ばざるべからず。此點に於て古今學生の差天地も啻ならず。然れども今日の學生がかゝる不規律なる生活をなせるも一は境遇の然らしむる所といはざるべからず。如何となれば今日の青年は家鄉を離れ父母親族と別れて同じ年輩の友と共に住みて、恰も林の若木の如く相互の尊敬もなく規律もなく、多くは我儘氣儘に成長せしを以てなり。されば今更禮讓道義などを持出して其規矩に當て箝めんと欲すも彼等其苦しさに耐へざるべし。されば余は切にいふ、青年者よ、德行は青年の時に非れば學ぶ能はざる事を記せよと。

年少の時に於て都會の腐敗せる風俗を見、巷の風塵と害毒と謬論とを飲みて想像も智識も感情も俗化し攪亂せられたるもの、其當初は靜かにして外に現はれず、齡二十を過ぎて、人間の利欲を生ずる時、殊に高慢、驕奢、淫佚の念を生ずる時、心中に鬱積せる汚濁が憤然として湧き出づるなり、かゝる時に及んでは道義の念は全く破壞せられ、智識の進步止み感情も亦狂ひて天日の雲に覆はれし如く慘憺たる境に到るものなり。之れを精神の腐敗といふ、畏るべきかな。

かゝる惡結果を見て、小ざかしき輩は曰はく、敎育とは青年が天性より受けたる總ての弱點を、大金を擲つて發達せしむる術なり、又天性が人に與ふる事を忘れたる弱點をも附加する術なりと、かゝる極端なる定義は寧ろ學校よりも牢屋に適中するものなり、然りと雖全く當らざるに非ず、屢々事實を以て社會が之れを證明する事あり。道德的制裁を重んぜる敎育者は少しく此點を顧みる所あらん事を希ふ。

（未完）

▲獨逸に於ける學者の所得

獨逸は學者の最も多く、且つ最も貧乏なる國なり、最近三百五十人のプロフエッサーに就て其所得を調べしに、百九十一人は一年五百圓以下の收入、八十七人は八百圓以下五百圓以上、七十四人は二千圓より八百圓まで、而して年俸一万圓を得るは僅に四人。



海外大勢

海上に於ける獨逸の進運

ウインスロップエルマーヴイン氏の「海上に於ける獨逸」なる一文は現代の獨逸海運の勃興を詳述し、依て來れる所因、將に來る可き結果を痛論せる所再讀の價あり、即ち要點を摘譯して世に紹介せん

顧みれば去年北米の偉人モルガン氏が彼の航業ツラスト中に大英國大西洋汽船會社を網羅し、大英の航海者等は凡て彼の士官たるを冀望せし當時、モルガン氏は獨逸最大汽船會社總支配人バリン氏に向ひ、若しバリン氏にして獨逸汽船を大ツラスト中に加入せしめんには一百万弗則ち二百万圓の年俸を以て之に報酬すべき意を示せり、然るに勇邁大膽なる彼總支配人は決然として其請を斥けたりと傳へらる、此は一時獨逸の諸新聞紙上の談柄となりし事にして、今其眞僞如何は知る能はざるも兎に角如此勇猛心あればこそ近々二卅年間に旺弱なるチュートン族の一國は一躍舊世界第二の海上權者たる地位を占得したるなり。

試に統計に照せよ、千八百七十三年に於ける獨逸國旗を掲げたる商船は百〇九万八千八百四十六噸にして、爾來八年后の八十一年には漸く百二十四万三千二百八十五噸に上れり、而し此時代には所謂自由船舶條例なる政策を採用し、獨逸の商人は外國に於て自由に船舶を建造し又は購買し以て獨逸國旗を掲ぐるを許したり、蓋し當時獨逸には一ヶ所の造船所も又は一箇の完全なる鐵工場もあらざりし故に如上の方策以外施す可きものなかりしなり、今日世に響けるロイドの如きハンブルフアメリカの如き凡て英國に趣きて始めて太洋航行船を購ふを得るの有樣なりき。

然るに一度海軍の擴張海運の獨立に全力を注ぐや驚く可き進捗を現じ來り、ステッチンの造船場の如きは一切自國の船舶を造らず日本支那南米等の戰艦建設に專らなりと稱せらるゝに至れり。

更に其勃興せる原因を尋ぬるに全くかの大ビスマルクの熱烈なる愛國心よく當時の英佛に於ける海運保護の厚きを見、又獨逸が將に單純なる農業國より商工業國に變遷しつゝあるを看破したるに始まる、彼が富國の術只貨物の輸出にありとなし、もし獨逸にして自國の商業に從事せしむべき自國船を有せずんば何の時かよく雄を稱せんやとの自覺は其政策に實行され遂に支那濠洲航海の自國船に四百四十万マルクの補助金を下附せり、如此して極東に達する獨逸船舶は漸く其數を增し當初は損害年に嵩んで補助金を加へて尙收支相償はざる趣きありしも、漸次强固なる發達をなして千八百八十八年は政府補助船にて運搬せし貨物五万八千四百七十七噸價格七千四百五十一万五千マルクにして、九十五年には十六万六千五百七十五噸價格一億六千四十三万マルクに上り、十年前に於けるビスマルクの豫望を現實するに至れり、又千八百八十七年に獨逸が亞細

亞及太洋州に輸出せし價格は四千百二十五万六千マルクにして九十六年にては一億七千六百二十四万六千マルクに達せり、僅々四十年間に四倍の發達をなすは豈驚くべき者たらずや。

更に轉じて獨逸が如何に港灣改良等に熱心鋭意せるかは其千八百八十八年以來の港灣改良費支出一億二千五百万弗に上れるを見て知るべし、而して此内七百五十万弗は全くハンブルグ一港の爲に費やし、其他も決して小港狹灣に投ぜずして直に效果を齎らす可きブレーメン其他の太洋港に向つて費せり、されば千九百年に至ては獨逸國内を通じて二十七箇の浮鋼船渠を有せり。而してカイゼルウイルヘルム號の如き、ドイツチランド號の如き、クロンプリンツウイルヘルム號の如き、更に本年進水せるカイゼルウイルヘルム二世號の如き、何國の船舶かよく彼等と肩を並べ得るものぞ、然も之等の巨船大舶が皆一のステツチンなるヴアルカンドツクに造られしものなるを思はゞ、嗚呼又盛ならずや。

希くば下の比較表を見考一考し、而して又顧みて海國としての獨逸の價値如何に低きかを思へ、而して更に今日世界に於ける獨逸の活躍と盛運を見よ、蓋し獨逸海運業の驚く可き



米國よりトラストの巨手太平洋を掩はんとす

發展は吾人を啓發する所尠少ならざるべし。

英國	一二、七五五艘	一四、八〇九、四八九噸
獨逸	二、〇八一	二、九六六、九五〇
米國	四、四七三	二、七六七、二七五
佛國	一、九六六	一、四八一、〇三六
那威	二、七六〇	一、六六三、三三二
西班牙	一、〇三〇	八三六、九〇〇
以太利	一、八六二	一、一八二、六九一
露西亞	三、二六三	一、〇九二、七三〇
日本	一、八六八	六八九、六八三

露國現下の政界と其內亂熱

左は四月刊行米國評論之評論誌上のエヌ、アイ、ストーン氏の論説を抄譯せしものなり、

露國政界の危急未だ今日より甚しきものあらず、今や彼國政府は立憲政體史の曙光を認めて正に箇々分離到底收集す可らざる觀あるの時なり、三月十二日に皇帝が下せる信教自由の勅令、及び農民に對する寛大なる新法は畢竟自由派との大對

抗に降伏せしものなるのみ、彼の露國内に於ける學生騷動の如き、四十年の久しきに亘りて隨時發生し、農民一揆に至ては中世紀前より斷絶して行なはれたり、然れども從來は軍隊の一擊よく之を壓伏して餘力ありき。

然るに今日に於ては此等のもの凡て形躰性質を變轉して最早單純なる學生暴動、無意味なる百性一揆に非ず、露西亞政界に於て隱然一大勢力を樹つるに至れり、かく革命の氣運は漸く普からんとするを以て、遂に今回の如き從來の專制に不似合なる政策を見るに至れり。

若年の皇帝の背後にフォン、プレーウエ氏の在つて百般の樞機に與かれるは殆んど公然の秘密として世に知らる、而して去年クルスクに於て行なはれし大演習當時に於ける一逸話はよく這般の關係を示すものあり、クルスクにて皇帝は貴族及農民の代表者を集めて訓示する所あり、殊に農民には無謀なる亂を興さゞらんとを戒めしが、皇帝は此演説をなすに當り、最初の一句を發せしのみにて行止り、顏赤らめて頗る困厄せられたりしが、フォンプレーウエ氏はすかさず皇帝の耳に數語を傳へて、自席に復し、悠然皇帝の暗誦を傾聽せりと。

此フォンプレーウエ氏は能く露國的政治家の特徴を具へ居れり、蓋し露西亞政界に於ける大立物たるや疑なし、氏は他の露國顯官高位の人と同じく獨人の子孫にして、千八百四十五年に生れ、幼にして孤となり、一波蘭人に養はれ實子の如く愛育せられ高等教育を享けたり、在學中恩人が波蘭一揆に同情せる由を政府に報告して、第二の父をして不幸に沈ましめたり、されども此は彼自身に取りては出世の端緒にして、千八百六十七年モスコー大學を卒るや直に司法官となり檢事の職に就き多く政治的の檢察に從事せしが、千八百八十一年には警察總長に任じ、專ら政治上の暴動鎭定に從へり、而して其内大臣たる地位を得しは八十四年にして、爾來重要の議に參して先帝以來少數貴族間に行はれし自由派を抑壓せり、千九百年フィンランド都督となり、露國人民中比較的に自由を有し、獨立を有せし彼フィンランド人の頭上に大打擊を加へて再び起つ能はざらしめたり。

フォンプレーウエー氏がかく專制政治の熱心家たるは彼ウイッテ氏と性格主義全く相反し居れり、ウイッテ氏はよく世界大勢の趨勢を察し、專制國の大臣としてよりもむしろ自由國の政治家然たる人なり、氏は露西亞に於ける最大私有鐵道の所有者支配者として名聲を博せしより、一躍運輸遞信の椅子を占め、進んで亂雜極まる露國財政を掌るに至りし人なり、而して此文明的大臣は、專制主義のプレーウエー氏に壓せられ、目今伴食たるに過ぎず。

かく專制主義依然として勢力あり、只一時の小刀細工を以て苟安するに過ぎざるを以て、露國の風雲は密々の間大變動を來たさんとしつゝあり、官吏有志家の相會して自己等政治上の悲運を嘆じ、密々の間改革的氣焔を燃やせるもの益多く、其他工業上に見れば千万人以上の職工勞働者間に於て殊に薄給の勞働者は抑へ難き憤怒愈よ高まりつゝあり、最早如何なる嚴刑も到底全然彼等を壓伏し去る能はず、加ふるに一方かの學生の暴動あり、彼や單に有形上乃至形而下の事に止まるも、悉く事理を解するもの、然も白日刃を揮ふて天下に呼號し、屠殺流刑尙且つ抑ゆる能はざるもの豈夫れ痛ましからずや、試に露西亞人民の私語を聞け「專制を倒せよ、自由を與へよ」と此私語は遠からずして一大破裂を見んとす。

今回の詔勅の如き畢竟時機を見たる淸涼劑の一服なるのみ、露國政体の根本的大革命は到底永く避けらる可きものにあらず、時は進みつゝあり、機は熟しつゝあり。

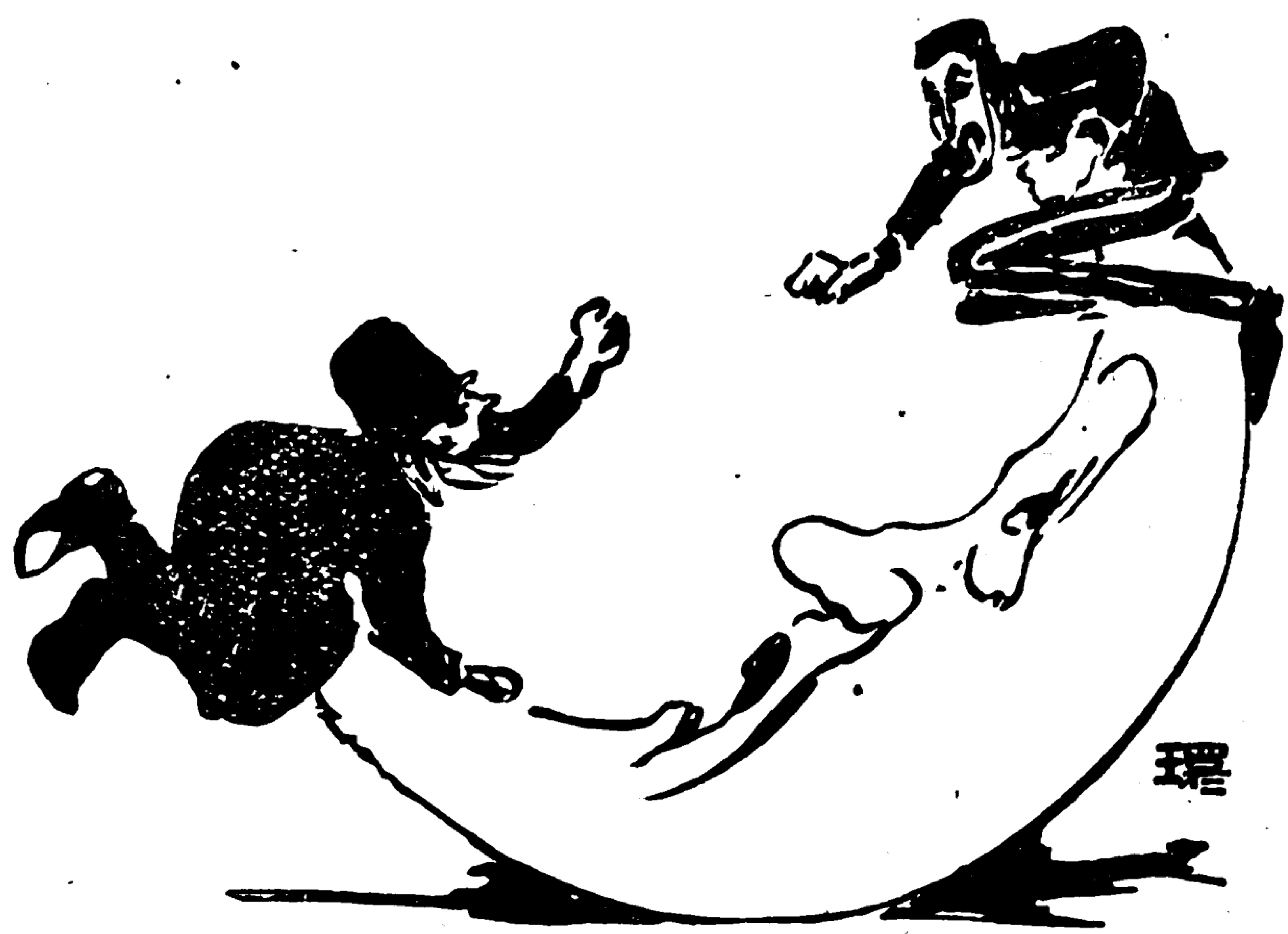
黒海バルチック海連絡の大運河計畫

「マガジンオブコムマース」誌上に戴せたる一文は露國を貫通して黒海とバルチック海を連絡する大水道の計畫を報ぜり、此水道はリガより起つてクリミヤの近傍なるチエルソンに終り、千六百〇七キロメートルの長さに達するものにて、深さは平均二十六呎なり、而して若し此水路にして峻功せらるゝ時は、中央露西亞の重要なる都府は何れも大なる利便を享くに至るべしと云ふ。

右の水道ハ又露西亞の軍艦及大商船の通行に適せしむる計畫なるを以て、此等の巨船大舶は中央露西亞の都市を大部分貫通して且つ黒海に於る海軍力を非常に増大せしむべし、而して此大工事に要する費用に付ては或亞米利加の一シンヂケートは自から工を起し工費三千二百五十万弗を以て五年間に定成せしむべきを公言せりと傳へらる。

若し此の如き大工事にして眞に峻功せられし曉には、露亞西は歐州中にて尤も内地の水運に富む國たるべし、現今尤も海に遠き地方をして海に近き地方たらしめ、仝時に世界の商業と土地の開拓に寄與する所甚くべきものあらん。

海外雜纂



新月旗の國土耳古に於ける露英の一進一退

西比利亞流罪人の慘狀

ウイント氏
蕣生 譯

大旅行家特に西比利亞探險者として世に知られたるウイント氏は特に其地の流罪人の狀態を熱心に研究して、屢々精細なる報告を全歐に與へた、左に譯する所は同氏が一千八百九十四年、再度の西比利亞旅行を企てた時、自から筆を下した日記の一節である、若し之に依て、彼等追放者が悲酸極まれる生活の一般を讀者に傳へらることが出來たならば、譯者の滿足に感ずる所である、（譯者識）

流罪地の寂寞と流罪人の狂氣

「バーク、ホヤンスク」の驛は「ヤクック」の驛より北方六百哩の處にあ

つて、此處は世界中で最も寒い所である、此驛に達するには極めて嶮しい「ベーク、ホヤンスク」山を踰へればならぬ、吾等が此行の目的地たる「スレドニー、コリムスク」までは、此寒村から猶東方千二百哩の間、隔つてゐて、「モスコー」から其處までは實に八千哩の行程になる、吾等は此間の旅行を三月と少しばかりで、極めて面白く濟ましたが、彼等追放人は世界の果の果と呼ばるゝ此の「コリムスク」まで達するには、往々一年以上も費やすといふことである。

「ケンナン」氏が傳へたる次の話は、讀者をして此地方が如何に荒涼頽廢に屬せるかを想像せしむることが出來やう。

『四五年前に「イルクツク」に居つた西比利亞の知事が、「シルラー」と呼ぶ流罪者を、其處からザシパースクの町まで移すやうに命じた、其の町は確かに、北極圏に近きインヂギルカ河の川上に位してをるものと想像されて居た、カザリン女帝の治世には此のザシパースクの町は毛皮貿易の中心であつて、甚だ繁昌してゐた、然るに其後漸々頽廢に傾いて殆ど昔の面影を止めぬやうになり、終に十九世紀の初頭には既に全く消滅に歸して居つた、其れにも拘らず、猶、政府の管轄地圖面には明に其町の所在地が示されてゐたのだ、シルラーは遠く四千哩も旅立ちて、リナ及びインヂギルカの川筋を處々方々捜索して見たが、終にザシパースクの町は見當らない、其處で止むを得ず再びヤクツクまで戻つて來て、目的の町は既に消滅して存在せぬといふことをイルクツクの知事に報告した、處で知事は更に此囚人を北極圏の中なるコリマ河畔に所在せる、四十五六軒ばかりの小村の「スレドニー、コリムスク」へ送つた、一年余の旅行の後此憐れなるシルラーは漸く亞細亞の極端コリムスクの村へ到着することが出來て、其處で初めて自由に放免された、然るに彼は直ちに、村の廢寺へ入り込んで鐘樓に上り、無暗矢鱈に鐘を撞いた、之を聞いた村の住人等は何事ならんと驚き慌てゝ鐘樓に集まり、囚人に向つて、何故なれば斯く亂調子に鐘を叩くかと問ひ質すと、彼はいとも恭しく嚴かに告げていふには、村人等よ、能く聞き給へ、「ベーマン、シルラー」こそ、神の深き御惠に依りて、苦しき長の旅路を終へ、今恙なく此の「コリムスク」の村へ着きたるなれと、』

鳴呼、十數月間の疲勞と、危險と、寂寞とが遂に此の憐れむべき因人の理性を奪ひ去つて、彼を狂氣として仕舞つたのである!! 斯る出來事は此の荒涼たる西比利亞地方では屢々聞かれる處であるのだ。

零下八十一度の寒地

三百人ばかりの住人を容れるほどの、二並びの矮き小屋から出來て居る、ベークホヤンスクの村に來たとき、吾等は之れほど荒廢せる地方は又と外にあるまいと思つた、此の村は寒き淋しき高原の眞中に位して居つて、ヤナ川の爲めに兩分され、薄暗き森で村の四方を取圍まれてゐる。此森あるが爲めに愈寒地の寂寥を感じた、吾等はヤクツクから此處まで丁度二周間の間、馴鹿の背に乘りて、嶮しき山を踰え、路なき森に迷ひ、雪に追立てられ、飢に攻められ、休息とては、只、百哩毎に汚れたる小さな茶店で暫し憩ふ位のことで、晝と夜の差別なく駈け樣に行く手を急いだ、其れ故、早く暖爐にも温まりたく、又、安眠をも得たいので、非常に此のベークホヤンスクの村を待ち兼ねたが、豈圖らんや、此處へ着いて見れば、實に憐れなる有樣て、到底長く足を止むること出來ないので、行末猶幾多の困難や危險が待伏せして居るにも拘はらず、急ぎ此村を後にして目指す「スレドニーコリムスク」へと出立せればならなかつた。

「パークホヤンスク」で三日間逗留して居る間に、行く手の旅に使用すべき良き馴鹿を手に入れた、此の間、吾等が宿りて居た小屋は、此地の警部「エム、カツチヤー、オフスキー」といふ人の管理に屬して居た、此人は非常な人であつて、嘗て「ジーネツト」の遠征隊が「レナ、デルタ」で沍寒のため、其過半の隊員凍死した災難の時も、非常な盡力で以て、殘存者を救ふた事があつたそうだ、此處に居て流罪人――それは二十人以上も居つたが――ですら此人だけは慕うて居た、併し此地は、猶吾人開化國の人間に取つては、頗る恐るべき住所である、何故となれば、此地は、よし世界中ではなくとも、西比利亞の北部中では、確に一番寒い地であるからだ、波蘭の追放人であつて、數年間此地の氣象を研究した所の「エム、アプラモプスキー」氏は次の如く予に語つた、則ち氏の精密なる調査によれば一年中の平均溫度は華氏寒暖計の零下四度であつて、沍寒の時期には屢々零下七十度を下るとがある、或時の如きは、零下八十一度までも降つたそうだ、吾等が此地を通りたのは、三月の初旬であつたが、其れでも猶寒暖計は零下六十五度の處より上らなかつた。」と、冬期には一月に一回づゝ「ヤクツク」から郵便が來る、けれども夏秋の候には、北極の他の諸殖民地と等しく、河流や沼澤が汜濫して一面に森林を浸すため、他界との交通は全く絕える。

此地に居る追放人は皆政府の給與物の不十分なるに少なからず不平を抱いて居る、物價は凡て非常に高くて、爲に生活狀態が頗る困難である、「アプラモプスキー」氏は此地て野菜物を作らうと試みたが駄目であつた、「ヤクツク」ては能く繁殖するが、此地は土地が常に氷結して居るから、其れて育たぬのである、只僅かばかりの甘藍を作ることを得たさうである、牛肉や鹿肉は到底企つべからざる贅澤であつて、其れ故、追放者が冬期「ヤナ」川から魚を捕ることの出來ない間は、主に馬肉を常食として用ゐる、併し馬肉すら猶贅澤であるとて、彼等は養料の惡い爲め硬くて、腱多き馴鹿の肉を好んで食うに至つた、さりながら、「スレドニーコリムスク」に比較すれば、此の「パークホヤンスク」はまだ〱極樂淨土である。

世界最北の追放地、生きながらの墓場

吾等は三月二日に「パークホヤンスク」を出發して北氷洋の方へ旅行を續けた、モスコーより八千哩世界最北の追放地「スレドニー、コリムスク」へ次第に近づくに從つて、吾一行は屢々北海から吹きつける所の大吹雪のため、途中て滯留せねばならなかつた、而も其の暴風の靜まるまて最も近い避難所へすら七八十哩も隔つて居る野中て、二日間も待たせられたことがあつた、此の二百哩以上もある長旅程の間、汚穢極まる休息所て得た食物としては、只、腐つたやうな魚肉と、硬く枯れた鹿肉とのみてある、吾等男子ですら此旅を終るまでには、二十六日も要して、而も其間屢々飢と寒さに苦しめられたのであるから、之から察して見ても、彼の纖弱き婦女達が、衣服は薄着の儘て、吾等の三四倍の時日を此旅に費やす其の辛苦は想像するにも餘りあることゝ思はれる。

四月初旬の或朝、早く、吾等は遂に「スレドニー、コリムスク」に達した、其日は此地方には珍らしい好天氣であつた、空は朗らかに晴れ渡りて、塵ばかりの雲さへ見えず、空氣は漉したやうに淸澄であつて、雪に埋もれたる原や、霜に被はれたる森が、日の光に反映して、丁度寶石の燦めくやうに思はれた、併し顧みて此の衰れなる殖民地の樣を見れば、俄に悲しき感想が胸に湧いて來て、宛も賑やかなる舞踏會の席上へ不意

に棺桶でも、捲き込まれたやうに、折角空の晴やかさに爽やかになつて居た吾が心をば曇らせて仕舞つた、察しても見給へ、泥土をもて壁となし、其壁の所々に氷を張つて日光取としてある醜き矮屋が只二列に建並べてあるのみで、而も其の窓の氷が春の日光に溶されて崩れ落ちたる其の哀れなる有様を、此の草屋の間に通ぜる小路が即ち此村の本街道であつて、其一方の端には壞れかゝつた寺院と、押合つてゐる墓場とがあり、其他方の終る處には、此村での最も堅固なる建物と見ゆる警察署が立つてゐる、此村の外廓には二十軒餘の一層襤褸しき住家が、半哩許りの間に散在してゐる、之れが即ち西比利亞の極北東に位してをる寒村——「スレドニーコリムスク」の外廓——である、一寸見た處では此地はまるで、恐ろしい悪病が住民の全部を食み盡した廢村のやうであつて、どうしても、人などの住んで居る所とは思はれなかつた、初の程は吾等が打つ鈴の音に、誰一人として應ずる者も無かつたが、暫らくすると、獸皮を被りたる怪物が彼方の小屋よりも、此方の小屋よりも出て來た、而して、村を過りて警察署の方へと進む吾等をば、憔悴せる容貌をもて迎へて與れた、此處で吾等は一軒の小屋を與へられて、ヤクツク以來での最も寒い最も汚しい宿所に此の十日間を暮すことゝなつた、それでも猶追放者の小屋に比しては、頗る上等の方であつた。

吾等が此處を訪ふた時には、追放者は男子十二人、女子二人であつたが、眞の犯罪で、此處に流されたものは、唯二人だけである、其一人は「アキモバ」夫人であつてニコラス二世の即位式に、身に爆裂彈を隱して居つた罪に依て、今一人は「チンメルマン」とて數年前「ロダ」にある政府の工場をダイナマイトで破壞した共謀者として、何れも有罪の宣告を受けたものである、役人の語る所によれば、此二人の外の追放者は皆革命の暴動などに直接の關係なき無罪の者であるとのことだ、吾等が見たる所でも、彼等の多くは、皆靜粛で、道理が別つてゐて、國の平和や繁盛を助長し得る人のやうに思はれた、只一二人——近頃此處に送られたる學生であつたが——のみが、如何にも容貌が謀叛好のやうであつて、而も彼等は王位を覦ふといふよりは寧ろ財物を掠める方の者と見られた、併し彼等の過半は、單に憲法や、言論自由の爲めに自分の意見を發表した位の罪で以て、此の生きながらの墓場へ送られたものと思はれた。

「スレドニー、コリムスク」で最も憐れむべき事は、此の地の不健康にして漸々、人を病身にすることである、二三年も此處で暮したものは、たとへ歐洲に居た時には其職務の爲めに赫々の名譽あつた者ですら、精神が怠慢に傾いて、事業などは全く放擲するやうになるのだ、追放者の中で、三年前に此處へ送られた有名なる波蘭の記者が居つた、此人は自ら配所の無聊を慰さめるために一の歴史小説を書き初めた、所が、六ケ月ばかりにして、此事が、うるさくなつて來て打捨てたが、其後一年も經たぬ内に彼の精神は漸々狂うて來た、吾は又此處に七年間も住んで居る有名なる解剖學の教授に會うた、然るに案外にも、今の彼は醫學上の最近發見物等に關しては全く無頓着であつて、唯巴里の音樂舘へ行つた時は頗る愉快であつたと頻りに此事ばかり話して居つた、實際此處に居る數多追放者の中で身神共に健全なるものは二三人も無い位である、役人は吾に告げた、大抵の者は二年も此處に居れば既に精神が不穩になる、如何に精神の强固なものでも五六年も經てば岐度小供のやうになつて仕舞ふと、そは又何故であるかと問ひ返せば、彼は靜かに窓の側まで歩み寄つて、荒れたる街道や、廢れたる小屋や、塵埃のため眞黑に濁つて氷結して居る河水などを指していふに、君よ見給へ、此の恐ろしきまで寂寥たる光景を、終日終夜、物音とては何一つも聞えないではないか、私

は或る日、眞晝中に、町の眞中で佇立つて、自分の衣囊に入つてある時計の秒を刻む音をすら聞いたことがある、私はまだ數月前に此處へ來たばかりであるが、何れ間もなく精神が亂れて來ることであらう、さなくば…………、彼は斯くいひて、意味ありげに手掌で其の額を叩いた。

（以下次號）

現羅馬法皇の行狀

法皇レチ十三世の日常其他に付き、四月の「フランクレスリー」誌上に掲げられたり頗る興味あるものなれば玆に其數節を抄譯すべし。

現法皇レチ十三世の父はかの那翁一世の部下に屬せし一大佐にして、レチの生れしは千八百十三年三月廿八日なり、天資銳敏怜悧にして、僧籍に入りて僅か四年后の千八百四十一年聖使としてブラッセルに派遣せられ、夫より三十七年后の千八百七十八年に法皇ピアス九世の後繼者となれり、記者の云ふ所に依れば法皇は詩文に長じ、かの僧正等に廻附する廻文章の如き羅典文學中の華たるものありと、亦接見其他の塲合に於ける彼の論議は實に文學的巧妙を極むるものありと云ふ



獨立戰爭時より今日に至る米國發達の有樣

法皇日常の行爲を窺ふに、彼は每朝六時前后に臥床を出て祈禱終りて第一食を取り其間に諸種の新紙を讀む、而して此等の新紙中ヴアチカンに關する件及社會問題に付ては豫め四人の從屬敎師等にて赤線を附しあり、九時より十時迄は秘書カーディナルランポラに接見し、第二食の間に他ノ秘書はレチ法皇が食しつゝ少しの淀みもなく口授する通信文を筆記す、又午前十一時より午后二時迄は接見等の用事なき時は寢室か又は圖書室に退きて靜に休息し、二時に至ればヴアチカン苑に車を驅け、苑に達すれば直に車を下つて杖も携へずして那翁一世の如く背に手を廻して靜に淸淨の空氣を呼吸す、夕景には侍者に伴なはれて自己の禮拜堂に退き、其より十時前後迄は讀書執筆し、次て寢室に入るも半夜以前に臥床に横はる事甚だ稀なり。

法皇は久しく烈しき神經痛に惱み、其發作せる時には何人に向ても一語を發せず、されども健康普通なる時は近侍と共に談笑に耽る、彼の性質中驚く可きは斷食と記臆力の永續する事なり、其生地の景色を語る時の如き、人をして昨日迄も其所に住せしかと思はしむ、彼は親切寛大の性情を有すれども、假面の人を悄み、又一度欺かれたる時は頗る烈しき憤

怒を發すと云ふ。

如此齢已に九十を數へて貪壯者を凌ぐ意氣あり、然れども人壽限りあり、繼承者の問題今より喧し今歐州にて尤も評判高きは前記の秘書ランポラ氏にして、氏は已に副法皇など稱せられつゝありと云ふ、ランポラ氏は貴族の出にして幼時シヽリー島より羅馬に出て、ヴアチン敎會學校に業を卒へ后カプランカ大學に入り終りに貴族大學を卒業せるは千八百七十五年なりき、其より羅使の書記となりて西班牙に赴き、千八百六十七年にはプロパガンダフアイドの書記となれり、于時年僅に三十四、而して其地位はカーデイナルたる可き初階のものたり、されども氏は僧正の榮位を得る以前に羅使として西班牙朝廷に趣き、當時所有權に付き西獨二國紛爭の基たりしカロリン島事件の落着に非常なる周旋をなせり、かくてカーヂナルヤコビニ氏逝去の后其后を襲ひ、其より法皇の秘書となりて今日に及べるものなり。

法皇の后繼者として目さるゝは氏の外スヴアンパ氏及ヴアヌテリ氏あり、スス氏の如きは伊國政府の氣受は甚だ宜しからんとの評あれども、今日にてはラ氏尤も世の人望を集めたるものゝ如し云々

バイブルの供給處

基督敎聖書の大部分は英國オツクスフオールドに於て出版せられ世界個所に播布す、而かも非如何にして出版せらるゝやを知れる人は又甚だ稀なり、依て今「カクストンマガジン」の報ずる所を抄出せん、に曰く

オツクスフオールド大學印刷所の聖書出版は三百年を經たるものにて百五十の國語を以て出版され得可し、毎年紙を費やす事六百噸、一度に十万部位の注文は普通にして例令五十万部の注文來るも、即時に取揃へるとを得、平均毎一分間に三十乃至四十部を製造し、必要に應じては直に二倍の速力にて製造し得、又其種類はフオリヨより最小のもの迄英國内に散在する牛津版にて百十種より少なからず、而してかの增訂新約全書の發行時即ち千八百八十一年五月の時の如き發行日前迄に百万部以上の注文來り、或職工の如きは發行日前に一部を獲んと欲せる人の送りし四千磅の賄賂を斥けたりと稱せらる、又此牛津大學印刷所にて用ゆる紙は事業上の秘密に屬し、他に摸擬せるものもあれと、未だ同等の品位を保つ能はず、牛津出版聖書中の最大なるものは竪十九吋横十二吋にして未だ一字の誤植だも發見せられし事なし、又ブリリヤントテキストバイブルと稱するは三吋四分の三に二吋八分の一にて厚さは僅か四分の三吋重さは漸く三オンスに上らず、此印刷所職工數は六百五十人なりと云ふ。

二帯兩球錄

▲鐵道延長　現今世界全躰にて四十九万一千一百二十哩有り、此中二十二万一千六百九十七哩は北亞米利加の一州に屬す、且つ此哩數の半は一千八百八十年以後に成れりとは本年の初め英國統計家の算せるところ

▲電線延長　北米合衆國のみにて七十万哩

▲英國郵政局は電信事業の爲に一年六百五十萬圓を費やす、而して收益は四千万圓

▲郵便局に自轉車を用ひたるは匂牙利を以て濫矢とす、近來同國は又卒先して自動車を用ひ初めたり

▲ロンドンエンド、ノースウエスタン鐵道會社は毎夜其線路に一万七千個の信號燈を點ず

▲巴里一市に五万一千個の公共街燈有り、然れども通常毎夜點火するは三万九千個なり

▲大西洋を去年一年間に通過せる旅客五十六万七千零十一人、其中十二万八千百四十三人は一等船客なりき

▲北獨逸汽船會社の大西洋航路は一航海一千百三十人の船客を送る平均となる、ホワイトスター會社は仝一航海に九百人の平均

▲英國の海軍大將目下十二人、皆老年にして六十才以下の人は僅に三人

▲英國國會には目下議員にして八十才以上の老人二人有り、チヤーリングトン氏とサーフレデリツキマツヒン氏、共に八十五才

▲女優にして猶舞臺に現はれ居る最年長者は Mrs. G. H. Gilbert にして今春はニユーヨルクのゼ、ハーレム、オペラハウスに出演せり今茲八十二才

▲西班牙は歐州第一脊背(セムシ)の人間多き國なり、シーラ、モデナの地方人口の七分は此病氣を有す

▲墺都維納は自殺者の多きこと世界第一と稱せらる、去年の一月より九月までに二百五十人の男と、九十八人の婦人自殺を遂げ、猶他に三百六十七人の自殺未遂者を出だせり

▲アルプス山間の危嶮を犯かして、非命に倒れたる各國人去年一年間に一百十九人有り

▲南阿戰爭中英人が戰死の外に雷其他天災等不意の出來事に依て死したるもの七百八十九人、病氣に依て死したるは一万三千二百五十人の多きに上れり

▲十九世紀一百年間にロンドンは八十万の人口より六百万人に増加し、ニユーヨルクは六万人より三百万人に増加せり

▲ベルリンには人間の住める地下室二万五千七百六十九室有り

▲北米合衆國に於ける最初のストライキは一千七百八十六年ヒラデルヒヤ市に於ける三百人の靴工同盟罷業とす

▲印度に於ける基督敎信者は三百万人と稱す、其中四十五万三千四百六十二人はチヤーチ、オフ、イングランドに屬す、羅馬舊敎は百二十万餘有り

▲歐羅巴全洲にて乳牛六千三百八十万頭有り

▲珈琲の産額最近統計一年十八億一千三百万封度、其中十一億七千九百万封度則ち三分の二は南米ブラジルの一國に生ず

▲グレートブリテンはスマトラの半分に過ぎず、ウエールスを除きたる英蘭土はルーマニアと同面積にて、佛蘭西の四分の一よりも猶小なり

▲西比利亞は世界陸地の九分の一有り、經度百二十に跨る

▲歐州第一の大噴火山エトナの噴火口は一万七千二百九十呎の廣さと八百二十七呎の深さ有り

▲北米の最高峰はマウント、メツキンレー、二万零四百六十四呎にして、次はマウント、フヲラクル、二万呎

▲水素のアトムは直徑一吋の二億八千六百万分の一に過ぎず

▲午後四時は世界各地を通じて二十四時間中最も雨多き時間なり

▲蝿其他羽虫の大部分は温度氷點に至れば不動、五十三度に於てやふやく蠢動を初め、六十八度に至て飛翔し、増して百十三度の濕氣無き熱に至れば死す

▲狼は一夜に五十哩乃至六十哩を食を求めて歩む、狐は狼よりも猶多くの距離を餌をあさる爲め出て行くこと有り、ナンセン博士は北極の狐が海岸を離れて氷上四百八十哩の遠きに出づるを發見せり

▲自家庭園の樹木、若し其枝を隣家の土地にまで延ばせば、隣家の主人はこれを伐採するの權利有り、然れども其伐採せる樹枝は自家の所有たりこれ英國古來よりの法律

▲英國の富は一千一百八十億万圓、北米合衆國は一千六百二十億万圓、佛蘭西は九百六十億万圓、獨逸は八百億萬圓、露國は六百四十億萬圓

▲金よりも重き鑛物は、白金のみ、一立方呎の純金千九百二十六封度、白金は千九百五十封度有り、金の次は水銀、次は鉛にして銀は其次なり

▲玖馬島より輸出せる鳳梨去年二十万樽、數より云へば一千四百万個内外なり

▲猫の水を嫌ふ所以は、其毛の脂少くして水を反撥する性質乏しく乾き遲ければなり

▲印度にて毒矢を作るに鹿の肝臟を毒蛇に噛ましめ、其毒肝臟に蕃殖せし後、肝臟を矢鏃に塗りて製するなり

▲潜水者の着くる靴は二十封度の重量有り、兜は四十封度、其他にて猶四十封度、これ丈けの重量を身に着けて初めて海底に仕事をなし得るなり

▲去年の七月九日より世界の天文學者は新たに五百七十一個の小行星を發見せり、皆小にして一個として月球丈けの大きさを有するものなし

▲去年一年間に三百十万零六千二百九十五册のバイブル、及びバイブルの一部を册子としたるものを支那一國に頒布せり

▲白耳義に六十万人の勞働者有り、中八万五千人は、婦人にして一万五千人は、兒童なり



日本と歐米の新聞（上）

斯波貞吉

曾て此中央公論に、歐米の新聞記者と日本の新聞記者とを對照して、左の如き短評が載せられてあつた、

歐米	日本
中等以上の職業	水平線以下の職業
尊敬を受く	侮蔑を受く
社會の爲に働く	私慾の爲に働く
故に買收甚だ難し	故に一瓶のビール筆を曲させ得
通信員外國公使以上の俸給を受く	主筆尙判任の小役人たちの收入なし

総理大臣を選ばんか新聞記者を選ばんか　交際界の明星
ゴロツキを選ばんか新聞記者を選ばんか　交際界の毒虫

之は餘り極端で勿論眞面目な批評とは言へない、多分今の新聞記者を警醒するために書いたのであらうが、意味を誇張したものと思へば此中幾分の事實は認められる、即ち歐米の新聞記者は日本のより地位が高い、俸給も多い、此等は事實である、露西亞の倫敦大使館附書記官が作つたと傳へらるゝ「倫敦の交際社會」と云ふ本に、倫敦の交際社會の大立物は第一が總理大臣で、其次が倫敦市長、之に次ぐがタイムスの主筆記者と書いてある、日本の新聞記者から大臣になつた人も今では少なくないが、まだ新聞記者の地位が英國に於ける程貴くない、併し此樣に相違のあるのは新聞ばかりでない、我邦の總ての事物は歐米に遠く及ばない所がまだ〳〵澤山にある、吾輩は寧ろ新聞などは割合に相違が甚しくないと思ふ、乃ち何れ程の相違があるか比較して見やう、先づ新聞社の主腦たる

▲新聞編輯室　に就きて云はゞ、歐米の新聞社は資本の多い丈に贅澤である、チャーレス、ラムが「モーニング、クロニクル」の事を書いたものを見ると、其編輯室は丸で王侯の邸宅に於ける接待室の如く立派なるものである、又「タイムス」のウオーターは、其編輯室に於て金のペン銀のインキ壺を使つたとの事である、此樣な贅澤は到底日本の新聞社では見られない、日本の新聞社には今尚疊の上に座つて編輯する所が多い、中には豚小屋に似た穢い所もある、併し不思議に衛生を害するでもなく編輯の事務を取つて行けるのである、編輯室の不潔は恐るゝに足らぬとして、秩序と便利の乏しいことは今尚日本の新聞社の缺點であらう、倫敦の「エキスプレッス」新聞の如き完全なる設備に至らずとも、今少しく此等の點に於て改良せられなければならぬと思ふ、ヂッケンスは新聞社の亂雜なるに驚いて、入社後僅に十九日で止めたとの事であるが、日本の新聞社も今の儘では謹慎に仕事をする人は居憎いであらうと思ふ。

▲編輯の仕方　は大に違ふ、日本では何處の新聞社にも硬派（政治商業等に關する事）軟派（警察事故艶聞等に關する事）の別がある、此樣な區別は西洋には何處にもない、併し我邦一般の讀者は、所謂三面雜報を歡迎するのであるから、日本の新聞には必要なる區別かも知れぬが、區別を設けずとも差支ない樣にも思

はれる、兎に角三面雜報の書き方は、次第に矢張西洋化して行くやうである、夫から主筆は西洋の新聞に於ては極めて有力なもので、昔しは新聞の持主に拘束せられた事もあつたが、今ては持主の拘束を受けなくなり、新聞紙上の全權を持つて居て、無論新聞社の最も重なるもので、隨て俸給も多く、「タイムス」の主筆のバックルの如きは、二万圓餘の年俸を得て居る、米國新聞の主筆などは、更に多くの俸給を得るものがあるとの事だ、日本でも主筆は全權を持つて居る筈だが實際はさうでない樣である、先づ日本の新聞は、編輯員と外勤員と通信者とのみで出來ると言つて宜しい、昔から見れば編輯員にも外勤員にも色々の部門が增した樣であるが、また西洋の樣に多くの專門には分たれて居らぬ、故に日本の新聞社員は編輯に從事する一員と云ふ考を持たず、己れの名を擧ぐる機關として新聞が作られる樣に思つて居る、詰り新聞は編輯員に利用せられるので、西洋の如く新聞其物の發達は之が爲に鈍い樣である。

▲記者の資格　十數年前には新聞記者と云へば、學校を遣り損つた不平漢のみと思はれて居た、併し今ては眞面目に學校を卒業した人が澤山にある、府下の新聞に大學を卒業した人も少なくない、早稻田の專門學校及其他の學校を卒業した人は、六七十人もあらう、今ては實直な人が多い、旋毛は多少曲つて居るかも知れぬが、以前の樣に放埒な人は多くない、之は餘程な進歩であらう、「タイムス」の記者には狀師(バリスター)多く、「マンチエスター、グアーヂアン」には、牛津大學の卒業生が多いと云ふが、日本の新聞記者の資格も益進むであらうと思はれる、萬朝報が社員を入れるのに、履歴の確ならぬものを試驗するのは、進んだ考であると思ふ。

▲外勤員　普通に探訪と云ふが、所謂外勤員なるものは、一の新聞が他に先んじて迅速なる報道を爲すに、缺くべからざるものであるのに、日本の新聞社の外勤員中には非常に惰けものが多い、中には何等の事をも探らずに顏ばかり出して居る人がある、英吉利の某新聞社の外勤員は、或る時其日の內に某政治家の意見を聞いて、新聞社に報道する必要があつた、乃ち其別邸へ訪問すると、今快艇(ヨット)に乘つて沖へ出たとの事てあり、歸りを待てば翌日の新聞に間に合はない所から、自分も快艇で追駈けて漸く望みの事を聞くことを得たが、其時其政治家は其外勤員に向つて戲れて、君は實に熱心である、僕は今水の上に居たから善いが若し水の

底に居たら、僕を探すために君は恐らく水の底までも、沈む積であつたらうと云つたさうだ、又英國新聞の或る外勤員は、之も極めて必要な事があつて、夜中某政治家の家に行いて案内を乞ふた、所が深更の事であるから寢て居て誰も起きぬ、弱つて居ると二階の主人の寢室と思はれる所から明りがさして居る、占めたと思つて梯子を探し出して、其室の窓に差掛け面會したとの事である、此樣な外勤員は日本には殆んど無いてあらう、勿論政治家など丶交際するには、金も入り薄給ては出來ぬてあらうが、今ては日本の新聞社の外勤員にも、外の社會に比べたら、割合に多くの俸給を貰つて居る人が少なくない、兎に角熱心が足らぬことは事實てある、南阿戰爭のとき或る英國新聞の通信員は、夜中ブルラー將軍の所在を探すため、百哩餘の道を馬て驅け廻りて、漸く將軍が行水をして居る所て面會した眞に此樣な熱心が欲しいものてある。

▲通信員　西洋の新聞は諸國に通信員を置く、「タイムス」の巴里通信員てあつた故ブローウイツ、及同新聞の北京通信員てあるモリソン博士の如きは、確に大使若しくは公使以上の人物て、其通信は大使或は公使の報告よりも常に先てある、日本の新聞て國外に通信員を置くのは極めて少ない、まだ必要が少ないのと、必要があつても置き得ないのとてあらう、又西洋の新聞社ては特に戰時通信員なるものを雇ふて置く、平時には別に仕事をせんでも三百磅乃至六百磅の年俸を給し、戰時には別に每週二十磅の手當を遣る、死ねば遺族に遣る扶助料も少くないさうだ、其他總ての費用は別に給する、夫て戰時通信員の發する電報は、一回二千五百圓乃至一万圓を要するとの事である、日本の新聞社ては編輯員或は外勤員から、臨時に戰時通信員として繰出すので、迚も此樣な餘裕はない、一回の電報に一万圓も遣はれたら、大抵の新聞社は破產するてあらう、西洋の新聞社ては馬鹿〳〵しく金を遣ふ、玖馬戰爭の時紐育の或る新聞は、四万五千圓て三隻の滊船を借入れ、海戰の實況を詳しく報道する積りてあつたが、此三隻の滊船は敵艦の影すらも見ず、何の役にも立たなかつたことがあつたさうだ、「モーニング、ポスト」のグルニーソンは、戰時通信員として最も有名な人て、何度戰地に行つたか分らない程てあるさうだ、「デイリイ、ニユース」のアルチバルド、フォルブスも名高い人て、南阿戰爭の時三百哩の道を馬て驅け通した事があるさうだ、又或る戰時通信員は戰况を急いて新聞社へ

報道するため、電信局へ眞先に驅附けた所が、續いて他の通信員も遣つて來た、其時通信員は何うかして他の通信員の報道を後れさせて遣らうと思つて、聖書の句を覺えて居る丈自分の電報に續けて打つて、長い間他の通信員の發電を妨げた事があつたさうだ。

▲女記者　日本の新聞社中萬朝報其他二三の新聞に女記者がある、併し其人數は極めて少ないので、まだ新聞の紙面に影響を與へる程ではない、西洋の新聞社には澤山ある、巴里には女の記者ばかりで出して居る「ラ、フロンド」と云ふ新聞がある、米國にも同種の新聞が一つ出來掛けて居る、女記者は仕事が綿密で其上に俸給が安いのであるから、西洋の新聞社では追々に其數を增す、英吉利の或る新聞社では、其爲に男の記者がストライキを起したことがある、女記者と云ふと亂暴の樣に思はれるがさうではない、矢張外へ出るときは鏡を見て化粧などをするから、手間が取れると云つてこぼした主筆があるさうだ、女の記者は大抵な所へは出入を許されるがまだ許されぬ所もある、現に英吉利の議會などでは女記者の記者席に入ることを許さぬ、昨年であつたが入場を許可すべしとの說議會に起つたが成立たなかつた、今に許されるであらう、日本にも女記者は追々に多くなるに違いない。

▲批評家　新著の批評及劇評は西洋の新聞で重きを措いて居る、日本の新聞にも大抵劇評家を置いてある、併しまだ西洋の樣に專門とはならぬ樣である、西洋の劇評家は頗る尊敬を受けて居て、日本の劇評家の如く冷遇せられては居らぬが、之は矢張近來になつてからの事で、西洋の劇評家にも怪しいのがあつた、「モーニング、クロニクル」のジョン、カメルと云ふ劇評家は、沙翁のロメオ、エンド、ジユリエツトの劇を見て、筋が長過るから觀客が退屈すると云つて、作者の注意を促したことがある、名高い沙翁の劇を知らず、死んだ作者に注意するとは驚いた話である、日本の劇評家に忠臣藏を知らない人は眞逆に無からうと思ふ、本の批評は日本の新聞では幼稚である、まだ〳〵西洋の新聞社の樣に澤山の專門の批評家を置く譯には行かぬ、併し立派な書物が續々出版せられる樣になつたら、新聞社にも專門家を置くであらう、今の所では教科書でなくば、詰らない小說とか下らない隨筆の樣なものが多く出版せられるのであるから、專門の批評家を多く置く必要はないのであらう、併し西洋でも批評は必ずしも當を得て居るといふには限らない、マリー、コレリー

は新聞紙の批評を評して「書物の内容に依りて評するのでなく、批評家の心持に依りて評せられるのである」と云つた事がある、果して其通りであるか疑はしいが、若しさうであるとすれば、新聞社の批評家が悪いのでなく總ての批評家が悪いのであらう。

▲電報係　西洋の新聞の記事は、重に電報に依りて載せらるゝのであるから、電報係は非常に忙しい、「タイムス」の如く私設の電線をも持つて居る樣な所では殊に忙しい、日本では國外の電報はルーター電報の外に、清韓二國から電報が來る位のものであるから、電報係は忙しい程ではない、然も外國電報を自分の社で譯し得るは、大阪で「朝日」「毎日」、東京で「時事」「日々」「萬朝」位のものである、外國電報は冠詞助動詞等は多く畧せられてあつて、固有名詞に首文字を用ふる事もないから、地名であるか人名であるか、又は普通名詞であるか分らぬ事が屢ある、重なる地名人名等は盡く記憶して居らなければ容易に譯せられぬ、又多くの事故を同時に報ずるのに一つに續けてあるから、前に續くことか後に屬することか分らぬ事がある、或は又現在のことか過去のことか分らぬ事がある、英語に通じて居るのみでは勿論分らず、練れても間違ひがないとは云へない、曾てルーター電報を各社で譯すことゝなつたときに、各社に大抵一人位は、英語が出來るので自慢な人があつて、譯すことは容易なことゝ思つて居つた、然るに實際電報を受取つて見ると譯せない、二三日で呆れて「ジャパン、タイムス」で譯して貰ふことゝなつた、其後のことで南阿戰爭の初めに、ボーア軍の總督ジユーベルト將軍が、切りに英軍を惱まして居つた時の事である、ジユーベルト將軍の甥が捕へられたと云ふ電報が來た、「タイムス」は之を誤譯して、ジユーベルト將軍と甥將軍と捕へられたと書いた、すると或る英國最負の新聞でボーアの總督捕へらると題し、南阿の戰爭は終に英軍の勝利に歸した、英國万歳と書いた、其翌日の電報に英軍大敗の電報が來て、南阿戰爭の終つたのは其より二年後の事であつた、外國の新聞にも時々恐しい間違ひが出る、之は電信局の誤りであらうが、十字(クロッス)と烏(クロー)、人民(ピープル)と羅馬法王(ポープ)、自由主義(リベラリズム)と文學(リテラチュア)、女兒(ガール)と會社(ギルド)などは屢間違ふとの事である、又電報は急を報ずるものだといふ所から、まだ事實の確でないことでも、大丈夫と思つて報道すると飛んでもない誤りが出來る、曾て李鴻章は朝日新聞に殺されたことがあつた、今の英皇帝がまだウェール親王と云

はれたとき、重病に罹られて危篤に陷られた事がある、其時大陸の新聞では親王の薨去を報じ、傳までも載せたものがあつた、英皇帝は當時の新聞に出た傳を一冊の本にして今も大事に保存して居らるゝさうだ、外國の新聞電信は普通の電信より電信料が非常に安い、夫でも外國新聞が電信料を費すことは驚く可きもので、スタンレイが「デイリイ、テレグラフ」へ送つた電報は、三十二万圓を費したさうだ、一通の電報に一万圓を要するのは少しも珍らしくないのである。

▲會見記者　日本の新聞に專門として置かれぬもので、西洋新聞社に必ず置かるゝものは、會見記者及び戸外遊戯記者である、西洋では外國人の往來が激しいので、隨つて此樣な記者が必要であらう、此會見記者は頗る技術を要することで、中には記者の問に然りとか否とかの外全く答へぬ人がある、こんな人との話を新聞に載せるのは迚も六かしい、そこでかう云ふ人には豫じめ長々しい問を拵へて置いて、其返事に依り問を答の樣に直して新聞に書くのである、此記者の熟練は、總て問を巧みにするにあつて、其巧みなるものは實に一種の美文を爲すのである、からして會見の記事は讀者に歡迎せらるるのである、戸外遊戯は外國では誰も熱心であるから、其記事は常に新聞の一部を占めて重なるものとなつて居る、丁度相撲の記事の如きものである、我邦でも之は追々盛んになり行くやうである、此他フリー、ランスと云つて、方々の新聞に寄書することを專門にして居るものが西洋にある、記事の頓に不足したときなどは、必要なものであらう、之から新聞内容に就きて比較しやう。

大旅行家奇譚

蠡湖生

▲陸行にて歐羅巴より亞米利加へ横斷せる最初の旅行家

（上）

●佛國の都巴里と米國の紐育市との間には太西洋が横はつて居て、此間を旅行するには是非とも船に頼らなければならぬやうに思はれる。又實際今迄此間を旅行する人は悉く太西洋を渡つたので、今後も多年の間船に頼るに違ひはあるまいが、然しながら陸を通て旅行することも出來ないのではないのである。如何なる途を取れば陸行することが出來るかといふに、巴里よ

り伯林、モスコーを經て、モスコーより西比利亞鐵道を利用し、西比利亞のイルックツ市迄滊車に乘つて行き、それから北極洋の岸に沿ふて旅行した後、白令海峽を越えて北米アラスカに渡り、黄金の產出を以て有名なるクロンダイクを經て太平洋の西海岸を通過し、カナダを經て紐育に到るのであるが、此旅行は人跡殆ど絶えたる西比利亞の極北を通行することであるから、其途中の困難は一通りでない。今迄此大旅行を試みた人は元より、試みやうと思つた人さへも無かつたのであるが、昨年英人ハーリー、ド、ウイント（Harry de Windt）が初めて之を成し遂げた。近刊のハーパース雜誌に其興味多き記事が出て居たから、これに據りて其一斑を御話しやうと思ふ。

●此ハーリー、ド、ウイントといふ人は英米に於ける有名なる大旅行家で、曩に西比利亞鐵道のまだ完成せぬ前北京からモンゴリヤ及び西比利亞を通過して巴里迄旅行したこともあり、又露西亞から波斯、ベルチスタンを經て印度へ旅行した事もあつた。そして其旅行記を著はして居る、一は Pekin to Calais by Land といひ、一は A Ride to India といひ、共に頗る興味のある書てある。此人は自分の經驗から巴里紐育間を陸上で旅行することが出來るであらうと思ひ付いて、今より七年程前紐育を出發點とし、巴里を到着點と定めて此大旅行を企てた。即ち紐育を春に出發して、カナダのウイニペッグ及び晩香坡を通過し、クロンダイクを經、八月末アラスカの北の極端へ到着した。ところが白令海峽ははや氷結して居て舟を通ずることが出來ぬから、之を渡るには翌年の七月氷が解けて渡れるやうになる迄待たねばならぬ、かくすれば殆ど一年もアラスカに暮らさねばならぬことになるから、殘念ながら目的を達せずして歸つて來た。

●然しド、ウイントは飽く迄も其初志を貫く決心で、前の失敗に懲りて、此度は巴里から出發することに定め、一昨年の十二月同行者二名と共に此大旅行の途に就いた。こゝに於て讀者諸君は怪しまるゝであらう、西比利亞は有名な寒地であつて、冬は積雪一面に道路を埋めてとても旅行は出來まい、夏ならばよさゝうなものであるのに、何故にド、ウイントの一行は冬がこれから始まらうといふ時を態々選んで出發したかと。此疑問は如何にも尤もであるが、實際西比利亞の內地を旅行するのは冬に限るので、春から夏にかけては殆ど不可能の事てあるのである。それは何故であるかと

いふに、西比利亞の北部にはタンドラ(Tundra)といふものがある、此タンドラは茫漠として殆ど際限もない廣き濕地或は沼澤て、春から夏にかけて一面に草が生ひ茂り見渡す限り青々と廣がつて、其中に美しい野生の花が紅白の色鮮かに咲き亂れて居る、外面は斯の如く美であるけれど、其中には殆ど足を踏み入れることは出來ぬ、足を踏み入るれば膝迄も濕りたる泥土のうちに足が陷入つて、殆ど動くことも出來ぬやうになる。これが爲めに春夏の間は旅行することは殆ど出來ぬのであるが、冬になると一面に雪が降つて、此タンドラは氷結してしまうから、其上を橇に乘つて一時間十哩といふ快速力を以て走ることが出來るのである。それて冬の旅行は寒いことは寒いが比較的容易なのである。

●右の次第でド、ウイントの一行は態々冬を選んで巴里から出發したのてあるが、一行は伯林を經て先づ露國の舊都モスコウへ到着した。モスコウから西比利亞鐵道に頼つて、西比利亞の巴里といはるゝイルクック市へ到着したが、其間の旅行に二週間ばかりかゝつた。此イルクック市には西比利亞太守の政廳があつて、西比利亞の富豪が多く住んて居り、町にはよき旅館や、劇場や、音樂堂等が備はり、夜は電氣燈を以て市街を照して、頗る繁盛な所である。さて此處迄は汽車に乘つて文明的の樂な旅行が出來たが、こゝより先きはもはや鐵道が通じて居ないから、馴鹿の牽く橇に乘つて行くのである。ド、ウイントの一行がイルクックを出發した後、第一に到着した都はヤクックといふ所である。此二都の間の距離は凡そ二千哩即ち我八百里ばかりで、東京から長崎へ往復するよりも猶ほ百里以上遠いのである。此二都の間には殆ど途といふべきものはない、イルクックより凡そ百五十哩行くと西比利亞三大河の一なるレナ河の岸に到着する、こゝより氷結せるレナ河の上を橇に乘つて行くのであつて、其途中には河の方向を示す爲め、短き距離を隔てゝ松の木を氷の中に立てゝある。其松の木を目標として途を知るのてあつて、又レナ河の上流には所々溫泉の湧き出づる所があり、こゝは冬と雖も氷らぬから大に注意しないと河の中に落ち入る患がある。途中宿場といふべきものは丸木造りの小舍てあつて、旅人はこゝに就いて塩づけの魚や黑きパンを求むることが出來る。冬は前述の如く橇に乘つて旅行するのであるが、夏はレナ河に通つて居る小蒸汽船て行くのである。

●イルクックよりヤクック迄天氣の都合がよければ凡そ三週間で行くことが出來る。然し風が荒い時には雪が吹きつけられて處々に雪の小山が出來、橇がそれを上り下りするのに大に困難であるから、一月以上もかゝる事がある。ド、ウイントの一行は昨年の一月十八日、イルクックを出發し、二月十四日ヤクックへ到着した。其途中の困難は一通りでは無かつたが、其後一行の出遭つた困難に比れば何でもないものであつた。ヤクックは同じ名の州の首府で、州の大守が住んで居る。聖彼得堡と電信の聯絡があつて、人口は凡そ一萬人ばかり、其中歐州人は一小部分で、大半は土人のヤクート人である。歐州人は無論露國人が多く、官吏、武官及び商人で、別に政事上の罪により流刑に處せられた人々も居る。此都は夏は世界中一番暑く、冬は世界中一番寒いとの評判のある所で、冬の寒さは平均氷點以下四十度である。我國で一番寒い北海道ですら冬の最中に氷點以下二十度に下る日はあまり多くはない、されぱヤクックは北海道で一番寒い時よりも更に二十度以上寒さが劇しく、然も其寒さが冬中續いて居るので、土地は冬期間六百呎の深さ迄氷り透し、土人の家は氷の塊を以て窓として居て、家の中では絶えず火を燃いて居るにも拘はらず、春の終り迄其氷が決して解けることが無いといふのを見ても如何程寒いかがいさゝか想像されるのである。

●ヤクックは決してよい所でない。冬の寒さが過ぎて夏になると非常に暑い上に蚊が非常に發生して雲の如く群がる、その上にレナ河が春になつて解け始めると必ず大水が出て、市街は全く水に浸されてしまう。此やうないやな所ではあるが此邊は有名なる黄金の產地であつて且近年石炭鐵等の豐富なる鑛山が發見されたから、追々人口も增加して次第に繁昌になりつゝある。露國政府は現に西比利亞鐵道を分岐してイルクックより此處迄延長さすことを企てゝ居るそうであるが、此鐵道が完成する曉には西比利亞一二の大都會となるであらうとの事である。今でも毎年七月此都に於て大なる市が開設せられ、四邊の人民が集合して盛なる商買取引を行ひ、其總額は五百萬圓にも及ぶといふ。土人のヤクート人は蒙古人種で顏色の黄なる、鼻の低い、身長はあまり高くない、筋骨逞ましい人種で、毛皮を取つたり、漁獵をしたり又はマンモス象の牙を採取したりして生活して居る。

●昔はヤクックの四邊は非常に廣大なる沼地であつ

てとても耕作の出來る見込は無かつたのであるが、今は豐饒なる耕地若くは牧場と化して多量の穀物と多數の牛畜とを産するやうになつた。これは露國からこゝに流されたスコプチ宗徒の力に頼るので、此宗徒は頗る勤勉なる農夫であつて、非常なる信仰と非常なる勞働とを以て沼を埋め、水を通じ、後には米國から浦鹽港を經て新式農業機械を輸入し、盛に開墾した結果である。前には此邊りに牛の影は稀に見る所であつたが、今では毎年三百萬圓の價ある牛の凍肉を四方に輸出して居るそうだ。

（以下次號）

凄慘見るに忍びず

……花の三月歌舞伎の秋色……

伊藤銀月

下

其六　見るに堪へず

加藤清正として泣き、生え抜きの江戸ッ兒として泣く、何人も是以上に能く泣くの團十郎を見しことあらざるべし、然れども、菊五郎を失ひし歌舞伎座は、之を以て猶ほ未だ江戸ッ兒的看客の多數を滿腹せしむること能はざらんかを怕るゝが故に、更に團十郎を勞して、亡友の孤兒の爲めに對面せる我の一場を開かしむ。寒天之を裸體にし、自ら手を彼の肉に加へて姿勢を作らしむ、團十郎の丑之助を敎ふるや、力めたりと云ふべし、然りと雖も凡骨は竟に凡骨也、豚兒は竟に豚兒也、千鍛萬錬するも銅の金に化する期は無し。

丑之助即ち新菊五郎の技藝に酬はるゝ喝采は、全く亡菊五郎に對する看客の好意にして、丑之助の價値に拂はるゝものならず、五郎時致の態度の引締らざる、其音聲の非音樂的にして、其調子の齒切れがせざる、眉を昂げ唇を翻へすの刹那に、芬々たる大根俳優的臭氣を發散して舞臺に充滿せしむる、菊五郎の名、此少年の爲めに瀆されずんば幸也。

●或は技藝と年齢の關係に藉口して、強ゐて丑之助を辯護せんことを試むる者あり、然れども、彼の年齢は既に小兒よりも成年に近し、外觀内容倶に年齢を超過せる程の發達をなせり、獨り發達せざるものは其技藝のみ、故人小傳次を見よ、宗之助を見よ、吉右衛門を見よ、凡て是れ、彼と同年輩若くは彼より幼き時に於て、劇界の麒麟兒たるを認識せられし者にあらずや、亡父菊五郎の如き、彼の年齢にして既に一個の名優た

りし也、若し此少年にして、稀有の人氣俳優菊五郎を父とするの果報を有せざらしめば、或は豊國祭の踊りの連中に加へられて、瓦礫の如き徒輩と共に舞臺を一巡するの憂目を見せられしやも知るべからず、若し「大器晩成」てふ、凡物に都合好き諺あらざらしめば、彼の前途は全く暗黑ならん。

情實に制せられ俗情を迎ふるを本義となすの劇評家も、丑之助の時致を稱揚するの辭に窮したり、或は曰く年齢が相應せりと、是れ俗評の最も俗なるものにして、大向連と雖も猶ほ之を口にするを耻づ、劇評家の惑へるを見るべし、或は曰くフックリとして好しと、引締らず齒切れがせざるを形容するにフックリとは妙の極也、劇評家の苦めるを見るに足らずや。

英造改め榮三郎に至りては、凡中の凡、鈍中の鈍、單に、俳優の子必ずしも俳優たるに適するものならざるを示すべく登場したるものに過ぎず。

即ち歌ふて曰く、「梅が枯るれば尾花が茂る」と凄慘更に見るに堪へず。

其七　生硬と滑稽の中間

二番目狂言の選定と、其登場俳優の選擇は、尤も歌舞伎座をして肝膽を碎かしめたり、菊五郎を失ひたる歌舞伎座は、事實に於て二番目狂言を菊五郎に殉死せしめたる也。

團十郎の利用も中幕以下に及ぶこと能はず、既に菊五郎を失ひ、亦團十郎を利用すること能はずとすれば、歌舞伎座の二番目狂言は全く零也、此に於て歌舞伎座の狼狽は、有無を云はせず權十郎を奪ひ來るの激手段に變せり、權十郎を左團次より追剝し來れり。

然れども、權十郎は元二番目狂言の立物にあらず、權十郎を中心としたる二番目狂言は、菊五郎を中心としたる二番目狂言の記憶を失はしむる程、爾く看客を熱するに足るべしと信ずること能はざる也、即ち「花盛劇楓葉」てふ、大坂仁和加を少しく燒き直したるが如き滑稽劇を作り、權十郎の徳川武士的風采を利用したる大俗趣味の準茶番狂言を演ずるの窮策に出でたり。

劇評家の或者は、狂言綺語を事實と混同して舞臺に斬り込むが如き常識を失ひたる人物を主となすか故に、徹頭徹尾ノンセンスにして評するに足らずとなせり、然れども、權十郎、八百藏、松助、市藏、家橘、染五郎、芝翫、梅幸等が、能く此準茶番狂言を消化して歌

舞伎狂言となし、茶番狂言との差纔に一髮の間より、特殊の趣味、別樣の風致を捉へ來りたる手腕は、決して見るに足らずとせず、況んや、德川時代偏狹なる武士的敎育の感化は、稀に藤倉岩之丞の如き、明治劇評家の眼孔には單に常識を失ひたる人とのみ映ずる所の、極端なる義勇士を出せし實例あるに於てをや。

權十郎の岩之丞、權十郎にして始めて此妙あり、八百藏、染五郎をして之に倣せしめば生硬に失し、市藏、松助をして之に倣せしめば滑稽に失せん。

兎に角、歌舞伎座の二番目狂言は、歌舞伎座の狼狽の大部分を展覽すべく開演せられたるものに過ぎず。

其八　昨日の榮三郎を弔ふ

莚升が左團次の俳名を繼承したるは、早晩左團次を繼承するの階梯を踏みたる也、然れども、養父の俳名を繼承したる梅幸には踏むべき階梯無し、既に達すべき處に達し了りたる也、昨日の榮三郎を弔ひ、今日の梅幸を憫む。

中央新聞懸賞の緞帳は、改名披露の彼を輝かすに足るものならず、中幕對面曾我も、彼を輝かさずして丑之助を輝かせり、大切男子舞も、彼よりは寧ろ多く家橘を輝かせり、彼の舞踊巧みならざるにあらずと雖も、先天的に身長を盜まざるを得ざる欠點は、家橘の自在なるに比較して少なからざる損失あり、加之彼が舞態の餘りに柔媚に過ぐるは、家橘の自然にして、角々の好く極まるに一歩を讓らざるべからず。

此に於て、二番目狂言の女主人公たる江戸藝者は、彼の本役として當然彼の手に落ちざるべからず、昨日の榮三郎猶ほ之を要求するの權利あり、況んや今日の梅幸をや、彼避けて逃るゝも、江戸藝妓の役は彼を追ひ來らざるべからざる也、何ぞ測らん當然彼に屬すべき光輝、空しく他の地位と名聲の爲めに奪ひ去らるゝに至らんとは、奴の小金は斷じて梅幸の物也、芝翫の箝まり役にあらず。

芝翫の迷惑、梅幸の不平、芝翫は優遇を感ぜずして梅幸は冷遇を感ず、歌舞伎座の不利也、看客の不利也。

嗚呼、昨日の榮三郎を弔ひ、今日の梅幸を憫む、團十郎の二女に結婚を申込みしと云ふが如き、之を事實とすれば以て彼の煩悶を察すべく、之を風說とすれば、以て如何に世間が彼の煩悶を察しつゝあるかを見るべし。

其九　芝翫の將來

芝翫は風にも禁へぬ御姫様にあらず、舊俳優中比較的新頭腦を有する者は彼也、舊俳優中比較的事理を解する者は彼也、彼は八百屋阿七の振袖の中にも滿々たる覇氣を包む者也、大磯の虎の裲衣の裏にも天下を窺ふの野心を藏する者也。

彼は團十郎を學べり、今は早や團十郎に私淑する程に增長せり、彼は又三郎の如く團十郎の皮を學ばず、左團次の如く團十郎の喉を學ばず、彼の團十郎張りは、近眼鏡を隔つるの眼に映ぜざる程、それ程罪深し。

彼の品格ある美貌は、女子に份して極めて女らしく、男子に份して極めて男らしく、彼の價値は技藝の價値にあらずして風采の價値也、表情力の價値にあらずして容貌の價値也、彼は此都合好き美貌を流動資本として、劇界に於ける其家格を固定資本とし、覇氣と才氣とを縱橫に運用して、暗に團菊沒後の天下を圖りつゝあり、其志全く小ならず。

彼が暗々裡に蓄積せる潜勢力は、漸く其志に酬ふべき兆候を呈し來れり、菊五郎死して骨猶ほ餘溫あるに、彼が劇界に於ける重量は殆んど一倍を增せり、彼が看客に唱へらるゝ名聲は更に一段を加へたり、歌舞伎座の三月狂言は、一面より見れば團十郎と彼との演劇也、團十郎の爲めには準御名殘狂言にして、芝翫の爲めには準出世狂言也。

團菊沒後の梨園に覇たるべく、技藝よりも寧ろ人物に於て恰當なる者を求めば、先づ拇指を芝翫に屈するの外無し、團十郎が英雄質の後を受くるに芝翫の君子質を以てす、天下は輙ち太平ならん。

其十　染五郎の將來

染五郎を標的となせる團十郎養子說は、既に舊世紀の夢と消えぬ、堀越家に事情ありて、染五郎養子說を復舊せしむること能はざるが如しと雖も、彼に對する師父の愛は衰へたりと云ふべからず、五月興行に高麗藏となり、加之松本幸四郎を襲ふの好望遙に招手するあれば、彼の前途は奮勵の價值無き程に詰らぬものならず。

狹くして薄かりし彼の技藝は、一興行毎に其廣さと厚さを加へ來れり、而して看客も亦彼が寸々の發達を認むるに吝ならざるが如し、彼に取る所は其眞面目也、其熱心也、眞面目と熱心は、動もすれば未熟なる彼の

技藝より廣さと厚さを奪ふて、益々單純ならしめ、愈々淺薄ならしむるの弊なきにあらずと雖も、それだけ前途に發達の希望多し、好漢自愛せよ。

藤倉の若黨梯助は、彼が眞面目と熱心の成功也、技藝の成功よりも彼自身が人格の成功也、彼が滿腹の忠誠自然に面貌に流露して、能く看客を動かすの眞氣となる也。

清正馬上に杜鵑を聞く時、松樹に隱れて暗涙を飲むの平野長泰は、直ちに師父が命數の迫れるを悲む染五郎自身也、此時の情懷より悟入せんことを要す。

舞踊の素養より得來れる動作の美は、恐らく團菊沒後の唯一人として、彼を劇界に濶歩せしむる特長なるべし、眞面目と熱心の角々に動作の美を加ふれば、其處に獨立せる染五郎を發見し得べし、間者を斬つて微笑するの平野長泰はそれ也。

八百藏、染五郎、倶に團十郎の皮相を學ぶものに過ぎずと雖も、八百藏は單に音調の團十郎也、染五郎は音調の團十郎たる外に動作の團十郎たらんことを期す、是れ染五郎が、音調の團十郎たる點に於て八百藏に一歩を讓らざるべからずと雖も、動作の團十郎たる點に於て、全く八百藏に無き所のものを有する所以也。

寸々の發達、積んで尺を成し丈を成すに及ばゞ、彼が長所の愈々發揮せらるゝと共に、其短所亦益々著しくなり來るべし、故に今に於て彼の將來を豫言するは、較花木に對して結實の數を問ふの愚に近しと雖も、幸にして今日の發達の比例を失はざること十年ならしめば、兎にも角にも團十郎の衣鉢を傳へん者は、團十郎の寵兒たる家橘にあらずして彼なるべし。

團十郎直傳の和藤內を演じ、荒獅子男之助を演じて、單に己自身の資質が團十郎式の技藝に適せざるを示し得たるに過ぎざりし家橘は、元來團十郎の殊寵に浴すべき資格ある者にあらず、團十郎の老衰せるや久し。

（完）

日本の芝居と音樂

エル、ヴロンネル
古紘 譯

(二) 音樂

芝居や俳優以外に我等の注意を惹くものは音樂である、が併し之は絕對的に下等なもので到底我等をして興趣を催さしめなかつた、一夕親しく日本の音樂を聽

く事が出來た、そして我友なるオハシサン（大橋さん?）はガクニン（樂人）の名高さを述べ、ガク（樂）の高雅なる事を說ひたが、我等は到底聞くに堪へなかつた、恐らく誰も此樣な厭な目に遭つた人はあるまいと思ふ、聽いて居る間、我等は嘲笑を抑へ〳〵るので、內臟の痙攣を引起した、其苦しさといつたら實に痛ひのに淚を耐へるよりも辛かつた、然るに心中には正反對の思想と希望を有しながらつくねんと坐て聽て居たから腦が變調を來して、其後容易に快復しなかつた。

ガクと云ふは日本語で英語の辭書で見ればミユージックとある、もし讀者諸君にして一度ガクを聽かれたなら、辭書が如何かしたのではないかと疑ひ、又其信據すべきものなるや否やを疑ひ、從て辭書に便るのを躊躇するに至るであろう。

だからガクとは下の如く說明しなければならんと思ふ。「音とは不規則な支離滅裂なる叫聲の排列て、調子外れな絲の音に唸り聲を交へたものである」と。再び辭書に尋ぬれば此唸聲は歌唱なりと答ふる、詳しく言へばウタとはソングを意味するので、ウタフと云へば歌ふ事を示す働詞である、「オウタウタウナサイ」と云へば「プリース、シング、ヱ、ソング」と仝じてはあるが、之はむしろ「どうか兩方の耳一杯程の綿を下さい」と譯さなければならない、耳によく栓をしてガクを聽くならば幸に氣狂ひにならずに濟む、さもなければ餘程の克己心が必要である。

日本には幾多のガクの種類があるが何れも他國のものに比すれば下劣である、て其中に只一つ少し勝れたものがある、其は秘傳に屬するもので、神道の祭典に用ゆるのであるが、只不調和な合奏をなすのみ、然し耳を聾く樣な歌はないから、幸ひに先づ此時丈は綿の御用意は必要であるまい。

屢々樂人なるものを觀察して余は彼等か多く心臟破裂と腦充血で死ぬ事を知つた、歌を唱ふ爲にかの如く咽喉を過役するから咽喉は膨脹し喉笛は非常に隆起して、彼れ等の眼は血走つて顏は鈍き灰紫色をなして居る。

數人の樂人が合奏する時は彼等は律にも調にも少しも注意しない、如此ものは所謂ガクに關係なきものである、只彼等は相互に時を仝じくするのみである、蓋し「仝時」何事に就ても日本人は只此を知るのみ、銘々の唱歌者は如何に不調和を來たしても御搆ひない、各自得手勝手に唸り又叫ぶのである。

日本では雅樂を除いては音樂に符號がなくつて、口から耳に傳へるのだから、生きた人間に敎へて貰ふ外はないのである、極幼少の娘は毎日樂を習ふ爲に敎師の前に數時間坐つて居る、此敎師は多く女の花盛りをすぎて最早お茶屋に用のない女である、そして樂を敎ゆる方法は如何てあるかと云ふに、其少女をして能ふ限りの聲を張り上げて喉を破らしむる、そして完全なる進歩をさせるのである。

凡て日本の歌は此喉を破るとが必要であると言はれるが、恐らく我々外國人は其殘酷に吃驚しないものはあるまい。

我前に坐せる濃艶美麗なる婦女が唇邊媚に溢るゝ微笑を浮べ玉の如き手に撥を把り靜に膝の上で三味線を弄して居る時に、誰か一度彼女が口を開けば惡魔の鳴聲の如き恐る可く忌む可き聲を以て歌はふと思はうか、併も其がスウィートラブソングだと聞くに至ては殆ど滑稽である。

孔子といふ聖人は、支那は一度眞の音樂を有して居たと言ふて居る、されば恐らく日本も往古に於て之を輸入したに相違ないが、以來少しも進歩改良しなかつたものと思はれる、が併し近年に至てはヴィオリン、ピヤノの如きものも大分流行し來り、日本の音樂學生にして外國に留學して名を博したものもあるから全く絶望すべきではあるまい。

時事諷壇



新罪言

藍川

▲耀國光

十萬艨艟耀國光。
至尊駐蹕攝之陽。
滄溟乍裂礮聲震。
蝃蛛相連旗影颺。
偪頌皇謨逾擴大。
且欽士氣自軒昂。
魚龍窟宅歸吾有。
應稱東洋海上王。

▲冀平安

長白山頭鵰鶚盤。
黑龍江上陣雲攢。
豺狼咆哮瓜牙銳。
燕雀啁啾毛羽寒。
胡越一家須輯睦。
亞歐千歲冀平安。
强隣未得抗公議。
好徹干戈避釁端。

▲一夢春

櫻花七日散爲塵。
轉瞬空過一夢春。
台麓雨寒黃鳥谷。

墨陀烟鎖白鷗津。香車載妓賽神佛。酒債典衣稱搢紳。
只醉東風歌且舞。綠陰誰是讀書人。

▲多不平

政友會中多不平。自由舊夢憶前盟。羽書廳駭滄浪閣。
旗幟先鋤大坂城。郊野草肥駑馬躍。池塘水濁衆蛙鳴。
人心倦盡演新劇。難博登場喝采聲。

▲成田屋

菊五凄然歎落英。梨園後進寂無聲。老功獨有成田屋。
得意殊推大坂城。啖苦饅頭能守義。演歌舞伎孰爭名。
却憐奢盞板垣伯。未及團洲抵死鳴。

▲難免死

少時閭巷舊空拳。貨殖辛勤秘訣傳。未得黃金隨白骨。
徒將白酒醉黃泉。誰言鑛窟非常毒。我慨錢神無上權。
富壓公侯難免死。人間何術化爲仙。

▲在禽蟲

嗚呼孝々雀忠々。孝々忠々耳欲聾。學校教科如此耳。
人間標本在禽蟲。

▲花井梅

賤妓刑餘出獄來。殘骸抱疾亦堪哀。新聞在手我驚怪。
特筆大書花井梅。

▲噫無情

涙香飜譯筆縱橫。蔗味津々不可名。如此佳篇猶斷續。
人間萬事噫無情。

▲抱宿痾

紅葉山人抱宿痾。牛門弟子果如何。或呼風葉或荷葉。
木葉作家天狗多。

▲皆賊徒

噫聖人乎盜賊乎。標題一讀亦長吁。口頭頻說聖人道。
心術看來皆賊徒。

▲多愛嬌

扛捉椿姫問法條。何圖罪案忽然消。判官顔色似閻魔。
猶向婦人多愛嬌。

▲鳴不平（讀平民之友憶大井馬城）

世上何人記馬城。新編在乎涙縱橫。誰言老驥志千里。
空自草間鳴不平。

▲無虛搆（讀湘烟日記）

巾幗丈夫如此稀。當年內助最堪推。斷腸文字無虛搆。
一片湘烟鎖墓碑。

新へなづち

久良岐

▲青森飢饉

痩せ〱て飢に泣く子の野に山に
　満ちたる見れば春としもなし

▲鑛毒王死

古河の狸市兵衛身失せけり
　渡良瀬川の水を濁して

▲滿目新樹

目に青葉山時鳥初鰹魚
　などゝ意氣がる江戸ッ子もなし

▲端午節句

腸の穢なきやつの多き世を
　五月の鯉も空に泣くらむ

▲落紅委地

江戸ッ子の洒落と意氣地は散る花の
　色無きが如地に墜ちたり

▲文明疑義

人は殖え金は減る世を空威張
　浮たる名をば只に喜ぶ

▲政友革新

色深き牡丹の春や崩るらん
　餘りに永き花の雨故

▲博覧失態

浪華津のあしのみ茂ける世の中は
　爰もおどろぞ今宮のあたり

▲處世角力

肩透かし爪取ペテン化粧立
　鬼龍も物か今の世の中

▲修羅世界

利益には蚤取眼猿眼
　まなこ怒らし掴み合ふ世か

思潮

個人が帝國を製造する國と國家が教科書まで國定する國

「早稻田學報」　法學博士　高田早苗氏

總て教科書は何に限らず倫理ても普通の教科書ても自由撰擇にさせるが宜しい普通の教科書は固よりのことてあるか、倫理たけは國定にするなどゝいふ心配をする必要はない、舊幕時代はイザ知らず、否舊幕時代てあつたからと云つても、朱子學以外に仁齋の教も、徂徠の教も許されて居る、唯政府の方針の取り方て官學として朱子學を奬勵する位のことはあつたが、今日の時代に於て文部省の定めた所の倫理教科書のみを行はしむると云ふことは、啻に不必要のみならず、危險といふ點よりも私は此の事に反對しやうと思ふ、要するに國家萬能主義と云へば少しは躰裁が宜しいが、實は文部省萬能主義といふやうな考て何にも國定、彼も國定と意氣地のないとては、迚も日本の教育の進歩は覺束ない、又動ともすると統一、統一と云つて何にも彼も統一でなければ我慢が出來ぬといふ氣風も是亦甚だ宜しくない、統一も或程度までは必要てあらうが、所謂ヴアラエチー、イン、ユニチーで統一の中に變化があつて初めて進歩を見ることが出來るのである、今日の教育の議論をする人を見ると、無論文部省あたりの人は統一主義、之に反對する人々ても矢張一種の統一主義、文部省の統一主義は往けないから俺の方の主義で統一したいと云ふやうな喧嘩が往々教育社會に見えるが、實に是は愚の至りてあると私は思ふ、自ら信ずるの厚きは誠に結構な話てあるが、さう自分の思ふやうにばかり世の中のことは成る譯のものではない、それよりは先づ大躰だけの括りを付けて、總て試驗的に所謂細工は流々仕揚げを見ろと云ふ理窟て色々やらして見ると云ふをが大躰に於て今日最も方針の宜しいものであらうと私は思ふ、總て日本國家の事は今後何事によらず成べく民間の力個人の力でやつて徃かなければならぬ、今日の世は御承知の通り帝國主義の行はれて居る世界であつて、どれも是れも帝國主義を實行し、世界の廣場に戰つて居るが、殊に向ふ河岸の支那に手を伸して爭つて居るが、其の中て最後の勝利を得るものは個人的帝國主義者のみてある、國家の力のみて帝國主義を實行しやうと掛るものは、終には必ず倒れると私は思ふ、今日まて帝國主義を實行し殖民政畧を行つて眞に成功したのは何處てあるかと云ふと、英國てある、此英吉利の遣り方は成べく個人の働きて行く、帝國主義も個人の働きて實行する、印度を取つたのは英吉利國てはなくて東洋印度會社と云ふ私立の會社てある、英吉利の會社が印度を取つたが大き過ぎて持切れないから、之を政府に奉つたと云ふのが其歷史てある、英國の國家自身が手を出して印度を取つたと云ふ歷史はない、英國が南阿弗利加てトランスヴアール戰爭をやつたと云ふ

お、此戰爭を政府が起すまでの準備は誰が爲したかと云ふと、英吉利國民の個人が鞄を提げて出掛けてした仕事である、或はローデシヤ或はナタルと云ふ樣な殖民地が澤山出來て大帝國の基礎は既に個人の働きで出來た、之を纏めて一つにするのは、終りに臨んで統一にするのには、政府の力を借りなければならぬから、其處でトランスヴアール戰爭と云ふものを起して貰つたのが事實である、總てさういふ風で帝國主義を實行し成功したが、英吉利の遣り方は個人の活動に基く帝國主義である、初めから國家が手を出すと云ふ遣り方は何時もしてない、日本の國民は教科書だけも自ら作ることが出來ぬ、英吉利の國民は教科書所でなく帝國を自ら造るものがある、南阿弗利加に於て雷名を轟かした彼のセシルローズは諸君が御承知の人であるが、是は如何なる人であるかといふと、英吉利人が自慢して斯ういふのである、他の國にも自分の國にも種々な製造家があるが、自分の國にばかりあつて他の國にない製造家が一人ある、是はセシルローズと云ふ帝國製造人即ち是なりと、エムパイヤメーカー帝國製造人は我邦より外にない、何處の國にもないと英吉利人が自慢をするが、此處が即ちアングロサクソン民族の大なる所以である、英吉利に於ては帝國さへ製造する箇人があるから、如何に意氣地がなくても教科書まで國定にして貰はなくてもと考へる。

臺灣阿片の減少は迷信利用の結果なり

「臺灣協會々報」　臺灣財務局長　祝　辰巳氏

阿片專賣の事でございます、是れは起源から申上げると段々ありますが、いつぞや臺灣協會でお話をしたこともございますから、今日は談計上に關係を有して居るだけの事を申上げます、是れは專賣の內でも一番古く制定せられて二十九年以來の事であるのでございます、年々歲入歲出に就て比較を申すと二十九年度は創業の時で實揃けたものが歲入に對して三割四分、三十一年が七割二分、三十二年度が二割六分、三十三年が三割二分六厘、昨年度は三割であつて、合計をすると二十九年度以來の歲入の總計が千八百四十六萬三千圓で、之に對する歲出が三百九十萬圓餘でございまして差引千四百五十六萬圓と云ふ利益を得て居るのでございます、歲出の中には二十萬九千圓といふ固定資本が這入つて居りますので總体の結果は今申した如く三割と云ふ結果になつて居ります、實は御承知の通り、漸禁と云ふものが大体の方針で出來た事實であるから、年々將來に於て歲入の減つて行くと云ふことは初から豫期して居る問題でございます、それゆゑに二十年計畫の表を拵へるに當つて歲入歲出とも其儘になつて居る、歲出が減れば歲入も隨つて減ると云ふやうに當時より其見込を立つて居つた位でございますから一方の漸禁主義の方から云へば漸次其目的を遂しつゝあるのでございます。

唯だ激變をしたと云ふ事が一つ注意すべき點でありますが、三十二年度三年度の實況に依ると月々の賣下高が凡そ三十五六萬宛あつたものが、三十四年度即ち昨年の五月頃と記憶して居りますが二十萬圓一度に減つたのであります、それは一月に減つたのではありません、順に減つたのでございますが、三十五六萬圓賣れたものが二十萬圓減つた、是れが昨年度の豫算に於て減つた結果でございます、是れは當時の新聞などにも出て居つたことで、御承知でもございませう、三十三年の末から新竹地方に降鸞會と云ふものが起つて迷信から此會に這入れば阿片を飲んではならんと云ひ、紙と砂を飲ませ、さうして是が神樣の文字を書いて其文

字に依つて吉凶の判斷をすると云ふ事を以て愚民を惑はした、それが嘉宜、臺中、臺南等に其勢力を伸ばして一時は非常に多くの會員を集め、阿片を飲むことを禁じたのでございます、是は極く好いことであるから警察も之を止める必要もないので別段取締りもしなかつたのであります。

衣服と處世術の關係

「實業の日本」　英國　マーカス氏

衣服は質素といふよりも寧ろ粗末なる部類に屬し、シャツ、さてはカツフ、カラーの洗濯屋と頗る疎遠なるにや、垢附きて汗膩のにじみたる汚點も見られて、襟飾には沙塵の附着すれども掃はず、靴は久しく磨かれたることなきか全く光澤を失へるを穿てる青年あり。

余は此の如き青年を以て決して無賴漢なりと言はず、ニコラス、ロングウオースは非常なる富と非常なる慈善心を有する人なるも、曾て乞食と誤られて銅貨を投ぜられたる程の敝服を着し居たり。然れども青年にして以上の如き敝服を着して平然たるものは最も處世の才に乏しき者にして之より受くる損害は頗る多大なるを覺悟せざるべからず。極貧の子弟にして殆んど修整の餘地を有せざるものは姑く別論とし、苟くも多少の報酬を得て生活する者は、シャツを洗濯し、カツフカラーを洗濯するは決して爲すを得べからざる事にあらず。之が爲に犧牲とする費用は極めて輕微にして少しく心懸ある者は、則少しく處世の才ある者は薄給の者と雖も優に相當の修整を爲すを得べし、況んや襟飾の歪を揃ひ、靴を磨くが如きをや。然るに敢て費用を吝むにあらず、敢て時間を愛むにあらずして之を爲さゞる青年尠なからず。彼等或は言はん、衣は以て體を蔽へば足る、問ふ所のものは被はれたる人物是のみと、以て彼等が如何に處世術に拙なるかを見るべし。天下服裝を見ずして直に人物を見るもの果して幾人かある、試に髮を亂し、髭を延ばし、煤ぶりたるカラ、汚れたる上衣を着て店頭に見張せよ。彼の蓬頭粗服を見て踵を旋さゞる者は僅に宗教家若くは哲學者若くは爾と同一の人種に屬する不潔の漢子ならんのみ。自己と他人との接觸を平滑ならしむるは極めて微妙なる所に在り、此微妙なる呼吸を解する能はざる者は則處世の術を知らざる者のみ、ソクラテスを學ばんと欲すれば去て思想界に往くに若かず、然るに實業界にも何ぞ其れソクラテスの多きや。（處世術と成功術の文中一節）

賭博心の氾濫

「萬朝」　堺　枯川氏

日本の社會には今正に賭博心が溢れて居る。賭博心の濁流が人の胸から溢れ出て、社會の表面を縱に流れ、横に流れ、或處には大波を作り、或處には渦卷を作り、滔々として一世を蔽ひ、健全着實の風氣を洗ひ去らんとする其勢ひは、恰も雨期に於ける洪水の氾濫の如くてある。

彼の勸業銀行の債劵を見ずや。二十圓の餌を以て一千圓の鯛を釣らんと欲する者が皆爭つて此債劵を買ふのである。彼の鼠の籤を見ずや。ペスト豫防の爲に鼠を捕ふる者は殆んど無く、一錢の資本も掛けずに百圓の金を攫まんと夢みる者が、皆な熱心に鼠を捕ふるのである。彼の臺灣總督府の富籤興行を聞かずや。又た彼の菱屋銀行の富籤興行を聞かずや、此二つは去月の本紙が詳かに報道したる所てある。又昨今世上の問題となれる延取引の事を聞かずや。是れ亦明かに賭博の便利を計る者てある。其外、貯金奬勵と云ひ、便利貸付と云ひ、懸賞と云ひ、福引と云ひ、多

くは是れ人の賭博心に投じて利を得んと欲する者である。少しく社會の現象に注意する人は、必らず是等の事實に氣が付いて居るであらうと思ふ。

斯くの如く賭博の機關が處々に設けられて、いよ／\ますく\賭博心を煽り立てる結果は、終に如何なる有様に立至るのであらうか、吾人は之を思ふて實に寒心に堪へぬ者である。

賭博心は即ち僥倖心である。僥倖心は自己の力量を恃む事を知らず、自己の品性を重んずる事を知らず、順序に依り、次第に依つて進む事を知らず、小より大に、低きより高きに至る事を知らず、只一躍して幸運の潮先に乘る事ばかりを考へて居るのである、故に勞働を賤み、勤勉を厭ひ、怠惰にして穴守稻荷を拜するに至るのである。社會多數の人心が若し實に斯の如くなるならば、其社會の滅亡は期して待つべき事である。賭博心は又私慾心である。多數人の損失を集めて我一人の利得とするのが即ち賭博である。賭博を好む者は他人を踏みつけて立つ事を好む者である。謂はゆる自由競爭の個人主義は、此賭博に於いて最も露骨に其暴虐無殘を現はして居るのである。博愛平等に向つて進むべき我が社會が、如何にして此賭博の風を許す事が出來やうぞ。

早婚晩婚及離婚等の地方別

「社會學雜誌」　主筆　布川靜淵氏

早婚者に離婚多きとは夫妻相互の年齢別によりて之を見たり、今地方別に示せば左の如し

	三十二年中の離婚	三十二年中結婚	夫満十九歳迄結婚	妻満十七歳迄結婚	夫満五十五歳以上の結婚	妻満四十五歳以上の結婚
東京	二五三〇	一、三一三三	一九七	五六〇	六四	二三五
京都	一一三一	六一四八	九〇	二六五	一九	八九
大阪	一五〇五	八七三二	一四一	三〇六	四一	一四三
神奈川	九九四	六二八四	一一三	二四六	一四	八八
兵庫	一八九六	一〇一五九	二五九	五四〇	三〇	一一四
長崎	一一三二	四七三一	一二四	二六三	三七	一一〇
新潟	三八九〇	一、五五一三	八八〇	一二二八	四七	一五九
埼玉	一六四四	九二〇七	六七八	四四二	三〇	七五
群馬	一三三六	五八六九	四五八	二八八	二二	七三
千葉	一八九八	八九二六	六九一	七二一	三〇	八八
茨城	一四五六	七二七一	五三五	五一三	三一	八四
栃木	一四七二	五五七二	四五七	三三三	三三	八〇
奈良	一六一九	三〇〇一	八九	一〇二	一四	四八
三重	一一五六	六三〇〇	二〇九	三二四	二二	七九
愛知	二三三二	一、〇三四二	二七九	五八〇	五五	一一四
靜岡	二七六九	九一九〇	四七六	九六五	二四	九四
山梨	七二九	三三九九	一二二	一三〇	九	三〇
滋賀	六七九	四四九八	七八	一四八	二〇	五三
岐阜	一三〇九	六四八九	一三七	三六六	二八	七一
長野	一六八六	八六九七	三〇四	四九五	四〇	七六
宮城	一四二六	六二八四	四四二	八七三	一六	六〇
福島	一九五一	六九二九	六七一	六八四	三四	一〇三
岩手	一五六六	四八二八	七二五	一二六四	一三	五六
青森	一三七九	五〇八一	五五〇	一二三五	一二	三五
山形	一七四四	六九四三	五三二	八四五	二五	一一六
秋田	一九九四	五四三五	四四一	一三四八	一六	四八

福井	八八七	四六八四	一九二	三八二	一四	四五
石川	一〇五六	五三八三	一四四	五九七	一七	五四
富山	九五五	五七四〇	一六七	七八四	二二	五四
鳥取	六四三	二四二九	一五二	一六九	一二	三四
島根	一二七四	四〇五一	一四五	二七八	二四	六五
岡山	一四三九	六〇七三	二三〇	二一〇	一九	六七
廣島	二六五八	八六二二	三三六	六五七	五〇	一一六
山口	一三七三	七〇八一	一四五	四五〇	五五	一〇九
和歌山	七二一	四三六七	九五	一六九	二四	五五
德島	七五二	四一五五	二〇九	一三四	一五	五七
香川	九九一	四一八七	一五三	二三〇	一七	四九
愛媛	一八五九	六二七二	一六一	四四七	四三	一三二
高知	一〇一五	三五六九	一三七	三四三	二二	四七
福岡	一九八九	九一一三	一七二	四七二	六三	一三二
大分	一二九三	四九〇五	一五一	三一九	三八	七八
佐賀	六九三	三九四一	八一	一七五	一五	五一
熊本	一四九六	六八八四	一一七	二四九	七三	一二〇
宮崎	六三九	二四二四	八九	一五九	一六	四四
鹿兒島	一〇一五	五九二三	八三	一九二	二六	三九
沖繩	七八一	二四九三	二三〇	七八	四	一〇
北海道	八〇三	六三一五	四四一	六五二	二〇	一二四
總計	六、六五四五	二九、七三七二	一、三〇三〇	二、二四〇〇	一三二六	三七九三

右表により更らに見易き爲め數の多き順序に從て縣名を記さん

結婚　新潟、東京、愛知、兵庫、埼玉、靜岡、福岡、千葉、大阪、長野、廣島、茨城、山口、

離婚　新潟、靜岡、廣島、東京、愛知、秋田、福岡、福島、千葉、兵庫、愛媛、山形、長野、岩手、

早婚（夫十九迄結婚）新潟、岩手、千葉、埼玉、福島、青森、茨城、山形、靜岡、群馬、宮城、秋田、栃木、

（妻十七迄結婚）秋田、岩手、青森、新潟、靜岡、宮城、山形、千葉、富山、福島、廣島、

晩婚（夫五十五以上結婚）熊本、東京、福岡、愛知、（山口）廣島、新潟、愛媛、長野、岐阜、

（妻四十五以上結婚）東京、新潟、大阪、大分、北海道、愛媛、熊本、山形、（廣島）愛知、長崎、山口、

吾人は夫の十九歳以下妻の十七歳以下を以て早婚と見做し其數を計算したる結果如上の表を得たり、之によれば關東及東北地方は實に早婚の地たるを知るべし、而して早婚の甚だしき地方に離婚も亦大なるの觀あり、之れ自然の趨勢に非るか、蓋し早婚は心身共に未熟にして愁情激變するの時代なればなり、晩婚者の離婚すると多きは年齡によりて分ちたる統計によりて明かなり、右は一年中の出來事なれば未だ其少數なる晩婚者の消息を示すに足らざるも仔細に之を見れば必ず其事實を見るに難からざるべし。

又夫の二十歳迄の結婚は二萬四千二百五十一人にして妻の十七歳までは二萬二千四百なれば此年齡は殆んど相一致する觀あり、然るに夫の十九歳迄を見るに一萬三千〇三十なれば約半數にして十九歳より二十歳の一年間に倍數となるを見るべし。

東北及び關東地方特に新潟の如き何故に早婚多くして關西、四國九州等に少なきやは詳細に論するの必要あるも茲には一言して止まん、一般に寒地は暖地に比して女子生理の點より見るも月經期遲く從て發達も鈍きものなれば、東北地方より寧ろ關西九州四國等に於て早婚を見るべき筈なり、然るに今日其の反對の結果あるは何故ぞや、一は文化の程度異な

る爲めなり、女子教育の如き關東々北は未だ盛ならず、四國九州邊より上京遊學する婦女多き割合に關東々北は少なく、近年漸く動き來れるなり、而して教育ある男女は一般に結婚期後れざるを得ざるものなり、二は生活の難易なり、關西より四國九州に至れば日常金錢上の缺多く生存競爭激烈なるも、關東々北は生活の程度比較的低くして從て生活し易く、一般に悠長に寧ろ遲鈍の傾あり、彼は個人的にして此は家族的なり、三は氣候の差異にして、冬期永き地方は仕事少なき爲め冬季に入りて風俗亂るゝものなり東北地方は夏季よりも冬に於て好しからざる風習行はるゝを見る、四は習慣の力にして一般に早婚せしむる風あれば、此惰性に支配せらるゝなり、又其出産多く、幼年の死亡多きも之が爲めなり、新潟は女子風儀の特に忌むべき習俗ある所、今一々言ふの要なからん。

		結婚	離婚	結婚百ニ付離婚
本州	中區	一二、〇九八四	二、四八七八	二〇・五六
	北區	五、〇八一三	一、三九六〇	二七・四五
	西區	六、〇六六三	一、三二九九	二一・八六
	計	二三、二四六〇	五、二〇八七	二二・四一
四國區		一、八一八三	四六一七	二五・三九
九州區		四、〇四一四	九〇三八	二二・三六
北海道區		六三一五	八〇三	一二・七二
總計		二九、七三七二	六、六五四五	二二・三八

之によれば北區則ち東北地方の離婚は最も多くして、四國は次位にあり、是等は累年の比較を見ざれば確定し難きも其大略を察し得べし。

勞働嫌ひの日本人

法學博士　添田壽一氏

「成　功」

世間には、或る一事の成功しないのに又他の事に從ひ、其れも成就しないに又外の仕事を初むるものが多いのである、かゝる人は到底其事業をして成熟の域に達せしむる事が出來ない、最も損な仕方である、世界の國民を通觀するに尤も仕事に熱心するは英人である、英人は「唯だ已れの仕事に注意せよ人を見るな」と言ふ風でひたすら勉强をつゞける、乃て大事業が出來る、然るに他人の机の上の林檎は兎角大きに見えるので、已の仕事はそつち退けにして、たゞ他人の爲すことばかり良いと思ひ、それに氣をとられて終うは日本人の常で此樣な事だから吾が國人は發達しないのである。

大凡人間が生活するには、其生活を支へるに必要なだけの費用を辨じればならぬ、而して其費用は自ら働いてこれを得なければならぬのである、これは自己のみでなく家族にも最も必要だ、然るに朝鮮人杯は朝から晩まで働かずにグズ／＼して居るから何時も貧乏である、我國の如きも思ふに又其一例ではあるまいか。然るに此處に大切なのは勞働しやふと思へば何でも身体が强壯でなくてはならぬ事だ、世には、僕は人力車を曳かぬから身體はドウでもよいと言ふ人があるが、これは甚だ間違つた議論だ、全躰東洋人には、身躰の爲を思はぬ風がある、彼等は身躰を虐待せざれば大に怠けるのである、虐待とは試驗前だけセッセと寐る目も寢ずに勉强するなどを言ひ、怠けるとは朝から晩まで下宿屋の二階で寢て居るやうなのを言ふのだ、これ等の惡弊の爲め彼等は如何程身躰を害するか知れぬ、尙ほ遊戲なぞて考へて見るも、日本人は歐米人に比べると遊び方が下手である、即ち遊戲が大躰消極的、受動的のものばかりだ、芝居とか寄席とか其他皆自分がするのでなくて、他人のするのを見たり聞いたりするのである、然るにアングロサクソン人種は自ら働き自ら動く活潑な遊戲をするから、自然身躰も健全である、

實用的人民を作る米國の小學校

「慶應義塾學報」　大原　祥一氏

米國小學校の目的は實用教育を與へるに在り、日本に於ても亦然る可し、左れど其方法にして可ならずんば之が目的を逹すること能はず、米國にては教授の法宜しきが爲め小學校に於ける實用的教育は充分に行はれ居れり、即ち彼國にては小學校卒業者にして普通の商店若しくは事務所に雇使せらるゝ時、或は一個の市民として立つ時決して用に堪えざるが如きことなし其教授の科目は猶ほ日本に於けるが如く地理歴史作文算術等なれども唯だ一つ相違せる點は小學にてシビルガバーメント即ち亞米利加の政治に關して教授することなり、日本にては憲法なるものは極めて難かしき學科の如く思はるれども亞米利加に於ては何人も憲法を知り又知らざるを得ざる平易の學課となり居れり勿論日本の憲法と、米國憲法とは相異あるが故、其間に難易ある可けれども兎に角小學校に於て、憲法の解釋――即ち大統領たるには如何なる資格を要するか又選擧民の資格とは如何なる者なりやと云ふが如きことを教ゆ、是れぞ即ち實用的市民を作る所以なる可し。

次に米國の小學校に特異なるは女教師の多き事なり、而も其女教師は結婚以前なる十七八より二十乃至二十一二位の年配なるが十五六以上十七八位の男生徒は其下にて平氣に教育を受く、是の如きは米國にて婦人を尊敬するの風あるに由るべきも、米國人が自から知らざることは婦人たりとも子供たりとも就て教を受くるを恥とせざる氣風に歸す可し。

次に米國の小學校に就て面白き感を催すは旗日なるものある事これなり、獨立祭或は其他の祭日と異りて此日には學生及び學校の職員其他學生の父兄と云ふ如き學校に關係ある者一同學校の廣間に集合して亞米利加の國歌を唱う、而して校長は此國歌に和して星と赤白の附いたる米國の大國旗を振るなり、男女の生徒も校長と同様なる國旗を各自胸の邊に飾り付け校長が旗を振ると同時に起立して右手を擧げ國旗に對して誓を立つ其意に曰く『汝の爲めに吾等の財産をも捧ぐ可し』『汝の爲めに吾等の命も捨ることをも辭せず』と、以て愛國心と獨立心を養ふ。

▲各國の電話事業

龍動は人口一万人に就き四十七個の電話器有る割合となり、巴里は七十一個、紐育は百五十個となり、世界第一電話事業の發達せるストックホルムは一万人に就き九百八十個、則ち約十人に就て一個の割合となる。



漢詩

柳塘選

春遊二首

頃京都友人見示作忽發技痒乃傚其顰

前田舍潤

珠簾錦幔夕陽斑。春麗牛王祠後山。蹴鞠影高垂柳外。控弦聲透落花間。一年人事多酸鼻。三月東風始破顏。欲控吟囊沽晚醉。水樓去倚鴨西灣。

醍醐人生雪滿頭。良辰須早擲書遊。如年遲日宜行樂。似洒柔風欲蕩愁。花影千層山帶寺。柳陰一曲水廻樓。留連不妨歸城晚。煙月籠春夜色幽。

一年三月、構思措辭、殊見老熟、匪夷所思、似酒柔風欲蕩愁、清新溫雅、置之靈芬館集中、誰復辨識、先生諸作、大概以性情溫藉爲歸、絕無麤獷之弊、余輩書生、氣之粗者、忸怩何堪、

次含潤先生韻

鬼門隱士

萬樹櫻花錦爛斑。春風裙屐簇東山。路從芳草芊綿裡。身在彩雲搖曳間。遮莫顛狂忘白髮。何唯歌舞屬紅顏。歸來鴨水鑑明鏡。尙覺臙脂漲綠灣。

好挂青蚨在杖頭。旗亭到處賦春游。鶯花幾日得無事。脂粉一時憐莫愁。今夜笙歌磨畫燭。明朝風雨鎖紅樓。綺羅狼藉忽然散。回首東山鐘磬幽。

繁華轉瞬、春夢易醒、故曰歡樂極而哀情多、足以警少年、

東都春遊再疊韻

誰家姊妹彩衣斑。步自湖邊去上山。只見樓臺連柳外。不知鐘磬響松間。花雲繚繞英雄像。酒氣薰蒸古佛顏。看到天妃祠畔夕。畫簾銀燭醮清灣。

都鳥名存古渡頭。五陵裘馬恣嬉遊。山來俗士誇豪興。無復王孫惹客愁。十里紅霞花映水。半天翠靄柳遮樓。

金龍山畔夕陽沒。柔艪數聲漁唱幽。

東臺墨陀、春風一至、花氣醮酣、綺羅如海、鬧熱光景、使人眩暈、誰復憶英雄弔王孫者、滿都士女、狂顚一時、其輕薄、可以悟飜雲覆雨之情也、

贈止舟齋主人三疊韻

隻句堪窺豹一班。便知詩卷積成山。凝神淨室青燈下。
騁志寒流白石間。瀚海汪洋欽雅量。春風和煦接溫顏。
與君何日尋幽約。散髮扁舟住碧灣。

無事相逢笑撫頭。百年翰墨約同遊。以文會友最堪喜。
其德有隣何足愁。睍睆流鶯花後寺。簾纖細雨水邊樓。
夙期觴詠卜閑境。那處林泉淸且幽。

主人襟度洒落、溫顏接客、余雖不知其本領所在、自一交膝訂文字之交、常敬慕其爲人、此篇所述、未能盡意也、

花後臥病悵然有作四疊韻

春衫只剩酒痕斑。游子無端憶故山。花落髩絲禪榻畔。
夢孤經卷藥爐間。半生空負崚嶒氣。一病誰憐憔悴顏。
至竟長安居不易。扁舟去臥綠楊灣。

離擬人間易白頭。江湖幾輩得閑遊。心非木石元多恨。
賦到鶯花倘善愁。三寸蘚苔休掃砌。半簾烟雨懶登樓。
殘燈影暗藥烟冷。何處曉鐘聲更幽。

十年書劍、都門爲客、夙志蹉跎、老大自傷、况春晚得病、閉門呻吟乎、落花啼鳥、無一不愁媒者、

五疊止舟齋主人韻

衡門晝鎖砌苔斑。白日沈々靜似山。魚沫皺紋淸沼上。
蝸涎題篆壞墻間。養生休漫談黃老。講學唯當衫孔顏。
課業倦來時試策。東台明月照前灣。

青衫發賦大刀頭。十歲都門奈倦遊。老驥長途消壯志。
啼鵑細雨釀新愁。夢醒空惜生花筆。春盡慵登賣酒樓。
此際思量腸欲斷。笛聲三弄夜窓幽。

長安落魄、桂玉辛酸、况值落花啼鳥之候、何人無此情懷哉、

慶鏡如上人歸朝

藤島膽岳

宗主鏡如上人、以去歲八月、發英都龍動、過獨彼得斯堡、横斷中央亞細亞、今玆三月、經印度而歸、豪擧可欽、恭賦奉呈

豪膽輪囷今古空。雄圖横絕半球東。遺文欲拾龍天撰。
求法何論顯奘功。鐵錫曉揮葱嶺月。衲衣寒襲雪山風。

討探靈蹟豈無感、千載興亡兩眼中。

後聯雄渾可誦、

將赴佛領東京河內臨發有作

萬里天南試壯遊、今朝又上遠征舟。雪泥鴻爪十年跡、
印遍坤球五大州。

意氣已呑坤球、

河內雜感

載筆遊南越。幽探客念憑。林谿逢虎象。冬月苦蚊蠅。
樹菓終年熟。田禾三度登。物々驚奇異。大東行脚僧。

異境紀實。自然奇作、

金烏赫奕四時夏。花樹芬芳終歲春。節到仲冬聞促織。
天涯猶有未歸人。

非讀萬卷書行萬里路者、無此作、

自海南島到香港舟中

海南東去海茫然。山大波濤葉大船。帶醉豪來凭鐵檻。
笑看艫舳躍朝天。

壯快可想

春夜漫興

山本青城

朦朧春月影如烟。此夕迎朋興可憐。只好劈箋吟競捷。
奚須倒盞醉扶顛。柳藏塘塢黃鸝宿。花壓欄干粉蝶眠。
啜茗談詩人未散。三更譙鼓數聲傳。

秉燭夜遊、一刻千金、古人風流、正在此候、詩情
雋永、與景桐副、

次韻

根津藍溪

數株楊柳淡籠烟。夜色沈々更可憐。爛醉何嫌金谷罰。
狂吟欲擬錦城顛。被花搖蕩蝶應駭。與月徘徊人未眠。
清賞阿誰同我輩。江樓隔水笛聲傳。

原唱以茶當酒、此篇爛醉何嫌金谷罰、君亦攢眉淵
明之徒乎、

贈山田湖南師

藍川居士

禪林龍象姓名優。慧業三生少匹儔。向上精神何皓潔。
緒餘文字亦風流。花前駐錫儘吟嘯。月下敲門多唱酬。
聞說襟懷寬似海。定知蓮社許同遊。

蠅

續　石選

蜘蛛の巣は葵の枝や蠅かゝる　烏兵
一群の蠅一皿の團子かな　梧村
蠅多き博勞宿や村外れ　雨人
蠅帳に夜べの肴や風通る　同
御野立の裳の蠅やおほけなき　摩天嶺

寄蠅戀

蠅の身の寄れば追はるゝはかなさよ　同
軒先きを馬の往來や蠅多き　牛歩
臺所に日のさしこんで蠅のとぶ　同
蠅ふえて庵住みうしと旅心　同
蠅うつてきくや隻手の眞の音　魯佛
書きかけし牡丹の花や蠅一つ　同
遠雷や七つ下りの蠅の聲　芒生
すでに新居うれしや住み心　同
散會の座敷に蠅や靑疊　同
蠅打つや蠅次の間へうつりけり　惠子
寄宿舍の蠅をのがれて木陰かな　同
業腹の再たび蠅をたゝきけり　同

蠅むるゝ犬の屍や茨の花　初聲
書に倦みて蠅打つ業の愚なりけり　同
看病の靜かに蠅を拂ひつゝ　同
曲彔に聖蠅追ふ拂子かな　丁堂
山寺の晝寢心や蠅も居ず　同
剃りたての頭に蠅のむづがゆき　同
蠅たかる晝寢の乳子や夢見貌　同
草の家に蠅も出そめて夏に入る　萩生
馬の蠅牛の蠅市の茶見世かな　同
猫の來て猫にむれけり五器の蠅　同
日中や象に蠅とぶ花屋敷　同
濱風や蠅の群がる藻の匂ひ　同

人

絹團扇ちよと逐ふ君が膝の蠅　魯佛

地

水樓や遊の微風に蠅も居ず　萩生

天

蠅多き宿や不肖の子澤山　芒生

選者吟

蠅寄せの西瓜や盆に次の床
ふと明けし障子の闇や蠅の聲

蠅とぶや蓋のしてある何の壺
蠅たゝき蠅叉しても逃れたり
本堂や蠅も居らざる百疊敷

課題

汗　「五月十八日限」
鳩吹　「六月十八日限」

麥笛

○　森爵堂

もえつかぬ木屑いぶせき木ひき小屋今日も日くらし春雨のふる。

長の旅たま〳〵かへるふるさとの軒に迎ふる吾妹子瘦せたり。

あぢきなく君や見給ふ里内裏春なほさむく梅の花ちる。

ゆあがりの色よき頬に笑みを湛へ吾妹子立つよ海紅梅の陰。

樒とりあかの水くみやまでらに寺奉公して五年老いぬ。

なゝとまへつゞく庄屋の新立ちの藏のいらかをかげろふのぼる。

麥ばたけくさぎり飽きて畦にもたれ烟管くはへて遠の花見る。

櫻咲くうしろの園に我が妹子が襷あやどり山羊の乳しぼる。

天地の不平のこゝろか咲きほこる花の梢を風すさまじき。

○　栗山直扶

客去りて火をけむなしき小椽先うめの花ちる毛氈の上に。

氏人の宮木ひき出すこゝろやみて霞すむ外山に春の月いづ。

貴家の札斜なる軒に來てつばめさまよふ雨の夕ぐれ。

新室のあら壁乾くあたゝかき春の前栽しら梅かをる。

畑うちがくはへ煙管にたちのぼる烟の末を春の風ふく。

○　田中花涙

勾欄に燈たゆたふおぼろ月夜院のたかどの花ふゞきする。

鳥かごを西の小窓に移しけり君が假り寢の夢さますべく。

○ 正富汪洋

わかひざにゐくぼいぢりて頰笑みし君も少女とねびましにけり。

藤に近うこゝ彼の君のうつしゑに立ちておはせし所なるらん。

○ 山崎曉竹

山寺の鐘樓ましろに花ちりて嵐も吹かず春くれんとす。

○ 磯野魯佛

心ゆく限りを泣かん此の一日すみれに暫し汝が床かせな。

○ 岡野三四子

朝夕を桃の花さくくるまゐに水汲む少女おもはゆげなり。

○ 北條美尾子

八百萬千萬神の神集ひうたげすらしも星降る夕べ

○ 渡邊光風

若草のあをきを踏んで野に立ちて雲雀きく日よ思ふこともあらず。

THINK TWICE.

BEFORE you push a brother down,
Think twice.
Before at others' sins you frown,
Think twice.
For who are you in judgment hall
Your brother to the bare to call?
To-morrow you may slip and fall—
Think twice.

Beware the stinging gibe and quip—
Think twice.
Lest you yourself should feel the whip,
Think twice.
Withhold the gossip's idle sneer,
The thrust that draws the bitter tear,
For Fortune's favouring gale may veer;
Think twice.

Is charity a quickened art?
Think twice.
And does it thrill both hand and heart?
Think twice.
The mercy you to others show,
That mercy you shall some day know;
With others faults be kind, be slow—
Think twice.

評論

御聖影

米峰

申すも畏こく申さぬも畏こし。近年、大中小の各學校に、御聖影下賜といふ道が開けてからといふものは、田舍の小學校などでは、殆ど競爭的に、これを請願するといふ有樣である、といふのも、臣民忠良の赤誠の發露に外ならないのであるから、至極結構ではあるのだが、何某校へも御下賜になつたから、我校でも御下賜を願はなければならないとか、何校では盛大なる御聖影奉迎式を行つたから、我校でもそれに負けないだけの式を行はなければならないとかいふやうに、根本の赤誠そッちのけにして、たゞ上べのお祭り騒ぎに上せあがるなど、眞以て畏こいことの極みではあるまいか。

旣に御聖影の奉迎が、かやうに競爭的で、お祭的で、外觀的であるものだから、それを講堂に安置するやりかたも、これに對する敬禮の方法も、自然形式的にもなるし、又甚しきは、迷信的にもなるのがあるので、さういふ事實を見聞する每に、我等は、恐懼の念と憤慨の情とを抑へることが出來ないのである。試みに、一ッ二ッ心當りを書きたてゝ、大方の反省を請ふことにしやう。

天子を拜めば眼がつぶれると信じて居た時代ならばいざ知らず、至仁至慈の聖天子上にまし〳〵て、臣民を愛し給ふこと赤子の如き明治の昭代に生れ出でたる我等の幸福は、輦轂の下に住するものにありては、陛下行幸の時、沿道に立ちて親しく龍顏の麗しさを拜し奉ることも出來るし、それも叶はぬ邊土の民にありては、御聖影を拜して、遙に聖壽の万歲を祝し奉ることが出來るのである。已に親しく龍顏の麗しさを拜し奉るのである、無暗に頭を下げるを以て無上の敬禮と誤解し、

多くの得難きの機會を得ながら、しかも龍顏の麗しきを拜することを得ざらしめるが如きは、敬禮が餘りに形式的に過ぎては居ないだらうか既に御聖影を拜して聖壽の万歲を祝するのである、一堂に集まれる人々が、皆な悉く御聖影を拜し得らるゝが如き方法を取らずして、たゞ拜せても拜せないでも「敬禮」とか何とか言ふ一號令の下に一同頭を下げ、暫くして頭を上げる時は、既に御聖影は白布を以て蔽はれて居る時であるなンぞは、敬禮があまりに形式的に過ぎて、殆んど無意味ではあるまいか。若しこンなことをやるだけて、眞に御聖影を拜することが出來ない位なら、最初から御聖影がなくとも、式だけは濟まされるのである。かやうのやりかたは、決して至仁至慈にまします、陛下の大御心に叶ふことてはあるまいと、恐察し奉るのてある。

次に言いたいのは、御聖影の安置の方法についてゝある。必ずしも一般にさうだといふのではないが、我等が見聞の事實の中には、隨分如何はしいのが多いのである。或ものは講堂の眞中の上部に、小なる「祠」を建てゝ、その中に御聖影を安置して居る。又或ものは、御聖影の前に「鳥居」を立てゝ居る、祠を建て鳥居を立てるといふことは、これも亦臣民忠良の赤誠の發露であつて、天子に對する敬意の極致に外ならないと言へば言へないこともなからうが、その實彼等の心中は、確に一種の宗敎的意義を以て充たされて居るのであッて「神道」といふ宗敎（兎も角宗敎として置いて）と、皇室といふものとを混同し、皇室の祖先を神道の開祖と心得、歷代の天子を以て現人神と稱へ「神道」といふ宗敎の活本尊のやうな考を懷いて居るのであるそこで御聖影を安置するは、これを祠の内に於てせざるべからず、御聖影の前には鳥居を立てざるべからず、隨つてこれを拜するには、一に神道的宗敎儀式を用ゐざるべからず、といふやうなことになるのであッて、奇ッ怪至極の事である、若し陛下の御聖影を拜することが、宗敎的意義の下に行なはれるものであるとすると、信敎の自由を得て居る我等日本の國民は、佛敎を信ずるが故に基督の像を拜せず、基督敎を奉するが故に釋迦牟尼の像に禮しないのと同じやうに、神道以外の宗敎を信奉する日本の國民は、遂に御聖影を拜するに及ばないといふやうな結論に到達するのではなからうか、それこそ實に由々しき大事件である。

要するに、我等は、陛下に對し奉り、たゞ常に忠良の

臣民として、一片の赤誠を運ぶべきものであッて、その間些かでも、宗教的意義の存在を許さないのである、その敬禮の如き、素より愼重でなければならない、しかしその愼重といふことも、眞に衷心から湧き出たものであッて、決して形式的抑壓的付燒刄的愼重ではいけないのである。殊に宗教的であるが如きは、斷じてこれを排斥しなければならない。

讀書界の傾向

「女」でなければ夜があけず、「戀」でなければ日が暮れぬと、妙にお白粉臭かッた日本の讀書界。これも健忘性な、七十五日的な、日本人の特性が然らしめた譯だかどうだか知らないが、近頃の有樣を見渡すと、全く傾向が一變して、讀書界一般の需要が、頗る高尚に、且つ頗る精神的になつて來たやうである。

まづ「女」的出版物專賣所とも言ふべき大學館でさへ、「精神修養談」とか、「耶蘇人物養成譚」とか、或は又「海の日本史」とかいふやうなものを、出版するやうになッたといふ一事だけでも、讀書界の機運が、漸次變すべき方向に向ッて展開し來ッたといふことがわかる。又たゞ何となく艶ッぽく、「戀」的成分の多いものを出版する新聲社の出版物が、近來一向もて囃されなくなりもしたし、新版も出ないやうになり、却つて生眞面目なものばかり出版して居たゝめに、中頃頗る振はなくなッた内外出版協會ものが、やゝ歡迎もされ、新版もどし〳〵出すといふやうになッたを見ても、我等の考が、甚だしく誤ッて居ないといふことは疑ひない。識者の間には、兎角の評もあるが、小六ヶしゞくて直段の高い「釋迦牟尼傳」や、「基督傳」が、屢々版を重ね、トルストイ伯の「我宗教」や、清澤氏の「精神講話」といッたやうな種類の書籍が、非常に歡迎せられ、新誌でも「新佛教」とか「新人」とか、「精神界」とか「警世」とかいふものが多く讀まれて、謂はゆる文學雜誌熱といふものが、著しく冷却して來たのは、世人一般漸く自覺の境に入り、俄に心の饑を感ずるに至ッたからであらうし、又「貯金のすゝめ」が五万何千部とか賣れたと言ひ、「勤儉貯蓄論」や「質素儉約の話」などの賣れ行きがよいといふのは、人皆侈奢の風潮に漂されて、財政難を感ずることと極めて痛切となり、これでは遂に身の饑に迫ることもあらうかと、始めてお氣がつかれたからではあるまいか。

勤儉貯蓄の風を養ふと言ひ、心靈の滿足を求むると言

ふ、たゞ聞いた丈でも愉快である況や、事實一般世人にかういふ傾向が見えるとあつては、喜ばずには居られない。

文部省の變行

過を改むるに、遠慮は無用である。人は人であつて神でもなければ佛でもない、いつなンどき、どンなやりそこなひをやらないとも限らない。たゞそのやりそこなッたといふことに氣のついた時に。これを改めると改めないとによつて、君子と小人とが別れるのである然るに、世の中には妙にひねくれたわからずやがあッて、自分が一旦言ひ出したことは、縱令その事が不合理であッても、無理無躰にこれを推し通さなければ承知しないばかりでなく、輿論の反對に逢ッて、自己の所業の頗る不都合であッたといふことに氣がついても、決してこれを改めない。そして若しこれを改めれば、輿論の反對を恐れて改めたと思はれるのも口惜しいとか、又男が一度決心して行ッたことを、他人の注意を受て改めるなンて、頗る沽劵の下る話であるとか、難とか僻とかこねくり返し、徹題徹尾剛情を張り通さうとするものがある、誠に憎むべき小人ではないか。

今の文部省は、さすがに東洋文明の先進國たる、大日本の文教を司るお役所だけあッて、改過の美風に富ンで居ること、實に驚歎するばかりである。中學校の數學の程度をぐッと引下げて、輿論の反對にその非を悟り、直にこれを復舊したことも、新しい事實であるし、中學校の漢文科を廢することにして、漢學者流の反對に逢ひ、これも國語漢文科といふ曖昧なことにして、兩方の顔を立てたことも、つい近年のことである。文部省が如何に輿論を重ンじ、過を改めるに勇なるかは、推して知るべきである。

文部省對哲學館事件の、曲は何れにあるか、輿論は何れを是とし何れを非としたかは、今更繰り返すまでもないことであッて、文部省自身も、確にその處分の不當苛酷であッたことを自覺し、後悔して居るといふことである。然るに、常に輿論を重じ改過に勇なる文部省が、己に自らその不當を知り苛酷を悔いて居るといふ程の處分に對し、時に半歳に垂んとする程の日月を經過したるの今日尚未だその處分の取消もしなければ、權利の復舊もさせないといふのは實に奇怪千万ではないか。

解するものありて、「なンぼ無定見の文部省でも、さう

急に自分のやッた處分の取消は出來ないサ。第一朝令暮改の譏を招く、第二官省の威信に傷がつく。」と言ッたが、成程一應はもッともなやうである、しかし惡を惡として之れに代ふるに善を以てするといふことになれば、朝令暮改寧ろ結構ではないか。又善を善とし惡を惡とし、改むべきを改め取消すべきを取消して、それで傷つくやうな威信ならば、そりやほンとうの威信ではあるまい、惡たるを知ッてこれを改めず、苛酷なるを知ッてこれを取消さず、不法無道によるにあらずンば保つことの出來ないといふやうな威信は、そりや眞實の威信ではあるまい。菊地大麓氏大臣たり、岡田良平氏長官たり、澤柳政太郎氏局長たる今の文部省、いつまでこンな蠻的行動を持續して居るつもりであらう。實は哲學館のために言ふのでもなければ、文部省のために言ふのでもない、一躰お役所が、お役所自身の過失を改めるといふことを知らないといふことは、國民全躰の頭に被る不利益が、決して少小でないといふことを言ッて、すべてのお役所に注意を促すのである

新聞評壇

每號前一ヶ月間の各新聞に顯はれたる記事に就て記者又は讀者の感じたることを蒐め「新聞評壇」と云ふ、本號は記者の調査せんとする材料未だ整はざるを以て、先づ讀者諸君より得たる左の數文を掲ぐ、讀者諸君の益す奮て所感を投ぜられんことを望む。

▲新聞小言

（其一）

荒尾勇造投

▲酒は飲むべし飲むべからずと云ふ俚諺があるが、我邦今日の新聞紙も、實に讀むべし讀むべからずと許すべきものだ。

▲酒は天の美祿、百藥の長と、上戸連は我田引水の格言を引證して喋々其効能を吹聽すれども、生理學上から論じ詰めれば、どうしても飲まないほうが身躰のためになると同樣、新聞紙も全く害物に違ひないと云ふ評判だ。

▲併し一室に籠居して、海外萬里の事情まで知るのは、新聞紙のお蔭で、文明世界には無かるべからざるものであるが、どうも現今の新聞紙には感服出來ない、

▲新聞紙が新聞紙としての本領は何であると云へば、社會の出來事を其日々々に報道するのが第一で、可成的敏速に正直に詳細にすべきものである、處が今の新聞紙は此資格を具へて居ない。

▲先づ報道の敏速と云ふ點に就て調べて見るに、府下十幾つの新聞が、一昨日の出來事を最近の報道として記載して居る、紙上目下と書いてあるから讀者は其氣で探ッて見ると、三日以前の事だ。

▲これは通信社といふものが出來てから、新聞社は探訪員を非常に減じて、通信を唯一の材料として記載するから、何事も手遲れになり勝になる故だ、通信社の無い頃は、苟も新聞社と云へば少くも十人以上の探訪員が無ければ編輯に差支へたのが、今は二三人でも十分澤山といふ有樣、都合によれば一人も探訪を置かないでも、出來ない事は無い。

▲萬朝社などが群に拔んでゝ報道の敏速を誇ッて居るが月に幾回といふ特別種の外は、昨日午後ありし事といふ一項だけで、其他は悉く一昨日新聞だ。

▲通信社では昨日探ッて置いた事を今日報道する、新聞はそれを明日の紙上へ載せるから、どうしたッて敏速には往かない、昨日の事が今日新聞に出るのは實に少部分で、到底おとゝひ新聞の名は免れない。

▲一昨日新聞の名を免れやうとするには、探訪員を二三十名(少く見積ッて)も置いて、十分に活動させなければならぬ、さて目下の新聞社の經濟では費用の出處が無い、是もツマリ貧乏が一番の原因である。

▲そこで第二版といふものが出來たが、是とて金の無い新聞は碌々遣り切れないで、ホンの申譯け的に昨日午後の眞似をして居る。

▲新聞があッても、昨日の事は今日分らないでは、新聞紙の職務は勤まらぬと云ッて可からう、此點から云へば日本にはまだ一ッも新聞がない。

▲新聞紙の第一の本領たる報道の敏速が旣に此の如しで、あるから、少しは遲れても正直にして吳れゝば好いが、記者の愛憎偏頗やら、社中の關係から、甚しきは何黨何派の機關新聞といふので、鹿を馬、鷺を烏と云ひくろめるには閉口だ、一寸とした市井の瑣事でも、無責任極まる通信社の報道を其まゝに記載するから、誤謬の多いには驚く、其欠點を知るの大捷徑は、どの新聞でも一葉手に取ッて、見當り次第に何縣何郡何村又は何省何官といふやうなものを、職員錄などゝ對照して見ると、十中八九までは間違ッて居る、隨つて記載

事項の全然信用出來ない事が分る。

▲岩谷天狗が首都第一の高票で代議士に選出されたのは、實に市民の不面目だと云て、各社の新聞が騷ぎ立てたが、それ程なら何ぜ早く賄賂行使の事實を探ッて記載しない？裁判所の厄介になる前に何とかして天狗の一匹位退治が出來さうなものだが、東京中の新聞が唯惡口雜言する計りで、天狗に目を眩まされて居たではないか、若し裁判所で打棄てゝ置けば、天狗はいよ／＼立派な代議士樣だ、此一事でも新聞屋の活智の無い事は分る、それで社會の耳目などゝは、片腹どころか兩腹が痛い。

▲斯ういふ次第であるから、通信社といふものに依賴するのが、新聞の爲めに最も宜しくない、新聞社自身で直接に探訪して書かなければ駄目だ、我々でも或る出來事を、實地に見聞したのと、人傳てに聞いたのとは大變な相違がある、報道の遲鈍と粗漏は、全く通信社の罪で、之を撲滅した上でなければ、新聞らしい新聞は見られない。

▲だが通信社を無くして、十分新聞なるものゝ職分を全うするだけの報道を爲し得る新聞社が府下に於て幾つあるだらう探訪員を二十人乃至五十人も置ける資本があッて、之を手足の如く使ひこなせる才幹のある人物が主宰しなければならぬから中々今の新聞仲間には無理な注文だ、万朝の主筆氏などが先づ幾分か此點に近い人物で、もう一層奮發したならと思ふが、其外には一人も見當らない。

（以下次號）

▲家庭に目ける予の經驗

白雲子

各新聞の三面記事に就ては世に定評あり、こゝ二三年前に比すれば大に改まれるところあるを覺ゆ、然れども猶云ふべき不平實に多し、特に注意して欲しきは猥褻なる行爲を極て露骨に書し出だすの筆法なりとす、子女を持てる家庭に共に愛讀するの讀物としては實に赤面せざるを得ず、これらの事實は如何樣にても書き樣の有るものなり、同一情死事件、同一不義問題、又は驅落强姦等にても强て肉感の劣情に訴ふる的の文字を弄することをせず是れを簡單にし、或は書き方を改むれは別に顏赤らめて讀む必要もなく濟むと思ふなり、且つ用ゆる熟字にても成るべく汚き熟字を用ひざるこそよけれ、試みに予か愛讀せる數種の新聞中より其一を採て例せん。

四月十一日より十三日まで三日間萬朝報
第三面丈けの記事
家庭にて共讀するに苦みし記事其題目
一、情夫の爲に　二、未練男　三、雇人口入業者の取締　四、妾の親氣質　五、小石川の賣淫　六、姦婦を捕ふ　七、姦夫姦婦を取逃がす

題目のみ見れば左までの事無きが如きものもあり、特に「雇人口入業者の取締」と題せるが如き、題目を見れば別に非難すべきことなく、且つ必要なる報道たり、然れどもこれを搆くに何の必要有てかくまで下品なる文句を弄せざるべからずやと思はしむるものありき。

又熟字として予は力めて姦通とか私通とか同衾とか好色心など云ふ字を多く振り舞はさゞる樣希ひたく思ふなり、右三日間の三面中、賣淫の字は五回、同衾の字好色心の字各一回、私通姦通の字三回、其他種々あり、これらは書き樣にて他に穩かなる熟字の代り用ひ得らるゝもの決してこれ無きに非ず。

近來萬朝報は都下新聞中理想の淸潔なる新聞と稱せらる、而して猶此の如し、二六、中央、都、日出國、東朝、國益などに至ては更に甚し。

情事に關する記事の書き方を改むること、熟字の汚きものを用ひざることゝは予が各新聞社に就て特に注意を乞はんと欲するところなり。

▲都下の三新聞に就て

磯野晉佛

まづ手近なる新聞三種に就きて言はん

●二六新報　は人道とか正義とか義侠とかいふ事に力瘤を入れられるやうだが、其紙面は何時も秩序もなく統一もなく餘りに散漫に過ぐるのと、其三面の記事に插畫に醜猥淫靡のもの多く熊公八公の御氣には召さうが良家の子女にはチト否大に見させたくなきの新聞なり、民友社じこみの福田君今一段の注意を望む。

●萬朝報　は多士濟々を以て鳴るだけ紙面の經濟中々に感心する點が多い、併し僕をして遠慮なく不足を云はしむれば二面の記事の政府や政黨の抽象的報道（事實報道は勿論入用）は可成少くして今一層社會風敎上に關する分子を多からしめ、自轉車などの道樂種は必ず半欄位の上に出づるとなからしめ、理想團晩餐會の講演とか朝報社演說會の講演筆記の大要を掲げるやうにして、それから和歌の選者を海上小出の中一人を廢して新派の先生に代ゆる事の三點である

●毎日新聞　は將に一萬號に達せんとするの元老株てはあるが島田沼南氏や木下尙江氏の正々堂々たる言論の爲め中々精新の趣味に滿ちて居る之を彼の官友社の國家新聞なぞの年こそ若かけれ自家の利益の爲めには年來の政友をも骨肉の兄弟をも棄てゝ顧みない耄碌新聞に比べる時は鶴とあはう鳥位の相違はある、併しながら紙面の調子が少々單調(丹頂に非ず)かと思はれるは毎日二種つゝの講談と日曜附錄にも講談を掲げるのは餘り古色蒼然の感が過ぎるてはあるまいか、せめて本紙第一面丈でも奮發して社會的なり文學的なり少し見ごたへのある新作小說をのせてほしい、これは僕一人の希望てはない恐らく世間幾多の同新聞愛讀者の希望てあらう、附錄の日清韓三國地圖僕は大に氣に入らない、それから其廣告の同文云々尙更氣に入らない、沼南氏日頃の主張にも似合ぬ、コントラストの大なるのが英雄の資格ならば沼南氏も確に英雄であらう、言論家としての沼南氏と新聞屋としての沼南氏は大にこのコントラストを實現するものである。

▲四月余の見たる東京

新聞所感一二

主峰

(一)新聞の挿畫に就きて、最も如何はしき繪の多きは國益新聞、都新聞三面記事の挿畫は、記事が記事だけにいづれも皆宜しからず、就中時事新報(二日)の兄弟父の生命を狙ふ圖、兇器は燒火箸、今にも親の頭額へ石もて打ち込まんとする所、其不倫なる事言語道斷、見るもの眉をひそめざるはなからん。時事新報なる面目に對して注意するところ無くして可ならんや、獨りその時事漫畫は他に比類なくして最も面白し。

(二)博覽會の記事、最も勤勉にして精密に傳ふるものは流石に時事新報なり。讀賣新聞の如きは今月に入りて僅かに一回美術館の記事ありしのみ、要するに都下の新聞が比較的冷淡なるは何故ぞや、さりとては大坂の新聞の如く他の事件を措きて博覽會の事のみ記せるは不當なれども。

(三)教科書事件の公判に就きて法庭の辯論を一々漏らさず記載するものは時事新報、最も謹淑の態度を取れるは報知新聞なりき。

(四)花井お梅を最も珍重するものは二六新報なり。天道を欺き人間を度すこれ二六新報の本領とあるからにはお梅の一言一行も漏らすべからずと見えたり。されど帝都の新聞彼れを重んぜざるものなく、都新聞の如きはお梅の出獄時間を秘密に知つて、彼を門前に一番したる事を自慢せり、ナサケ無き傾向ならずや。

▲新聞の新聞

牛門の一生

●「時事」の冗長記事に富める「報知」の振假名に間違多きこと「日本」の相變はらず報道遲き「日々」の變化少き等著しく近來惑じたることてある。

●「國民」は近來益善くなつた、報道の偏頗無く外交記事の間違ひ無き。

僅に大新聞の面目がある。

●「時事」のポンチと論說「朝日」の電報「國民」の日曜講談、「日々」の片々「萬朝」の涙香「報知」の弦齋此の二小說、これ丈けを合して一新聞としたいのが僕の理想新聞紙である。

●報道の迅速と正確は萬朝時事東朝の三新聞に限る。

●「讀賣」所載の小說天外作魔風戀風は實に其名の如く魔風である、戀風である。情熱燃ゆる盛春の子女を煽ぎ立てゝ魔道に行かしめ、戀路に赴かしむる腥風である。

●都下の新聞を今樣風俗に見立てると先づ「日本」は政客風「國民」は紳士風、「時事」の番頭風、「毎日」の先生風、「東京日々」の官吏風、「讀賣」の女學生風、「萬朝」の亭主振、「二六」のべランメ流。「東朝」の奧樣風、「報知」の女房振、「日出國」の隱居振、といふ樣なものだらうか。

文藝時觀

原抱一菴に與へて反省を促す

動物虐待防止會員某

原抱一菴足下、

足下は屢々其の不遇を嘆ずと聞く、是れ誠に嘆ずべからざるを嘆するの甚しきものなり、全躰不遇といふは才子にして佳人に會せぬとか、聖賢にして世に容れられぬとかいふ場合に用ふべき言葉のみ、足下の手に成れるが如き愚劣拙惡なる飜譯が世の顧みる所とならざるは誠に遇の遇なるものにして、其の間更に嘆すべきいはれあることなし。

足下よ、足下はマークトエーンの人物を許し、三十名家の序文を乞ふが如き暇を割いて請ふ先づ自己が飜譯家としての能力ありや否やを省みよ、足下がトエーンの小品を譯して之を公にするだに猶且耻を知らざるの甚しきものと思へるに、其の譯文に對して諸家の批評を強請せるに至つては何等の鐵面厚顏ぞや、試に僕をして足下が自ら「語句措辭結構すべて原文に據り」といひ「殆と逐字譯に有之候」とほざき「六回まで稿を更めたる」と誇りて、得々として擧げたるトエーンの文の一片を此に抄出せしめよ。

THE KILLING OF JULIUS CÆSAR

NOTHING in the world affords a newspaper reporter so much satisfaction as gathering up the details of a bloody and mysterious murder, and writing them up with aggravating circumstantiality especially if he knows that all the other papers have gone to press and his will be the only one that will contain the dreadful intelligence. A feeling of regret has often come over me that I was not reporting in Rome when Cæsar was killed—reporting on an evening paper, and the only one in the city, and getting at least twelve hours ahead of the morning paper boys with this most magnificent "item" that ever fell to the lot of the craft. Other

events have happened as startling as this, but none that possessed so peculiarly all the characteristics of the favourite "item" of the present day, magnified into grandeur and sublimity by the high Rank, fame, and social and political standing of the actors in it.

新聞通信員が身に取りて祕密を雜へたる血腥さき事件を、筆に鬼氣を含ませて、書立つるほど愉しきことあるなし、殊に其事件他紙與らず、吾紙唯り報道の俊と敏とを誇り得る場合に於ては、快殆ど云ふべからざるものあり余は屢悲しめり、如何なれば今を遡ぼる、紀元前後併せて一千九百四十九年の昔、身古の羅馬に生れ、該撒慘殺の日、尠くも他新聞に先だつこと三時間、最絕慘絕の彼の出來事をば、凄絕奇絕の筆に上せて全羅馬、全埃及の讀者に告知報道するの快務に服するを得ざりしかと、驚異彼に似たる事件の生起は世に尠からず、然しながら謂ふ所の上種子を組織する分子を具備すること彼の如きは稀なり、登場の役者等の高き階級、貴き名譽、社會上、政治上、の立場孰れか彼の悲劇に壯嚴と魁麗とを添へ來るものにあらざりける

嗚呼是れ何等の絕妙なる譯文ぞや、足下は之を「逐字譯」といひ「すべて原文に據れり」といふ、試に問はん、原文のGathering upは如何に譯せられたるかhave gone to pressは如何the only one in the cityは如何、fell to the lot of the craft.は如何、此等少し飜譯に手數のかゝるものは盡く省略し去りたるに非ずや、譯文の「快殆と云ふべからざるものあり」とは原文のいづれに在る語句なるか「凄絕奇絕の筆に上せて」は如何「快務に服するを得ざりしか」との疑問は原文のいづれに在るか、此等は盡く筆に任せて書き流したる杜撰千萬なる譯語に非ずや、足下の所謂「逐字譯」とは斯の如きものをいふか、「六回稿を更めて」だに斯の如くんば其の初回の稿本は果して如何のものなりけんと見まほし。省略姑く恕すべし、附加必ずしも問はずもあれ、誤譯に至つては斷して許すべからず、足下は with aggravating circumstantiality を「筆に鬼氣を含ませて」と譯せり、是れ誤也、足下は the only one that will contain the dreadful intelligence を「吾紙獨り報道の俊と敏とを誇り得る」と譯せり、是れ誤也、足下は none that 云々を「稀なり」と譯せり、是れ亦誤也、見來れば僕は足下が飜譯家としての伎倆を評價せん前に先づ眞個に英文を解し得る人なりや否やを試驗せんと欲せずんばあらず。Jwain の語 item の語の認をさへ正しくは發音し得ざる足下が飜譯を試みんなどゝは烏滸がまし、足下が飜譯家として立ち得たる舞臺は遠く十年二十年の昔に在り、今日森鷗外君の如き坪内逍遙君の如き上田敏君の如き淺野和一郎君の如き山縣五十雄君の如き增田藤之助君の如き、忠實なる飜譯家の續出せる時に當りては最早足下の飜譯の如きを「逐字譯」として通過せしめ得ざるなり、足下若し此等の言に對して言ひ得る所の

ものあらば、請ふ言へ、僕は幾回にても足下に敎ふるに遲疑せざるなり、僕等「恩禽獸にだに及ぶべき動物虐待防止會」の一人として「東京朝日」十萬の讀者たる人類が足下の惡譯に「虐待」せられつゝあるを見るに忍びず、此に筆を呵して此文を作る、再拜

難宙外氏が田園生活說

虎溪

嘗て文士の田園生活を推奨し、瑰より始めて山村水郭の間に隱棲し、玆に三星霜を閲して悟道する所ありと稱する後藤宙外氏は、更に其の範圍を推擴して、今や滿都の士人に檄して事情の許す限りは速に黃塵黑埃の都門を去るべき由を以てす。氏が都門生活を有害とし田園生活を有益なりとするや、衞生、經濟、精神休養、及び德性涵養の四項に分說せり。げに經驗着實の論、さすがに首肯すべき節の尠なからねど、余の立場より見れば、難點も亦決して鮮少ならず、敢て愚見を披瀝して高諭を乞はんかな。

宙外氏は衞生上都門を去らんといふ理由如何に曰く都門は『肺病脚氣諸傳染病の猛威を逞しうする』を知ればなり。『恐るべき空氣の腐敗厭ふべき馬糞の惡臭諸黴菌の頻襲』を恐るればなり。而して有爲の士が續々として、或は癈疾、或は夭折、都門の殘虐なる魔力の恐るべきや一刻も早くこの牢獄を脫し、地獄を拔け出で、毒手を免れんといふに在り。若し夫れ吾人が花の都と夢想したる都門がかばかり恐ろしき、厭ふべき、忌むべき處なるか、苟も生を愛するを知る人類の住み得べき處にあらず、又我が同胞をしてかゝる地獄谷に住ましめて死に抵るを待たんこと苟も心あるものゝ忍ぶべき所にあらざらん。然るに氏は曰く、事情の許す限りは去れと、さらば事情の許さゞるものは、この恐るべき都門に殘りて其の運命に服從すべしといふか。抑事情の許すものとは誰ぞ、蓋し紳士紳商ならずば、公等文士の一輩ならんのみ、農工商は與らざるなり、貧民は與らざるなり、兵士や巡査は與らざるなり、腰辨連は與らざるなり。公等は自家の便宜の爲、自己の保存の爲、一言すれば自家衞生の急なるが爲に公衆の危害を顧るに暇あらずといふか、若しくは彼の時潮を暗指する童謠の『我れさへ善ければ人はどうでもかあまあない』てふ極端なるイゴイズムをさながらに實現せんとするか。

夫れ繁劇なる業務に服して、活潑なる動作を爲さんも

のは、先づ其の地利上の便宜を得るを要す、足都門に在るも足らず、故に紹ぐに車馬の便あり、電信電話の設けあり、これ文明の事業は總じて敏捷輕快を尊ぶを以てなり。故に若し都門を去るべき事情の下に在るものを擧げは、不生産的の人間、即ち古への所謂遊民のみにして、所謂文士と稱さるべきものは、恐らく第一指を屈すべきものならんか。唯其れ文明的活動に我れは與らずと稱するものは、其他何人と雖山又山谷又谷を越えて、山水明媚の地を占め、殘年を送るを得べけんも、これを豈有爲有要の人物に望むべけんや。されば宙外氏が有爲の人物の癈疾と夭折とを憂へて、彼等に田園生活を慫慂せんとするは走るもの〻足を斷ち、飛ぶもの〻翅をがんとする愚を爲すものにあらずや。而して氏は精神の休養といひ、德性の涵養といふ、到底都門に於いては不可能の事と見做すが如し、即ち人都門に在りては普通の品性をすら養ふこと能はざれば、速かに去りて波光林影菜圃麥浪の間に心の塵を拂へよやといふ。夫れ氏が德性の涵養といふ、恐らく半面の眞理を認めて未だ全豹を窺ふ能はざるものならん。氏は自然の感化力を認めながら、人物の更に有力なる感化力あることを忘れたるもの〻如し、余は未だ肥稲村のヘコ作と、尻切村のトンボさんが都人士に優りて高き人格を有すといふ理由を知らざるなり。田舍漢はいふ、都人士は輕薄なりと、奚くんぞ知らん田舍漢のズウ〱敷ナマズルク、且淫猥多情なること決して都人士に見る能はざる所なるを。余は思ふ人馬の雜沓喧躁に心耳を暗ましたる都人士が、汽笛一聲山紫水明の間に一日の遨遊を試みてこそ田園の風光は羨望すべけれ、其處にト居せんことは自家の品性のみならず、子女の教養の上にも四圍の惡感化に堪ふること能はざらんと。

斯くの如く宙外氏の田園生活説の根本思想は利己的なり、我利々々主義なり、人はどうでも善い主義なることは上に説きつ。更に語を續かば氏の説は隱遯的なり消極的なり、獨善主義なり、一言を以て、すれは支那的なり。何すれば聰明なること氏が如くにして、利己主義の規範を脱すること能はず、自家の利己主義を以て他の利己心を鼓吹せんとはするぞ、都門の空氣のキタナキこと氏の説の如く、恐るべき黴菌の浮遊すること氏の説の如くば、何故に公衆衞生を督勵誘發して都下二百萬の生靈の安眠を希圖せざるぞ。又都人士の道德が氏の説の如く腐敗したりとせば、何故にこれが刷

新洗滌を試みざるか、氏は口を極めて不祥の語を以て都門を掩はんとせるも、これ不足ながらも四千萬の同胞の築ける長城にあらずや、一國の首都にあらずや。若し夫れ公等の如き有爲にして識見あり、手腕あり、遠慮ある人々が、止まるべき處にあらずとして袂を列ねて去り、即ち傳染病の猛威を逞しうするをも知らず「國を亡ぼすものは外冠にあらずして都門の生活なる」ことを知らざる蠢々たる愚民の留守する所とならば、咸陽城都は秦の一炬を竢たずして鶉鳴く野と化すべきにあらずや。而も公等は都人の地獄の底に陷いるを見つゝも椽先きに日向ボッコをしながら小說を讀まんとするか。

尚文士が時代精神に接觸せん爲に、寧ろ都門の生活を推奬すべきこと、消極的衞生の姑息にして、到底事に耐へ病魔を退くる勇を養ひ難ければ、寧ろ積極的に強健堅剛なる躰力を練磨すべきこと等は、架說を要せずして明白なるべし。

▲六號文壇　　六合子

ヤレ青森、ヤレ九十九里、ヤレ富山、頻粉として人間の干乾が出來るちう今日この頃。文士の懐中いよ〳〵[illegible]、都人士の[illegible]の如きに引きかへ、其のかんばせ栄の葉の其れより青い今日この頃。子規は亡せ樗牛は死に、紅葉は胃癌、竹風はヘコタレ、抱月は留守、桂月は愚、文壇の寂寥お話にならぬ今日この頃。教育家は縛られ、官吏は引き立てられ、月蝕もあれば日蝕もある、内村君に言はせたら世の終極が近づいた今日この頃、夫子先生獨傲然泰然チビ筆をシヤに構へて例の怪氣焔を吐く、聊か彼等人類の手前氣の毒なやうでもある、其處で今度はズット愼重の態度を取つて、六號文壇と小さく出かけた、(眼のわるい人は眼鏡をようして下さい)。しかし今後乃公の筆鋒がなまるかにぶるが、其處んとこは讀まぬ人には解らないが、讀んだ人には解ること受合なりと申す。

◎田中智學　居士とも言はれた程の男も、年齢は爭はれぬもの、この頃は餘ッ程老いこんで來たやうだ、桂月のやうな無茶な男を相手にして騷くのが抑間違ひの始だ。宗教も哲學も無用だ、科學があれば澤山だ、いや科學で解らない事は宗教だって哲學だって解るものぢゃないなぞと、酒も呑まないで生眞面目に饒舌る男をつかまへて議論をしやうちうおせっかいものは、恐らく智學老一人だらう。

◎あの男　なんぞは、食うて飲んて、寐て囈語をいふのが人間の一生と心得て居るのだ、あんな男に生死とか、運命とか、靈魂とかいふやうな事が解ってたまるものぢゃない、哲學や宗教をアップリーシエートするのはあんな豆腐からを詰めこんだアタマには到底イムポッシブルなは赤ん坊にても解るのに、ドシドコドンの大先達様に解らぬとはても、

一天四海歸妙不可思議ぢやわい

◎あの男　は高山君の追悼會に、智學が說教したちうて大變おこって居る、あの男は高山の後釜を引きうけてメンにありついたちうて、感謝してるなら恕すべしたが、彼れは智學居士を指して言たやうに、御同様高山君をダシにつかって居るのぢや。彼の男は、樗牛の知己はおれ一

人ぢやと威張つてるが、其れも手前勘の自分免許ぢや。

◎まあ知巳　でも未知巳でもどうでもよいが高山君が美的生活をすて本能滿足をすて物質界の要求を離れて靈界に安穩豐樂を求めやうとした或は求めつゝあつた彼れの動機が桂月氏づらにわかる筈がない、色盲者が給畫陳列塲へ這入つたつて見えるのはタカが代價附ばかりぢや。ビールや女で安心を得やうちう男が日蓮宗がどうだの高山か墓地を遺言したのがどうだのちうのは沙汰の限りぢや。

◎『新聲』の仙巖　と云ふ人が桂月君の『宗教無用論』を回護してるのはどんな動機でするのだらう桂月君が宗教無用ちうのは、現今の宗教が無用ぢやといふのだらうと見て來たやうなことを言つて居るが、宗教の意味が解らない愚物に、今の宗教も昔の宗教もあつたものぢやない。文壇革新を任とすべき公等があんなつまらぬ男の提燈持ちはよしたがよからう、あんな男を文壇而も帝都の文壇に立たして置くのは公等青年の耻辱ぢやないか。

◎若し氣の長い人　あつて『文士と病氣』ちう問題を研究して見たら餘ッ程面白い蟠りのあることが發見されるだらう。兎も角も生理的病氣から見ても文士程色男お誂向といふ風に出來てゐるものはなかんべい。梁川代水不孤等が肺病も久しいものぢや紅葉が胃癌に鏡花は氣違ひ宙外は多分田園病で露伴は老病ぢやらう。鷗外は軍醫病て美妙抱一等は不遇天才病といふのぢやらう。およそ數へて見たら病的でない文士ちうものはないから、此處だてさすがは寅外だと賞むべき處は彼れが田園生活の利益の第一番に衞生とあつて其の次に經濟と來てゐるから文士の紳に銘すべき文字と言ば先づおれぢやらう。

◎天外の寬風戀風　アルコールに水をさしたのではなく水にアルコールをさしたといふ風にあの調子でいつたら定めて彪然たる明治の大作が出來るぢやらう。あれが呼物になつて讀賣の賣高が增したとさと聞いて見りやジキに愛讀者の御面相があり〳〵と見えるやうぢや。



雜評

大愚漫録

三遊

△半仙たる我

われ別號を半仙といふ、但し世間に有觸れたる半佛半仙などゝいふ結搆なる意味にはあらず、仙は錢なり、半仙は半錢なり、五厘銅の意味なり、乃ち我に在りては世俗の八厘にだも及ばざるを意味す、知る可し我が言ふ所の衆賢人の意に逆ふと多きを。

△動物性食物の影響

肉食すれば惡瘡を病むとて獸肉を斥けし時代は已に遠く過去りたり、而して今や衆賢人最良の滋養は皆之を

動物特に獸畜より採る、想ふに今の如く動物性食物の需用盛んなるは我國に於て前古其比を看ざる所なるべし、窃かに思ふに是れ或ひは人心の上に至大の影響(至大の二字恐らくはオマケ也)を及ぼすなきか、わが半仙子聊か疑ひなき能はず。

△人間の動物的所作

元來人間は半ば動物的所作に由りて活けるなり、特に今人に於て然り、稱して獸慾といふもの及他のすべての人間的所作として觀るべからざる者は動物性食物より來れる影響にあらざるなきか、盖し其反證らしきもの別に之あり。

△反證らしきもの

かの仙人的人物、さては善智識といはるゝ人の、平生食する所は何物ぞ、概ね植物性食物なり、殆んど一も動物性食物を用ゐず、隨つて肉慾熾んならずして世上の衆賢人の如く漁色的エネルギーに富むともなく孳尾期の犬の醜態を學ぶともなければ其生活は恬淡平靜、絕て動物的所作あるなし、是れ豈に其反證にあらずや。

△動物的所作と動物性食物

所謂猪突的猛進、狠慾的貪婪、さては虎視眈々たる貎等、いづれか動物的所作にあらざらん、猫撫聲の佞人、尾を掉る犬の如き卑劣漢、亦是れ動物的所作を善くする者、其他鼠鳴といひ、狸寢入といふも、劣情に伴ふ動物的所作といふべし、是等の動物的所作と動物性食物とは全く相關する所なしと謂ふべからず、是れ、我が半仙子が「一は他の影響にあらざるなきか」と疑ふ所以なり、想ひ來れば亦奇ならずや。

△人間の動物的命名

更に又、人間の命名に見るに、何ぞ其動物に藉れるものの多きや、もと是れ十二宮三十六禽等の名稱より來れるものなるべしと雖も、當代の動物的なる人間には如何にも適當したる命名法なり、若し夫れ寅公の咬み熊公の掻き猪三公の氣負かゝる等の話を聞けば、其所作や全然動物的にして、只二手二足なると四足なるとの相違あるのみ。

△人間の顏と動物の顏

更に又、人間の顏と動物の顏とを比べ看よ、何ぞ其れ酷肖せるものゝ多きや、鷹嘴の如き鼻、獅子の如き鼻、みゝづくの如き耳、猩々の如き耳、鰐の如き口、甘口鼠の如き口、馬に似たる長面、猿に似たる赤面等、數へ來ればいろ〳〵さま〳〵なり、神若し人をつくれり

せば抑もいづれを原型として造りしか、いづれにしても双方親類の緣は免かれず、素性は爭はれぬものかな。

△物動にあやかれるか

さればにや、近時人の著しく動物化して、倫常斁れ道義廢るゝを日に甚だしきを見る、これも動物にあやかれる故なるべし。

△寧ろ多く動物的性狀を具有す

思うて此に到れば、人間は尙動物進化の道程にありて眞個の人間的性狀よりは寧ろ多く動物的性狀を其身に具有せるが如し、最近に於て斯類のデモ人間特に多きを見る。

△今の聖人には七竅あらん

昔者殷紂、聖人の心に七竅ありと聞くとて、剖いて之を觀たりとかや、我が半仙子謳うて曰く、

今こそは七竅あらめ聖人も

と、剖いて之を觀るに由なきも、今日の聖人トント當にならず、即ち其聖人と自稱する者と雖も、少くとも心の竅(即ち精神的欠陷)の、七つ位は有するならん、教育界の自稱聖人諸君が、賄賂を受けられしも亦斯種の竅を埋めん爲なりしか非耶。

△人間の改良

人間のすべてを改良せんとは、絕對的に不可能事なり而して之を改良せんには、其生殖方法より改良せらにざるべからず、若し夫れ眞正(又は神聖)なる愛情の交換のみが、直ちに兩性精氣の媒合となり、以て能く人を生產するに到るの期あらば、古今を通じて人間を誤まれる「不潔なる聯想」も、隨つて除去せられん、こゝに到つて全人間の改良、はじめて期待すべきに似たり。

書し來りて自から其途方途轍もなきに驚く、われをして思うて此に到らしめたるも亦時代の罪、社會の罪なり噫々

敗皷の皮

冷觀子

○李鴻章死し劉坤一死し、今又榮祿の死を傳ふ、人は皆支那人物の凋落を悲しむ、吾人は是の如き老物の死は支那の爲め寧ろ賀すべきことなりと想ふ、その人物と不人物とはトニカク老人どもの跋扈する社會は到底祿な社會に非ず、況んや今日の支那の如き一大革命を

要する社會に於てをや、須らく先づ毫碌輩を一掃して始めて支那開發を論ずべきなり。

○伊藤死し、山縣死し、大隈死し、吾國の政界は始めて革新の曙光を認むるを得むなり、元老などゝ云へるものを本尊とする今日の各政黨が腐敗墮落せざらんとするは抑も無理なる注文なり。

○近頃政友會内に一部の革新論者を生ず、クダラヌ騷動を爲さんよりは、短刀直入先づ總裁放逐を策すべし、老物伊藤に未練を有する間は革新は無意味にして畢らんかな。

○昨冬議會の解散せらるゝや、民黨合同して大に政府に當らんとするの意氣を示し、伊翁近來の大奮發なりと噴稱せらる、而して今や妥協を云々す伊翁は到底伊翁なりけり。

○現内閣は稱して賄賂内閣と云ふべし、文部省を始めとし内務、司法、大藏、農商務等の各省に關係あるものゝ頻々として收賄罪に問はるゝ現内閣の如きは蓋し空前なるべし、而して是等各省の大臣輩にして未だ一人の責を引て職を去りたるものあらず又稱して無責任内閣と云ふべし。

○收賄事件の潰裂するを見るや人皆云ふ官吏にして尚是の如しと、吾人は曰ふ官吏なるが故に賄賂などを取るなり地位ある常人は決して是の如き卑劣を敢てせずと。

○收賄罪を以て捕れたるもの往々にして免訴さる而も多くは法の解釋により僥倖にして罪とならざるものにして吾人より見れば同じく是れ不潔の徒なり。

○他を拜金の徒などゝ罵りながら身は銅臭紛々として金錢の徒隷となり、金錢の爲には名譽も節操も犧牲にして了して尚顧みるを知らざるものは今日の官學者及び其徒類なり。

○哲人曰く貧乏を苦にするは畢竟意氣地なき奴輩の事なりと、僅かの月給に生活しながら分外の門戸を張り滔々として奢侈贅澤の時風に壓せらる、收賄や乃ち起らざる可らず。

○社會を擧げて悉く腐敗し墮落し、飄々として吹けば飛ばんとするものゝみなり、而も之を救濟すべき一の機關もなく又人物もなし、唯主義ある學校などが大にその學風を表彰し挺然として中流の支柱を以て任ずるに待つべきのみ。

○今日の如く宗教の力微々として振はず、社會的制裁の未だ大に勢を得ざるの時に於ては學校は單に學生を

教育するに止らず發して大に社會を敎化風勵せざる可らずとは吾人の宿論なり。

○前月の「獨立評論」に臆病なる文部省と題して文部當局の吹毛求疵を嘲けりたり、文部省のみならず日本政府を擧げて悉く臆病小膽なり、彼内務省が社會主義を取締るとか云へる處置の如き如何にも拙劣を極むるを見る。

○又同誌に如何なる人が議員となり若しくはならんとするかと云へる一表あり、吾國の代議士たるものが是の如き理想信仰を有して國政を左右するかと想へば如何なる樂天家も必ずや長息を發すべし。

○哲學館事件はその後如何になりゆきしか是の如き大問題はトニカク一層八ヶ間敷ならんことを希はざる可らず、けれども哲學館其物に於ては吾人は必ずしも特典に戀々せざるを望む。

○官立學校ならば知らず、私立學校たるものが一二の資格特典などの爲に頑冥固陋なる吏人の束縛を受く主義精神あるものゝ堪ゆ能はざる所にして井上博士が平素の獨立主義を揮發して崇官的國民を警醒するは蓋しこゝらに在るべし。

○社會主義は稍々社會の一勢力たらんとす、之を皷吹するに片山潜氏の「社會主義」あり、大井憲太郎氏の「平民の友」あり萬朝報の如きも社員の多數は此主義の主張者なり、矢野龍溪氏の新社會の十七板を重ねて尙賣口よきを見るも決して輕視すべからざるを想ふ、政府及び國民が單に恐怖し蛇蝎視すべきに非ず尤も沈重の態度を以て研究すべき一大問題なりと云ふべし。



讀者之文壇

隨時錄　下

本所　杏村生

◎力士は體格肥滿に過ぎ、力量あまりに強きに失するを以て、却つて日常の用を辦ずるに苦しみ、俳優は外見甚だ柔弱なるが如くなれども、日々舞臺に登りて、

或は躍り、或は飛び、適度の運動をなすを以て、長く重量ある物を持つに堪へ、また遠路を行くに、勞るゝもの少なきか如し。

◎現時の小說家中、第一に位するは柳浪子なるべし。其文巧なるにあらず、其想高きにあらざれども、間斷なく作を出すの精勵は、決して之を他に素むべからず。然も一日三四種の新聞に續物を草し、其餘暇を以て、雜誌或は單行本の起稿に從事するが如きに至ては、到底、尋常作家の企て及ぶべきところにあらず、彼の濫作家を以て目するが如きは、未だ其一を知つて其二を知らざるものゝ言なり。

◎小說界に於ける柳浪子と、殆ど好一對なるもの、梨園に市村家橘あり、其枝未だ圓熟の境に達せず、其藝未だ神に入るの妙なしと雖、立役、女形より所作事に至るまで、器用にして演ぜずと云ふことなく、根氣よくして倦むことなき、豈尋常人の比にあらんや。然も爭ふて招くものゝ多きは、柳浪子が小說の、世に愛讀さるゝが如く、此優が演伎の、觀客に歡ばるゝこと大なるによつてなり。

◎紅葉子に對すべきを、故菊五郎なりとす。共に一方の重鎭として、紅葉子が小說の、江戶子を寫して勝れたるが如く、菊五郎が特色も、江戶兒たるの役に於て、能く發揮されたるが如し、而して如才なき點に於て、能く談ずる點に於て、贅澤なる點に於て、癎癖強き點に於て、凝り性なる點に於て、洒落に巧なる點に於て、其嗜好と氣風とを同一にし、作を出すに手間取ると、幕間の長きとに至りては、また酷だ相似たるものなり。

◎女優市川九女八、今春梅を探りて偶ま向島百花園に遊ぶ。園主その九女八なるを知るや、墨跡をのこされんことを請ふて止まず。彼れ其言の切にして否むべからざるにより、直に筆を染めて曰く、華に月やどる我名の耻かしさと。敢て佳句にあらずとするも、當意卽妙の才は多とすべし。殊に彼が又の名を月華と呼ぶも、花月の眺に富む園に對しては、耻かしきものありと謙遜せしが如きは、是れ取も直さず彼が一箇の肖像なり。

◎故菊五郎が葬儀の當日、其樣を見んとて、茲に集まるもの幾萬人。或は盛粧し、或は美服し、或は前に出んと焦ち、或は後にならざらんと喚き、恰も寶の山に先を爭ふが如く、六道辻に地藏尊を待つに似たり。然れども、是れを以て、直に追悼の意を表するものと誤まるなかれ。其大多數は、慰み半分なるなり、樂みの見物なるなり、色氣の爲めなるなり、慾のためなるな

り。換言すれば、棺側に立てる俳優を拜するにあり、俳優が贈れる造花の類を數ふるにあり、あばよくば一枝なりとも其造花を得て、末代までの寶としたきにあり、乃至、配り殘りの饅頭一折を得て、隨喜の涙を注がんとするにあり。然れば巡査が警戒も、遂に其雜踏を制すること能はず。葬儀は屢々列を亂され、順序は往々前後するの止むを得ざるに至り、歌昇吉右ヱ門が寄贈したる放鳥の如きは、既に木挽町に於て、群集のために持去らるゝ奇觀を呈しき。

◎其大雲寺に到るや、道幅狹く境内廣からざるを以て、柩は群集に妨げられ、造花放鳥は强奪され、施主外に立ちて會葬者堂内に滿ち、其混亂名狀すべからず。是れ諸般の準備全く整頓せざるによるも、會葬者餘りに夥多しくして、監督の行屆きかねたるに基因す。而もその會葬者及び見物人は、或は鯨波をつくり、或は音羽屋と叫び、甚だしきは萬歲と呼ぶなど、葬儀を目出度きものと心得、之に列なるをお祭の地走りに出たる如く考へたるによりて、殊更に混雜の度を高からしめたるものなり。

◎更に一面より見れば、此葬儀を見物せんとして、早朝より薄暮に至るまで、到るところの巷に、老若男女の群集せること斯の如くなるは、のんきなるもの多き證なり、浮氣者多き證なり、閑人の多き證なり、不景氣といふも其實否らざる證なり。

◎梅幸が逸話と稱するもの、多く傳はるが如くにして甚だ少なし。由來、逸事は豪放なるによりて存するものにして、彼が如く、常に小心翼々として、何事にも拔目なく立廻れるものに索むべからず。往時一話あり、傳へて以て能く各優の性行を見るべきものとなす。曰く一時計商人あり。新着の品十數個を携へて、先づ團十郎が部屋を訪ふ。彼其中の最も高價なるものを出さしめ、一通り目を通して曰く、何だい是て飛切だッて、俺のには最つと好いのが幾つも有るぜ。更に菊五郎を訪ふ。彼先づ愛嬌を振蒔いて曰く、成程、是も好い、其も好い、併し私は、此間贔負の旦那の所で、恰度其樣な鹽梅式のさ、頂く筈にして來たから、買ふのは先あ此次に爲ようよ。轉して彥三郎を訪ふ。何些とも變つた所が無いぢやないか、六時で六ッ鳴り、十二時で十二鳴るんなら、變つたのでも新らしいのでも有りや爲ない、其樣な通常のなら、俺も有るから入らないよ。去て芝翫を訪へば、彼其中の目欲しきもの數個を取り、皆な氣に入つたから、皆な買つて置かう、〆めて何程

だい、二十圓に三十圓に五十圓に百圓は間違へや爲ないかい、拂は俺に分らないから家內と相談して呉んなと。

◎一錢に賣る納豆は、原價五厘なれば、儲け多きが如くなれども、一錢五厘の豆腐の原價六厘にして純益一倍半なるに如かず。而して納豆の賣高は、一日五十錢を出ざるも、豆腐は朝に晝に晩に、少なくとも二圓を下ることなきを以て、豆腐屋に貧乏人あるべからざる理なれど、此商人に限りて堅き者なく、賭博に耽りて飽かざれば、遂に土藏を建てたる例もなきなり。

◎暗香浮動月黃昏と云へば、月夜の梅林に雅致深きは云ふまでもなし。四代目豊前太夫に句あり、月を得しこゝろや梅にたく篝と。闇の色濃き時に當り、篝炬を焚いて梅花を見る、必らずや趣饒からむ。殊に滿開せる白梅の下にあらんには、又一層の眺あるべし。

◎某の作者に一中節を誤りて越中節と書せるものあり。人之を正さんとするや斥けて曰く、豊後節あり土佐節あり薩摩琵琶あり筑前琵琶あり、乃至越後獅子さへ存するに、豈越中節なからんやと。

◎同じ人なるべし、篠入の合方とあるを、日入と書して曰く、日入は乃ち暮方にして寂しきを意味す。寂しき合方を篠入と云ふは、所謂ひとしとを誤れるによるなりと。

◎商人が時間を惜むこと次第に增加し來れるは、爭ふべからざる事實なるが如し。或者の如きは、新聞を讀むさへ禁じて曰く、新聞を讀むに、一人一時間づゝとするも、四人にして四時間を要せざるべからず。此時間を他に轉ぜんか、商賣繁昌は期して待づべきのみと。是れ喜ぶべきか將た憂ふべき現象か。

◎麴町區には義太夫の寄席少く、菓子屋にパン類を鬻ぐもの多けれど蒸菓子を商ふは稀なり。是れ何によつて然るか。

◎本所深川には、浪花節講談の席多し。時に落語義太夫のかゝることあるも、客は職工其九を占め更に趣味を解せざるを以て、仕込いよ／＼高くして上りいよ／＼少なし。

珍無類なる博覽會出品

大阪天王寺　珍々先生

◎今度の博覽會に珍無類の品物、出品されたり。見物人は、出品と氣が附かず、ウッカリ涎を流して居れども、正眞正銘、マガヒもなき出品物なり、しかも、博

覽會に對して監督の任を負ふと高言せる大阪協贊會とかの最も得意なる出品物なり。だゞ一頭何圓といふ直段が貼つてなき故、見物人は商賣物にあらずと早合點すれども、賣約はトウの昔に濟み居るを以て、是を略したるのみ。

◎其品物は何ぞ、曰く賤業婦、一名藝者といふ動物なり。協贊會員の話によれば、此動物は、協贊會と同國なる大阪の產物なるよし、協贊會は、此產物を名譽として出品したるものと思はる。

◎我國に博覽會ありてより五回、最早二十年以上となれども、此の如く珍無類なる出品は、未だ曾て御目に掛つたる事なし。協贊會が空前の大博覽會と自慢するも尤千万なるかな。見物人中には、敎育館に藝者の寫眞あつて書物の出品なしと、當局者を惡口するものあれども、此の如く珍無類なる動物を出品させし手柄あれば、其位の失策は屁でもなかるべし、殊に大手柄なるは太阪協贊會なり。此の如く珍無類なる出品の例を拵へて、是より醜業婦の顏を博覽會の度び每に拜めるやうにしたるは、其お蔭なれば、平田農商務大臣はいふに及ばず、見物人一同は有難淚をコボシて然るべし。伊藤侯爵が觀艦式よりの歸り道、此出品を見て早速、協贊會へ金を寄附せしは、實にさもあるべき事なり。金も出し得ずに、不敬とか失態とか、愚圖々々いふ唐變木は抛つてもやりたき氣がすると、協贊會員の云へるはイカにも尤もなり。

◎夜間開場の裝飾電燈は、今度の博覽會の特色なれども、中へ這入つて見れば、皆戶じまりがしてあつて、懷中をはたきさうなものは一つもなし。然るに、此珍無類なる出品が、タッタ一軒、開店してあつて、夜間入場の御客樣を恍惚とまゐらしむ。イルミネーションの濟んだる跡に、如何な二番目の幕があるか、ソコ迄は知る事出來ねども、此珍無類なる出品を見するに、夜間を選んだるは大に粹なり。淫賣婦、又の名娼妓の居る所を不夜城といふ由なれども、是迄の不夜城は、電燈がヤット一つか二つ位しかなく、甚だ薄闇く感じて居たるに、此處の淫賣婦、否、賤業婦には澤山のイルミネーションがあつて、難波新地、北の新地、或は松島遊廓のやうにボンヤリならしめぬ所、いかにも不夜城の名に背かず。殊に此出品陳列場の近所に、待合風の家が一軒ならず二軒迄あつて、電氣燈の光りをホノぐらくさせ居るに至つては、協贊會の注意至れり盡せりといふべし。

◎新聞記者先生曰く、美術館の附近にはビール樽あり、高等便所あり、大林高塔松本重太郎君の廣告は開場の屋根を脚下に蹈まえ、浪花踊の藝妓演舞場は玉座の神聖を汚すと。藝妓演舞場とは、此珍無類なる出品を陳列する所なり。

◎美術館の附近には、イカにもビール桶あり、高等便所あり、大林高塔松本重太郎君の廣告は式場の屋根を脚下に蹈まえ居れり。然れども、浪花踊の藝妓演舞場が玉座の神聖を汚すといふ、たゞ此一事だけは、記者先生の籔睨みにして、此珍無類なる出品に臂鐵砲を見舞はれたる腹愈せならん。考へても見よ、此出品が玉座の神聖を汚すものならば、博覽會當局者たる平田農商務大臣が、是を許す筈はなきにあらずや。

◎然るに、是を許したる所を以て見れば、神聖を汚さぬ事は充分保證付なり。夫れ計りにあらず、現にサウ云ふ新聞屋先生の中にても、籔睨みの判らずやのみにあらず、此出品を麗々しく書き立てゝ、百五十里も隔てたる處より、大々的提灯を持つて居るものもあるにあらずや。是れ悪くいふ先生方が、臂鐵砲の腹愈なる證據なり。ソンな犬糞主義を奉ずる新聞屋先生には、御存知がなかるべきも、協賛會は驚くべき忠君愛國家なり。開會式を祝ふため、御寺の鐘、各工場滊船の滊笛は勿論、石炭罐、皿小鉢、臺所の飯櫃まで、叩き立てて、ドンチャンブーといふ奇妙なる音樂を奏し、又、追々、「えらいやつちや」とかいふ藝者と幇間とより成り立てる變妙來の舞蹈をやつて、市中を練り歩るく催しありといへり。此の如く奇妙不可思議なる禮儀を有する所は、藝者といふ名譽ある産物を出品せる協賛會より外になし。是れ協賛會が、驚くべき忠君愛國家なる所以なり。菊地大麓、井上哲二郎、隈本繁吉の諸君が、此會の賛成員たらざるは、何故にや、伊藤侯爵、故古河市兵衞氏の二通人が、金を寄附したるは、流石に粋は粋同志、成程見上げたるものなり。見上げたと云へば、式場の屋根を脚の下に蹈えて、傲然美術館の二階まで見下し居る大林高塔松本重太郎君の廣告は、實にスバラしいものなり。是を打つちやつて其儘にさせ居る協賛會の忠君愛國主義も、驚き入つたるものなれども、忠君愛國屋が、打つちやつて置くからとて、自分一人よい氣になり、傍若無人に振舞ふ松本重太郎君も、岩見武勇傳の末孫丈け、イカにも能く禮儀を辨へたりと申すべし。否、協賛會が、式場と板戸一重を隔てたる所へ、珍無類なる出品の陳列場を建築したれば

こそ、重太郎も、負けぬ氣になりて、式場の屋根を脚下に踏まえ、多分愛國屋の向ふを張つたるものならん、然らざれば、珍品店びらきの晩に、助倍派の見物人が、板戸の節穴から覗くため、掟を犯かして繩張内の式場に飛び込み、未だ開場式も濟まぬ前の場内を汚がしても、重太郎君が默つて居る筈なし。イヤ、ドッチにしても、大阪紳士(オット)協贊會の忠君愛國は、實に感心なものなり。

◎感心の序でに、モ一つ感心すべきは、協贊會が、此珍無類なる出品を陳列するため、態々着物を拵らへ、陳列舞臺を新築し、其上、東京から迄、遙々お師匠さんを呼び寄せたる事なり。是を見ても、協贊會が、此出品を、イカに大切に、名譽に、自慢になし居るかを知るべし。我國は、岩戸神樂の昔より女ならでは夜の明けぬ國とは、川柳氏の道破されたる金言の由なれども、此の如く藝者を敬愛し奉る國は、五大州廣しと雖も、協贊會より外になし。是れ程まで敬愛し奉る所なればこそ、板戸一重を隔てゝ、式場と隣り合はせに陳列舞臺を並べ建てたるも、成程尤も千万と合點が行くなり。憾むらくは、陳列場の建築意匠が、甚だ立派でなければども、協贊會の目的は、夜丈け拜ませる積りなれば、晝は見場が惡るくして、美術館附近の風致をドの位損しても、ソンナ事には一向おカマヰなきなり。

◎今度の博覽會は、ドの府縣にても、金の不足を以て有名なり。然るに、協贊會丈けが、着物を拵らへ、踊り舞臺を築き、其上、東京からまで師匠を呼び寄せて、此の如く珍無類なる出品をなす贅澤な金があるとは、流石に大阪人だけ、金儲けのウマイ所なり。聞く所に由れば、此費用は、徽章を賣り附けたる金にて拵へたるものとやら。女の子が金になり、金が仇になるとは、新聞の三面記事にて毎朝見て居る所なれども、徽章が金になり、金が藝者踊りになるとは、協贊會にて初めて敎えられたる所なり。蓋し、是も博覽會のおカゲにして、珍無類なる出品の珍無類たる譯ならん。是から、金を儲けんと思ふ手合は、博覽會の度び毎に、協贊會といふものを拵へて、徽章を賣り附けるに如かず、藝者踊を始めやうとも、或は女郎屋を開かうとも、ソコ迄は傳授の限りにあらず。

◎此珍無類なる出品が、飛んだり、ハ子たり、腰をフッたり、前をヒロゲたりする藝當は平岡大盡とかいふ花柳界の文學者が作りし唄によりて、敎えられたるものゝ由、平岡大盡とは博士名簿には登錄してなけれど

も、東京の花柳界に於ては有名なる博士にして其カラダは、既に花柳學者の特徴によりて、ヨイ〱〱の域に達し居れりといへり。此名譽に對して、協賛會は唄を依頼したる譯なりと、或る人は云へり。イカにも、作者其人を得たる次第にして、協賛會が、見物人をして、悉く花柳學者たらしめんとしたる親切は、充分承認せらるゝなり。此の如き病人の殖ゆるは、國家のため、甚だ喜ぶべき事ならん。内村鑑三君は、上に梅毒宰相あり、下に梅毒國民あり。日本國の敵は、梅毒と酒なり、と怒鳴つたれども、鑑三君は耶蘇坊主なり、耶蘇坊主は、協賛會の禁物なれば、決して畏るゝに足らず。

◎實に當世流を知らぬ程、手にヲヘぬものはなし。千古の哲人小野九太夫氏は、九段目の由良之助が、當世流を知らぬため、大にテコズツたりとの事なり。千古の哲人にてさへ、既に此の如し。協賛會のテコズリさ加減、ホントに御察し申すなり。然れども、決して神經を起す事なかれ、當世に反對して、少數のゴタクを並ぶるは、馬鹿者と貧乏者のする事と、昔からチャンと相場が極つたり。耶蘇坊主や風俗改良論者は、馬鹿者と貧乏者なり、お利口にして金滿家なる協賛會とソリの合はぬも不思議にあらず。協賛會は、コンな馬鹿者と貧乏者に頓着せず、ドコ迄も當世流をヤツて、ドシ〱梅毒患者を拵らへ、日本國をヨイ〱國となすがよし。然らざれば、利口者と金滿家の顔汚しになるべし。我々が、此の如く協賛會の尻にクツ附いて、珍無類なる出品の提灯持をなすも、協賛會同樣、當世流の利口者兼金滿家と世間に思はれんためなり。

短文

（我國の相撲に就て）

▲角力好きの言草が面白い、角力は芝居や、寄席や、其他の遊藝者に異なり、淫靡、放逸、奢侈、鄙猥の風を醸すことなく、勇武、活發、豪壯、邁往の氣象を養ひ、現今日本の風敎を維持し、懦弱に流るゝ弊を救ふの一助ともなりて、世に貢献する所少なからずと、物は何によらず如何に惡しき品でも何處にか取り所もあるものなれば、角力でも滿更取り所のないものでもあるまい、併しいくら辯護しても畢竟一の遊戯的興行物に過ぎない、世人の角力取を見ろ、俳優及藝者と未だ等差あらざるに、之に依りて風敎を維持せんとか、流弊を救はんとか云ふは、痴人の夢を說くよりも、尙一層の痴である、然るに彼等を近づけ、彼等を寵し、彼等を狎づけ、酒を與へ、肉を供して、得々として角力通を以て氣取り、藝者が御客に愛嬌を振り卷いて諂を献ずると同樣に、力士共からちやほやと御機嫌を伺はれ、御前は角力道の摩利支天などゝ追從輕薄を云はれて、うんとのけぞり玉ふ近衞公や板垣伯などの氣が聞きたいものだ（愛　鬼　生）

▲記者足下　僕は相撲を好まず、而かも淫靡なる今の芝居や寄席やに

比して尙武的なるもの、快活なるもの、且つ無害なるものとして推奬するもの〻一人なり、足下の排相撲論の如き快は即ち在り、奇は則ち在り、一面の眞理に在り、然れども到底奇矯兒の言、偏屈者の言、無常識の言たるを免れず、僕竊かに中央公論の名に於て是を惜む、足下は果して

(一)歐米のオペラが妙齡婦人の肉襦袢一枚の準裸躍りなるを知るや否や

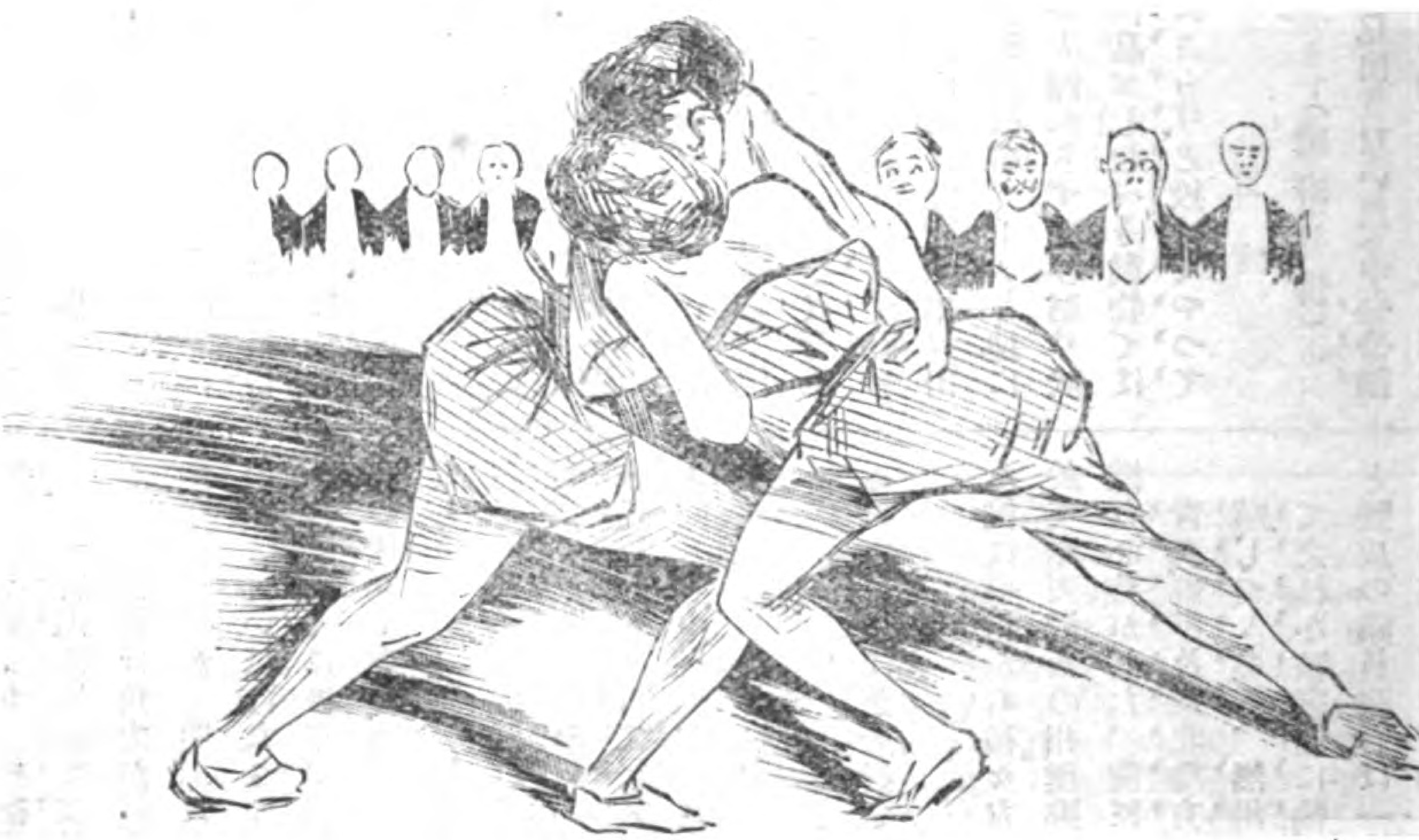
(二)獨逸人の血を流して得意なる血闘に比して相撲のより文明的なるを思はざるや否や

(三)西班牙の闘牛の如き虐待に非ずして人と人とが合意の上の遊戯に外ならざるを知るや否や

(四)相撲を排するに先ちて芝居や寄席の改善を先づ行ふの必要を思はざるや否や

(五)浴湯に生殖器まで公衆に公開して毫も顧みざる国民が相撲取の裸躰を尤むるの權利有りと思へるや否や

(六)此の如き單純明白活潑なる遊戯を以て、譎詐陰險柔弱の社會が要求するものなりと云ふ記者の言は、勢ひ譎詐陰險柔弱の遊戯を奬勵せざるべからず、何となれば明にあるもの〻暗を欲し曖に在るもの〻楽を欲するも又本能的なる一種の要求なればなり



(七)相撲を好む名士は皆公明正大の人に多くして、芝居や藝者に狂ふ紳士は悉く譎詐猥多き事實を知るや否や

僕は足下の明答を求む　(牛門の一生)

▲露西亞は梅が谷の如く、英國は常陸山に似たり、米國の大砲、獨逸の荒岩、宮城野狹布の里一翟の老朽は之れ佛蘭西西班牙乎、我日本帝國に到ては正に新進の駒ヶ岳に比すべし世界は一個の大相撲のみ　(波　嶺)

▲昔は女相撲と云ふものが在つた、一つ是を再興してはどうだらう、女學校の遊戯として之を加へたらば猶更妙である、女子躰育の發達を謀るには是に上越す遊戯は有るまいと思ふ、一寸揷畫を添へてお目に懸ける

(上野美術學校K.H)

▲西洋の相撲は何だか面倒臭く、陰氣で面白く無い、相撲はやはり日本に限る、是れ我國一流日の下開山獨得の活潑戯なり

(ち、　か、)

▲相撲の全滅これ僕の持論である、今日我國士女の同樂に供すべきものは相撲と芝居である、芝翫凧に去り菊五近く逝く、餘す所は唯一の團十のみである、されども半死の老翁餘命幾何かある、此等舊戯の殘物等の死亡は戯

界劇新の爲め大に賀すべきである、左團次、權十郎、訥子數の碌々たる何をか爲さんやである、彼の男地獄を以て有名なる小團次、家橘、梅幸の徒黨淫の法令を擴張して一網羅し盡して再び劇界の餓鬼たる事能はざらしめ、他の健全なる新分子を教養し、續々新作戲曲を供給して奮鼓一番せば劇界の改良庶幾は望むべきであるが、彼相撲に至りては Actor 其自らが赤裸々であるから到底改良の餘地がない。間抜たづうたいて間抜た面で、間抜た技を角して、幾多世間の道樂野郎や馬鹿華族の玩弄物となつて、大飯を食つて砂をかぶるの外何の取柄があるか、若し夫れ敵に前袋を探ぐられて醜猥なる觀物を萬衆の前に曝すに至つては所詮文明人の好尙に適すべきものではない、且つ其餘技として蘭燈陰暗き處藝者や外妾の繊手に翻弄されて其獸慾を充たすの具となるに至つては、之を彼の生氣地なしの隊長と目せらるゝ幇間や箱廻しと何の擇ぶ所がある、謂ふ勿れ相撲は尙武の氣象、體力の發達に間接の貢獻を爲すものなりと、僕は謂ふ德義に伴はざる尙武の氣尙や智力と並行せざる體力の發達は行車片輪の嘲を免れざるのみならず、偶々蠻勇助長の媒介を爲すのみで社會民心の爲めの大疾患である。近來相撲熱の流行と共に上は近衞德川戸田板垣なんど云ふ國家的寄生虫を始めとして下は熊公八公のがや〳〵連に至るまで梅の常陸の國見の大刀のと人間樣の前をも憚からず狂ひ廻り吠え廻る馬鹿々々しさ彼等は到底廿世紀の社會に棲息せしむべき動物ではない、僕は今年の厄拂を待たず明日にも西の海にさらりと投げてやつて仕舞たいのである。

僕は更に言ふ相撲の全滅これ僕の持論である。　（磯野登佛）

▲相撲を惡く言ふ人があるけれど、僕は其理由を見出さないれ、中央公論に畸形の男子蠻力を戰はし朝野の紳縉見る者堵の如しとかあつたが、畸形の男子なればこそ蠻力を戰はすのだ、かの西洋とかで畸形ならぬ禮服禮帽の男と女が相抱き合つて汗水たらして秋の長夜を短かしと躍り狂ふとか言ふに比べては餘程罪がなくて宜しい、　（井上猋花）

▲近衞公爵は角力が好きだ、或人或時公爵に角力なんて、どこか面白う御座いますかと問ふたら「大きい男がドタバタ仆れるのは面白いじやないか」といはれたさうだ　（多聞子）

▲特に商人に告ぐ、諸君が繁忙なる家業を打ち捨てゝ晴天十日ながら通しの札なんぞを買ひて角力場に入りびたるに至つて、宜しからざるの甚だしきもの、帝都の商人實業家といふ者、かゝる猥なしとせず、相撲なんどそんなに力を入れる程のものにあらず、他人の勝負に力を入れるより商戰の成敗を顧み給へ、負けぎらひの日本人にして、商業上の事悉く外人に壓し倒されて居るにあらずや。　（曉窓生）

▲四月の中央公論を角力好きな男に排斥論を讀ませたら其評に曰はくさ。御尤もだが、これぐらゐの事で角力見物は止められない。　（仝）

▲角力好きは芝居好きに匹る。況んや酒色づきに於てをや　（日　[illegible]）

▲僕は平常から種々な理由で相撲を小面憎く思つて居た、然るに前號に於て矮天髑氏の相撲排斥論を讀むに及んで、積年の留飲が一時に下つた樣な心持がした、僕は一の議案を本議會に提出する曰く、

青森縣下及東北地方に於ける數十万の餓莩を救はんが爲め、國內に繁殖しつゝある、無用の長羊（一名スマウ羊）を悉皆掘り集め汽車便を以て之れを被害地に輸送せん

と贊成の議員諸君は一寸下名へ　（芝、金鼻子）

▲回向院の角力が初まれば、議會が寂しくなるさうだ、それは議員も、新聞記者も皆兩國目がけて車を飛ばすからだ、此れ實に國家の慶事ては

ないれ、亡國の徴にあらずして何ぞやと、泉砂の夫子頻りに嘆じて居つた。 （排角生）

▲上はやんごとなき公爵殿下より、下は場末の藝者に至るまで、皆力士に醉へり、吾れ聊か此祭典の日に益々横溢せんとするを憤り、東都に在る既に數年、未だ回向院の地を踏まず。 （反動生）

課題

我國の繪畫に就て （五月二十日）

紳士と貧民の家庭 （六月十八日）

新刊紹介

▲倫理叢書 節制 リギヨル博士著前田氏譯

東京本鄕區湯島一丁目十三 昌平館發行

就中「節制と睡眠」「節制と修養」「節制と忍耐」「節制と言語」といふ數節は小生に最も適切なる教訓と存候、小生性來薄志弱行の者にて、唯譯もなく懸しく相成候事時々有之候間此頃は拜受の御本「節制」を取り出し拜見致居候。且小形にて携帶にも甚だ便利に付、寫生帖と共に懷にして郊外を散歩致候事も有之候。 環翠拜 （定價 拾貳錢）

▲パリシナ 木村鷹太郎氏譯

東京市京橋區南紺屋町十八 松榮堂發行

バイロン崇拜家なる木村鷹太郎氏が譯詩。原文と對照する樣に都合よくなつて居て、頗る氣のきいた小本である。忠實に譯してあるやうだ。一度明星か何かで見たかしらと思ふ。 （定價 貳拾錢）

▲我宗教 加藤直士氏譯

東京市本鄕四丁目 文明堂發行

トルストイ伯原著、近代に於ける最大偉人は獨逸皇帝か。キツプリングか、セシルローヅか。否否否。弱者を仆すものは偉人とは謂ひ難い。弱者を助くるものが眞の偉人ではあるまいか。ト伯は最大偉人である。ト伯は北光よりも輝く顯門に生れて、今は小農夫である。小作人の友である。非戰論者である。先年希臘教會から破門されたけれども露國は信教の自由を許した。寒い、小六ケしい、猛々しい露國に於て、如何にト伯の宗教が人心を醒めて居るかといふ事も大方察せらるゝのである。ト伯の宗教といつても別に新宗教を開いたといふでもない、基督教の實驗錄であるけれども、其人大なれば其影も從て大きい、此書は偉人の胸底にある信仰の影を寫したものである。英文より重譯されたるものだけなれども文章明斷にし解し易い。 （定價七拾五錢）

▲家庭小話 羽仁もと子著

東京神田南甲賀町八 内外出版協會

筆つきのスラ〳〵とした言文一致で少しも厭味がない。東西育兒法の比較、日本西洋姑樣かたぎ、共に家庭改良の良策、一々實行したきものだ。今の女學生が机上で研究する家事學よりも數等實際に近く趣味もあつて良好な參考書である。前途を大きく廣く取つて居らつしやる丸髷ぎらひの姑樣は是非此書で家事學の復習をしてもらひたい。 （定價貳拾五錢）

▲東京高等師範學校附屬小學校 教育學術研究會編輯

東京市神田表神保町二 同文館發行

教育學術界の臨時増刊として出でたるもの。模範小學校の過去現在未來に就て校長以下各其主任の意見と教授の實際とを見聞して一括したるもの、三百頁餘あり。該校を參觀せざるは勿論既に數回參觀を經たるものと雖も猶且本書を見るを要す。但し理科教授に就きての談話と實見を缺きたるは甚だ宜しからず。編者の罪なり。（定價　四拾錢）

▲實用英語對話

斯波貞吉氏編著

東京本郷區向ヶ岡彌生町三　言文社發行

六ケしい長たらしい理屈ぽい話がなくて、極めて實用的な簡明な會話書であるが、勿論教科書風のものではない。横長の小本で素人持てある。附錄の海外旅行對話は渡航者の便宜になる。（定價三拾五錢）

▲小波洋行土產

上卷　巖谷小波氏著

日本橋本町　博文館發行

著者が伯林東洋語學校の聘に應じ、二年間滯在中、少年世界へ通信したる彼地の見物を集めたものである、伯林百談は向ふの社會觀察を盡して居る、著者が獨特の筆を以て輕く快よく叙したるものなれば、近來面白く讀まれた、又體裁から口繪、其意匠中々數奇を凝らして居る。（定價壹圓廿錢）

▲富の壓制

西川光次郎氏著

神田三崎町三ノ一　片山潜氏方發行

社會の組織、階級爭鬪、怠惰の福音、滿腹論等の章に分ち、社會主義即ち片山潜氏一派の急激なる社會主義の主張にして、沈痛の語氣を以て富の壓制を說いて居る。

資本家が遊んで食ふ丈けてなくドンナ悪事を働いて居るかと云ふとは前に述べた通りであります。斯くの如く下は九段坂の立ン坊から上は本郷切通し阪の旦那に至るまで、社會に壓迫されて悪事を爲すに至つて居るのだから、何にも監獄を拵へて小盗のみをコレへ入れたり、收賄教育家にのみ柿色の衣服を着せるに及びますまいと思ひます、五千万人の日本國民全體が柿色の衣服を着て可なりであります、又何にも平沼專藏、岩谷松平等のみを悪事の專門家の樣に云ふにも及びますまい、誰も彼等と五十歩百歩ではない乎、

右は書中の一節てある。（定價　拾貳錢）

▲許六俳句集

熊谷無漏氏編

東京神田南甲賀町八　內外出版協會發行

小形本、句は新年、四季に別ち、四季の中更に天文地理時候植物動物人事に分類す。（定價　拾貳錢）

▲俳句選

第三編　內藤鳴雪氏評　大塚甲山氏編

同上　內外出版協會發行

「我が俳句選稿を重ぬること三、漸く佳境に入るもの丶如し、三鼓して入り亂れけり花軍……鳴雪」。其通り、文庫俳壇の一粒選、鳴雪翁の評に面白きものあり

味噌磨るや庫裡の後で呼鳥　評「聞いたか「聞いたア

（定價　拾五錢）

▲鷗影記

國府犀東氏著

同上　內外出版協會發行

全篇言文一致、犀東氏が隅田川邊の閑窓て、筆とつた一卷てある。對鷗

蜀語、水樹閑語、江天閑笑、水郷危言、鷗語獣語、消息雜記等お經の文句を列べた樣な標題であるけれど、文はすらりとして、黒水に浮ぶ鷗の跡の如く平生の漢文流とはまるで違ふ、寧ろ吾人は餘り平坦に過ぎたのを惜むのである。

▲現今小學校の缺點　山崎彦八氏著

東京神田區千代田町　博報堂書店發行

本書は一名「小學校教育を有効ならしむる方法」とあるから、全く其道のもの『蛇(じゃ)の道蛇(へび)』といふ事がある、著者は東京市立富士見小學校の校長で、のに相違ない。初等教育に於ける當事者が反省すべき諸點を、細かく廣く注意してある。四號活字菊版百三十六頁。（定價　三拾錢）

▲教科書事件の善後策と日本社會の根本的改革　前田長太郎氏著

東京本郷湯島一丁目十三　昌平館發行

我教育界に燃え上りし教科書事件の大火災は如何に片づきしか、善後の策として文部省は如何に處置せしか。官製教科書成らんとす。果して完全無缺にして永久に弊害を生ぜざるか。到底日本の社會は根本的の大改造を經ざるべからず。本書之れを論ず（定價　五　錢）

▲慈愛の海仁の心　大和田建樹作歌

東京本郷彌生町三番地　言文社發行

鐵道唱歌の作者として有名な大和田氏が禽獸虫魚と草木に對する愛憐の情を歌つて、兒童を知らず〳〵の間に教化する樣にしたものである。譜も面白く出來て居るやうだから、手風琴でやつて御覧なさい。更に望むらくは此を小學校へ持込んでもらひたい。

▲我國の宗教及道德　小崎弘道氏著

東京京橋區尾張町二目丁十五

警醒社書店發行

基督教を以て我國の宗教及道德上の問題を解釋せんとするものゝ如し。既に雜誌に出でたるものを集めたるものにして後半は基督教の歴史、解釋なり。基督教を明治今日の道德及宗教として講ずるは全く不適當なりといふに非ず、兎に角精神界の問題を所置せんと欲するものには且參考書たるべし。

▲都市社會主義　片山潜氏著

東京神田區三崎町三ノ一

社會主義圖書部發行

都市改良論なり。都市の改良問題は社會主義に依りて始めて解決し得べきものなりとあり。流石に熱心なる都市問題の研究者だけありて研究深廣に亘る。（定價貳拾五錢）

▲最新東京繁昌記　下卷　伊藤銀月氏著

東京市神田區南甲賀町八

內外出版協會發行

僕のやうな新版ずれのして居る者でも、續篇の出るのを待つたのは實に此書であつた、上卷の想像的記事に富めるに反し此卷には實事談が多い、之は著者の序文にある通りだ、殊に着倒れと食ひ倒れの東京の如き、さては十五區の比較談の如き實に旨いものなり、全卷警句に滿ち快哉を呼ばしむるもの多々あると全時に一寸腑に落ち憎いのもある、蓋し思ふに此書に尤も醉はされるものは之を讀んで初めて東京を知る田舎漢に非ずし

て、恐らくは耳痒き思のする東京ッ兒であろう、兎に角必ず再讀しても飽かない快文字だ。「八百屋お七は下町娘、誤つて本郷に生れたのだ」なんてことが書いてある。（定價貳拾五錢）

▲家庭文學　第一編　枯川氏選　同上　內外出版協會發行

枯川氏が諸新聞に載せたる所謂雜錄なるもの、言文一致ならぬ文章多けれども雜遝の文字なく、簡明にして短篇小說あり、紀行あり、所感あり、飜譯ものもありて、とりぐに趣味多し。（定價貳拾五錢）

▲英國士道物語　加藤眠柳氏譯　同上　內外出版協會發行

ション、ハリファックス、ゼントルマンの大意を譯したるものなり。本著者がヴイカー、オブ、ウエークフイルド（家庭夜話第二編）の譯よりも遙かに優れりと見たり、獨立少年の氣品は優に我が國人が模範とするに足る。一種の紳士讀本である。（定價三拾五錢）

▲倫理叢話　蟹江義丸氏述　東京神田千代田町　博報堂藏版

倫理といへば道德上の議論かと直に理屈ぽく考へる人も無いでもあるまい。由來僕は蟹江氏の倫理に關する談は少なからぬ趣味を以て聞いて居る。そして決して空想でも空理でもない。「我邦の過去現在將來の理想」と「孔子の所謂君子」とは就中精讀した。敢て其學に志す人のみといはず、道を厭はぬものは讀むべしてある（定價三拾五錢）

▲新小說（第八年第五卷）　東京日本橋通四　春陽堂發行

小天地は殆ど廢刊の姿となり、文華は見るに足らず、文藝俱樂部は益俗に流れ、獨り新小說が文藝に忠にして些も怠るなきは吾人最も喜ぶ所、本號には風葉のへそ日記闕月のおかめ銀杏醉山の苦衷（以上小說）あり宙外の郷里の友に答ふる書等あり。（定價貳拾五錢）

彙　報

●郵船會社の海員

日本郵船會社社船の運輸する船の七十六隻にして四月二十一日同社の配船表に據れば

	船長	機關長	一等運轉士	小計
內國人	四七	五〇	四七	一四四
外國人	二九	二六	二九	八四
合計	七六	七六	七六	二二八

一等運轉士以上の乘組員二二八に對し八十四の外國人あり、其の外右の表に記せざる二等運轉士、一、二等機關士等を通じ尙ほ四十五名外國人あり前記八十四名を加算すれば百二十九名の外國人を傭使すと。

●郵便貯金額と人員數

我國の郵便貯金制度開始以來年々預金及預金人員增加しつゝあるが今明治八年より昨三十五年まで三年毎の預金額及人員を擧ぐれば左の如し

年次	預金高	預金人員
明治八年	一五、〇〇〇	一、八〇〇
同十一年	二八六、〇〇〇	一四、一〇〇
同十四年	八二一、〇〇〇	三八、九〇〇
同十七年	五、二六〇、〇〇〇	一四一、二〇〇
同二十年	一八、二一三、〇〇〇	五六八、八〇〇
同二十三年	一九、九七〇、〇〇〇	八一三、七〇〇

同 二十六年	二六、一五五、〇〇〇	一、〇六〇、二〇〇
同 二十九年	二八、二五一、〇〇〇	一、二七三、三〇〇
同 三十二年	二三、四五五、〇〇〇	一、三九七、六〇〇
同 三十五年	二八、五三六、〇〇〇	二、七〇七、五〇〇

●家內不和合と精神病者　府下田端なる東京腦病院が昨三十五年度に收容したる患者三百八十一人に就き一々原因を調査したるに其結果左の如くにして家內不和合に基く者最も多數を占め居ること忌はしき次第といふべし。

財產上の苦心	二六人
相續上の苦心	七
事業失敗及び損失	一九
失戀及び嫉妬	一九
離婚及び結婚上苦心	一四
親族病氣及び其死亡	二八
家內不和合	五二
處世上苦心	二六
試驗失敗	一三
感動	七
火災	六
訴訟及び爭議	六
迷信及び宗教	七
徵兵に關する苦心	四
神經系病	一七
病氣及び其苦感	一九
外傷	三
梅毒	一八
酒	三六
生來薄弱及び變質者	二四
身神過勞	一三
其他不明	三〇

●東京市養育院　三月中收容者增減表左の如し

		前月より越	入院	組替增	出院	組替減	逃亡	死亡	月末現在
窮民	男	一六二	五	|	|	|	一	四	一六二
	女	一一四	二	|	|	|	|	一	一一五
行旅病人	男	二三二	六六	|	四〇	|	四	三一	二二三
	女	九七	二五	|	二〇	|	二	五	九五
棄兒	男	一〇一	一	二	一	|	|	一	一〇二
	女	七六	五	|	|	|	|	|	八一
遺兒	男	二五	二	|	|	|	|	|	二七
	女	二六	|	|	|	|	|	|	二六
迷兒	男	七	六	|	一	二	一	|	九
	女	二	一	|	|	|	|	|	三
感化生	男	三六	|	|	一	|	|	|	三五
	女	三	|	|	|	|	|	|	三
合計		八八一	一一三	二	六三	二	八	四二	八八一

前揭の表に就て在院者の延數を示せば窮民の總延人員男女合計八千六百四十三人、行旅病人總延人員男女合計一萬七十三人、兒童總延人員八千七百二十六人なり。

●極東歐露間旅行日程　黑龍江船道總督府官報によれば本年

二月十日より東清鐵道汽車時間表改正せられたるにより之と接續するの必要を感じ烏蘇利鐵道も亦同月二十日より汽車發着時間表を改正實施せり、今此等の新時間表によりハバロフスクより聖彼得堡、莫斯科、ワルシヤワ、オデツサ、キーエフ等歐露の要市に達する旅行日程及び其費用左の如し

ハバロフスクよりチエリヤビンスクへ	十三日
同聖彼得堡へ	十七日
同モスクワへ	十六日
同ワルシヤワ又はキーエフへ	十八日
同オデツサへ	十九日

又賃金は

	(二等)留	(三等)留
チエリヤビンスク	八三、五二	五七、二五
聖彼得堡	一〇五、七九	七二、二〇
莫斯科	一〇二、一五	六九、八〇
ワルシヤワ	一〇九、〇五	七四、四〇
オデツサ	一〇八、七五	七四、〇〇
キーエフ	一〇五、七五	七二、二〇

なり但し一等賃金は二等及び三等賃金の合計額なり。

●千島同情婦人會の設立　郡司大尉の率ゆる報効義會は千島經營十年の星霜を經たるが、其間丈夫と苦樂を共にしつゝある同島婦人の爲めに同情誠を寄せんとて、高木醫學博士婦人齋藤海軍少將夫人等發起者となりて同會を結び、目今會員を募集中なり。

●傳燈奉告會　本派本願寺大谷光瑞師第二十二世の宗主としての繼承式典、本月一日二日京都にて擧行、門末信徒の集るもの四十万人

●露國太平洋艦隊實力　露國太平洋艦隊は現今左の如くにして合計四十七隻十六萬三千百六十噸なり

戰艦	噸
レトヰザン	一二、七〇〇
ポベダ	一二、六七四
ペレスウエト	同上
ペトロパウロスク	一〇、九六〇
ポルタワ	同上
セバストポル	同上
裝甲巡洋艦	
プロモボイ	一二、三六四
ロシヤ	一二、二〇〇
リユリク	一〇、九三三
パルラダ	六、七三一
アスコルド	五、八〇〇
一等巡洋艦	
ヂアナ	六、六三〇
ワリヤグ	六、五〇〇
ボガテリ	六、三〇〇
アドミラルナヒモフ	未詳
二等巡洋艦	
アルマズ	三、二八五
ノビク	二、九五三
ボヤリン	同上
ラズボインク	一、三三四
ジヤト	同上
ザビヤカ	一、二〇〇

水雷巡洋艦	噸
アブレク	五〇〇
フサドニク	四〇〇
ガイダマク	同上
砲艦	
アトワジヌイ	一、四九二
グレミヤスチイ	同上
マンヂユル	一、二二四
コレーツ	一、二一三
ギリヤク	九六三
ボブル	九五〇
シウチ	九四三
水雷艇	
ベズストラシヌイ	三五〇
ベズシユムヌイ	同上
ベズボスチヤドヌイ	同上
ブチーテリヌイ	同上
リユテナントブラコフ	同上
ウヌシイテリヌイ	三一二
ウニマテリヌイ	同上
ウイノスリウイ	同上
グロゾウオイ	同上
ホイキー	二二〇
ブールヌイ	同上

外水雷艇二隻と水雷運送船三隻あり

明治三拾六年

公論日誌

其五

公侖日論

公論日誌

自三月十七日　至四月廿日

三月十七日　▲全國保險大會（來月五日大阪ホテルに開く）準備大會
▲鐵道作業局長松本莊一郎氏死去
▲京都電報あり六條生命保險の事に關し大谷派本願寺の石川舜台氏外數各家宅搜索を受けたりと、怪か、快か、鋒端黑色の血の滴るあり又脅くに腕にぶり候、止みなむかなく
▲本日死刑の執行三人有之候、
何事ぞ花見る時の血の煙
△外電に曰はく大歡迎を受けたりし英國のチャンバレン氏鼻帝の訃見を終へ候と　▲内電には青森縣下の大火を傳へ候

十八日　▲警視廳にて警察署長會議
▲本日より日本銀行の利子引下げ實行致す由に候、

十九日　○古社寺保存委員會内務省にて　▲中央衞生會定會后一時より
▲偖ては彼岸の入りにて候へども寒さはさ程は減ぜず從て櫻も未だ開かず春は一二週間も遲れたる樣に候、
おくれたる春の歩みやおそ櫻
御佛の花に櫻はあらざるよ

二十日　▲人道倶樂部演說會神田青年會館にて　▲社會主義大演說會、
○近日風說有之候、文部省較かれ農商務打たれ、大藏飛火を食ひ遞信さわぐ、此に於て政府は內閣の威力を以て司法の獨立權を砸碍せんとすとあゝ何ぞ成佛することの遲きや如是畜生發菩提心南无阿彌陀佛々々々々
△本日の官報は多くの官制改癈を行ふを發表致し行政整理の意を傳へ候、△尙鐵道及其他事業の公債募集の廣告をも致し候

廿一日　△普通選擧政談演說會後六時より錦輝館にて　●日本消化機病學會后二時より　地學協會例會
△倫電は支那人勞働問題硏究の爲めトランスパールの鑛業事務所より派遣せられたる委員兩名倫敦に着したる由傳へ候　▲本日朝本郷四丁目にて荷馬暴れ出して錨屋表口の出窓に足踏み込み居合はしたる主人の妹獄て竹の折れ門中に突通したるの珍事有之候

廿二日　▲愛國婦人會大會午后一時より九段階行社にて　▲第三回商家雇人獎勵會上野公園竹の台にて　△東邦協會評議會后一時より帝國教育會にて　○倫理問題大演說會新佛教徒同志會發起錦輝館にて
▲活版工勞働演說會后六時半より京橋亭にて四川、國兩氏出演　其他日曜說教演說　▲偖て本日春季皇靈祭即ち彼岸の中日にて候　諸方の寺社に人出も隨分有りたる樣子に候
花早うして彼岸會來たる寒さ哉
▲本日芝三田四丁目にて貞直なる夫の不在中に不貞なる行動にて貞債までなしたる女の悔悟の縊死有之候　▲ヴチエズヰラ國大統領カストロ氏は辭職を申出てたれど國會は滿場一致にて其申出を拒めりと倫電は傳へ候

廿三日　△東邦協會總會后四時より華族會館にて　○日蓮宗徒演說會下谷市村座にて　▲市内盲人茶話會前九時より下谷初音町十九番にて
○高等師範附屬小學にて前八時より父兄と懇話會を開く　△又々農商務屬吏の嫌疑者にて拘引されたる者も甚だ少からざる樣子にて御座候　▲本日の新聞紙にて密賣淫婦を病院に收入たる者に付ての調査によるに其概ねは病氣にて患者十八歲以上四十八歲迄總計八十五人の中麻爛十二人、淋病廿三、下疳廿六、黴毒十五、結核六、雜病三にて、娼妓に比する時は幾十倍の由に候

[illegible]

公論日報

[illegible]

公論日誌

自三月十七日
至四月廿日

三月十七日　▲全國保險大會（來月五日大阪ホテルに開く）準備大會
▲鐵道作業局長松本莊一郎氏死去
▲京都電報あり六條生命保險の事に關し大谷派本願寺の石川舜台氏外數各家宅搜索を受けたりと、怪か、快か、筆端黑色の血の滴るあり又育くに腕にぶり候、止みなむかなく
▲本日死刑の執行三人有之候、
何事ぞ花見る時の血の煙
△外電に曰はく大歡迎を受けたりし英國のチャンバレン氏鼻帝の謁見を終へ候と　▲內電には青森縣下の大火を傳へ候
十八日　▲警視廳にて警察署長會議
▲本日より日本銀行の利子引下げ實行致す由に候、
十九日　○古社寺保存委員會內務省にて　▲中央衞生會定會后一時より
▲偖ては彼岸の入りにて候へども寒さはさ程は減ぜず從て櫻も未だ開かず春は一二週間も遲れたる樣に候、
おくれたる春の步みやおそ櫻
御佛の花に櫻はあらざるよ
二十日　▲人道俱樂部演說會神田青年會館にて　▲社會主義大演說會、
○近日風說有之候、文部省較かれ農商務打たれ、大藏飛火を食ひ遞信さわぐ、此に於て政府は內閣の威力を以て司法の獨立權を砸碍せんとすとあゝ何ぞ成佛することの遲きや如是畜生發菩提心南无阿彌陀佛々々々々
△本日の官報は多くの官制改癈を行ふを發表致し行政整理の意を傳へ候、△尙鐵道及其他事業の公債募集の廣告なも致し候

廿一日　△普通選擧政談演說會後六時より錦輝館にて　●日本消化機病學會后二時より　地學協會例會
△倫電は支那人勞働問題硏究の爲めトランスバールの鑛業事務所より派遣せられたる委員兩名倫敦に着したる由傳へ候　▲本日朝本郷四丁目にて荷馬暴れ出して鮨屋表口の出窓に足踏み込み居合はしたる主人の妹驚て竹の折れ目中に突通したるの珍事有之候
廿二日　▲愛國婦人會大會午后一時より九段偕行社にて　▲第三回商家履人獎勵會上野公園竹の台にて　△東邦協會評議會后一時より帝國教育會にて　○倫理問題大演說會新佛教徒同志會發起錦輝館にて
▲活版工勞働演說會后六時半より京橋亭にて西川、國兩氏出演　其他日曜說教演說　▲偖て本日春季皇靈祭即ち彼岸の中日にて候　諸方の寺社に人出も隨分有りたる樣子に候
花早うして彼岸會來たる寒さ哉
▲本日芝三田四丁目にて質直なる夫の不在中に不貞なる行動にて負債までなしたる女の悔悟の縊死有之候　▲ヴチエズヰラ國大統領カストロ氏は辭職を申出てたれど國會は滿場一致にて其申出を拒めりと倫電は傳へ候
廿三日　△東邦協會總會后四時より華族會館にて　○日蓮宗徒演說會下谷市村座にて　▲市內盲人茶話會前九時より下谷初音町十九番にて
○高等師範附屬小學にて前八時より父兄と懇話會を開く　△又々農商務屬吏の嫌疑者にて拘引されたる者も甚だ少からざる樣子にて御座候　▲本日の新聞紙にて密賣淫婦を病院に收入たる者に付ての調査によるに其概ねは病氣にて患者十八歲以上四十八歲迄總計八十五人の中麻痢十二人、痳病廿三、下疳廿六、黴毒十五、結核六、雜病三にて、娼妓に比する時は幾十倍の由に候

廿四日 ▲帝國古蹟取調會評議員會華族會館にて ○高等師範創立紀念會 ▲昨夜横濱に於て二人女の豪遊を極め警察の怪む所となりたる者有之候 もと米國にて醜業を營みたる者の由に候 ▲尚本日尋中生徒共犯の賊の淺草公園にて捕ばれたるもの有之候 ▲原田少將死去致され候 ▲洲崎に劇薬心中有之候 男女合意の上ながら男のみ死して女は生命に別條なしとのことに候年廿八才二人共同年に候無

分別や四七消えたる花の露

▲佐世保築城支部長陸軍工兵少佐熊野御堂武夫氏自殺の珍事有之候

廿五日 ▲鐵道協會評議員會五時より ▲東京商業會議所にては前々日より議員選擧中なりしか本日は丙部選擧を行ひて總て結了し候 ▲教科書事件第九回公判有之候

廿六日 ▲商工同志會發會式午后一時より、日本橋倶樂部にて ▲帝國議會召集の期日五月八日と本日勅詔發布せられ候 △ヴ國大統領は辭職の決意を固く執て動かずとのことに候ひしが本日の倫電は翻撤回せりと傳へ候 ▲今夕上野公園東園にて菓子の食ひ逃げせんと誤で日本鐵道線路に落ち、重傷を負ひたるもの有之候

廿七日 ○女子裁縫高等學院卒業式前八時より、▲歯科攻究會例會后七時、より ▲日印倶樂部演藝會錦輝館にて后六時より ▲教科書事件第十回公判本日開廷相成候 ▲本日淺草に白鞘の短刀を閃かして金一圓と白米五升とを强奪したる强盜有之候但し即夜に其賊は捕へられ候 ▲本日午前二時頃芝區高輪南町にて十三才の少女の父に棄てられて泣き居たるもの有之候 ▲本日米國哲學博士と稱する小手川豐次郎氏窃盜及び委託金消費の罪跡にて捕縛致され候

廿八日 ○本日勅令第六十六號を以て公立學校職員俸給令を公布致され候 ▲大日本蠶糸會大集其第十二回大集會を京都市に開かれ候 ▲本日麻布にて戸棚の中に隠れ居て寢息伺ひ盜みにかゝりしを知りて捕へみれば最愛の孫なりしより驚き呆れしも詮なく幼少の惡癖のとても止むまじとて泣く／＼警察に訴へる祖父有之候

あゝ孫かわらや可愛や月に涙

盜人を捕へて見れば吾子と云へる實證とは苦々しき事ながら又憐れに候

廿九日 ○東京法學院懸賞討論會後一時より △東亞同文會講談會后一時より帝國教育會にて ▲本日より下谷電話局開始致され候 ▲本日東京にては午前八時五十六分より始まりて日蝕にて候此日蝕は北半球に起るものにして全環蝕の由にて候、然るに生憎曇天にて見るをえず候 ▲火事場のふれ舞洒飲みたさに放火したる恐物世田ヶ谷村に有之候

三十日 ▲本日の外電はマダガスカルの旋風と、露國スラツルストなる官設製鐵所に於ける同盟罷工者の一族に就て報を傳へ候▲前九時下谷御徒士町にて小兒の死體を發見し候 口中に布片にて窒息せしめありたる由無惨のことにて候

無惨やな乳のむ口に白布とは、

卅一日 ▲此一ケ月間の出來事顧みればそれ何ぞなさけなきことの多きや、曰はく教科書疑獄、曰はく農商務事件、曰はく法官の下獄、曰はく哲學博士の窃盜、曰はく僧侶の家宅捜索、曰はく殺人、曰はく刄傷、曰はく詐僞、曰はく選擧騒き、曰はく天狗の高飛び、加藤の顛落、曰はく島田髷の雄夫、曰はく何、曰はくかに、蟹は砂地をゆくものに候、▲今日前二時頃川崎に一家四人燒死の惨劇有之候思ふに盜賊のなせるわざとの事殺して後の放火らしく候

四月一日 ▲富士紡績會社の合併總會后二時より東京銀行集會所にて

▲慈善音樂會后一時より麻布東洋英和女學校にて　▲東京醫學會第十六回總會、向三日間　▲東京府の畜犬稅、郵便局の改稱共に本日より實施相成候　▲日本皮膚科學會總會二日同本鄕中央會堂にて▲本日の教科書疑獄喧ましかりし休職宮城縣知事宗像政氏は無罪放免に相成り候　▲彌生もはや過ぎて四月の今日は一日に候がやう／＼花みる時と相成り候へども見渡せば世上紛々たる醜事大抵血、痴のそれにあらずんば、利慾と理窟なき黨士的仕事のみにてなさけなき次第にて候

　　卯月來て尙肌寒き夕かな

二日　○教育時事問題演說會、后一時より青年會館にて、○漢文學教授法研究部委員會帝國教育會にて后四時より　▲倫電は英國政府本年度の收入總額に付て傳へ候、即ち一億五千百五十五萬一千六百九十八磅は其總計にして前年度よりは八百五十五万六千六百九十九磅の增加るも前大藏大臣の豫算よりは 六十三万三百二磅の減少なりとの事に候　▲相變らず何の記すべきことも無之候に付き例により新聞の題目陳列致すべく候、神奈川の爺斬、南品川の投身女、大坂控訴院書記の拘引、車夫の袋叩、新佃島の大賭博、主人の金を掘てドロン中將湯の十周年祝、天賞堂の大賣出と花簪まづこんなものに候

三日　言文一致唱歌演奏會后二時より帝國教育會にて　○聖德太子紀念大會今明兩日錦輝館にて、○新榮青年會の慈善演藝會后六時より本鄕中央會堂にて　▲奇聞なく妙話なし見んと欲するものは去て滿都の花に問へ

四日　▲傳染病研究所同窓會大會今明兩日擧行、●丁酉倫理會演說會后一時より　○高等商業端艇競爭　▲大日本婦人衞生會后一時より、日本內科學會開會式　▲活版工獎勵會前九時より東京商業會議所にて　▲八重櫻そろ／＼蕾を解きかけ候、ひとへは滿地の露と化し申候

五日　▲實業界に共名高かりし鑛山王古河市兵衞氏、明治火災保險取締役益田克德の兩氏は共に死去なされ候

　　鑛毒の源枯れて花ほろ／＼

六日　△普通選擧同盟會委員會后七時より本部に於て　△本日午後六時より取引所樓上にて仲買人全體を召集し限月復舊に關する報告有之候　○本月前九時半より宮中にて評議國定教科の問題彌々可決に相成りたる由に候　やかましかりし問題も此後圓く收べきやむしろ後の疑問に殘す事よろしからんと存じ候　△又今曉神田三崎町改良座燒失致し候嘗て川上音二郎が自巳の抱負を表はすべく建てしもの今やあはれに烏有と皈し申し候

　　榮か枯か昔を思ふ夢いかに

七日　△社會主義演說會　△普通選擧演說會　△本日午前八時關西に於ける觀艦式へ臨御の爲め主上御發輦に相成り候、△本日の倫電は米國が亞細亞艦隊增加の警告と、和蘭鐵道の同盟罷工とを傳へ候　△飛報は農商務省の飛火大坂に散りて博覽會に關係せし者共に對する疑獄起るべしと傳へ候かくの如くして漸を以て進まば何時河清の日來ることに候やらん哀れに悲しく存じ候

　　花くもり梅雨まで越して何時晴るゝ

八日　○第一高等學校端艇競漕前九時より　○釋迦降誕會　哲學館同窓會は午前八時より同館にて、錦輝館にては佛教青年會發起、新佛教同志會は通常會かれて晩餐會を學士會事務所にて、○池上本門寺入佛式、○對外同志大懇親會、后一時より上野梅川にて　△本日發の倫電は華盛頓に於ける米淸條約中奉天府及び大孤山港を外國貿易

の爲めに開くとの一ヶ條を加ふべしと主張するものありとの風説を傳へ候而して附言して曰はく恐れ重もに滿州開放に對する露國の條約が如何程迄正確なるやを試むるが爲めとのことに候　△同露報にドレフュース事件の再燃に付き激烈なる議論ありしことを傳へ候△さて本日后四時主上無事舞子行在所に御着發相成候

十日　△本日彌々神戸港にて第二回觀艦式行ばれ候　博覽會と合してのこととて諸方より集まり人々實に豫想外とのことに御坐候　いかに上方贅六遂の狂奔せるか、日々の大坂新聞は何事をも忘れたるげに他事を記せずして博覽會、觀艦式にのみ筆執り居るにても知らる可候　△本日去る廿年大川端に箱屋を殺せし花井お梅なる女彌々出獄すとて新聞などは事々しくさわぎたて候大評判者なれば人さわぐと傳ふる新聞の言眞か、さわぐと號して人さわがす新聞の語僞か輕薄なる人心とはかくに新しく奇なる物體と云はず人をも喜び申候、呵々

十一日　▲鐵道作業局は五月一日より官線内に於て製茶運賃を割引すべく候由相達し候　▲今治沖に於て大阪商船會社線船信濃川丸坐礁　▲本日栃木縣の一部にも機饉ありと傳ふるもの有之候

十二日　▲本日午前七時　皇后陛下宮城御發輦　▲倫電に曰はく佛國内閣は英國王歡迎大宴會を決議致候と　▲韓國電報に英親王天然痘に罹りしを以て皇帝廢冊式を秋季に延期したりと有之候　▲本日より帝室博物館にて古銅器と光琳派古畫特別觀覽を許され候　▲曹洞宗大學林創立廿年紀念祭　▲帝國大學大競漕會　▲長崎紙寫會大森八景園に於て　▲鰊の大漁にて北海道の西南岸だけにても二十一万八千石に達し候由

十三日　▲本日　天皇陛下舞子御發輦京都御所に入らせらる。　▲皇后陛下京都御着　▲全國茶業大會大阪中の島公會堂に於て　▲本日漸く官報を以て教科書國定と審査會廢止の事を發表有之候

十四日　▲露國滿州增兵の報其筋に達す　▲福井縣武生町大火戶數一〇五六　▲銀行頭取等が紙幣を贋造して拘引されたりとの報熊本縣より傳へられ候

十五日　▲陸軍行政整理法發表　▲本日より新橋品川横濱間及び靜岡燒津間回數乘車券發賣　▲德川公爵家會計員の自殺沙汰漸く聞へ候　▲日本鐵道にては本日より内部の改革を始め候由　▲動物虐待防止會、一ッ橋學士會に於て評議員會を催し候

十六日　▲滿州に於ける露國兵の進退增減甚だ曖昧に御座候　▲昨今政友會の革新派所々に動搖致居候趣相見え候　▲延取引實行に就き各地取引所はそれ〴〵準備に取掛り候

十七日　▲倫電に曰はく英國王マルタ島に到着盛大なる歡迎を受く　▲全國機業大會京都議事堂にて　▲小樽大火戶數九百五十燒失　▲千葉縣三等郵便會議終りて宴會費を九十九里濱の窮民に義捐致候由難有き事に御座候

十八日　▲露國前公使イスヴォルスキー、新公使ローゼン國書奉呈の爲めに本日京都にて拜謁　▲倫電に曰はくバルカン半島の風雲益々急なりと　▲政友會は改革派處分として代議士四名を除名致候　▲千島同情婦人會といふもの設立相成候趣に御座候　▲福田會育兒會園遊會毛利公爵邸に於て　▲早稻田大學春季大運動會　▲小金井の八重櫻盛りにて花見連の血塗れ騷ぎさへ有之候

十九日　▲宮相叡旨を奉じて露國新舊二公使を仙洞御所に饗す。　▲又々北海道鰊の豐漁を傳へ候、去る十七日迄の收穫高五十五石四千石

侯爵山縣有朋君題字
伯爵松方正義君序文並肖像
男爵園田安賢君序文
安田善次郎君序文

貯金のすゝめ

金森通倫著

改版增補三百頁

四號かな付
定價金廿八錢
郵稅金六錢

本書は北海道廳。奈良。熊本。宮城。宮崎諸縣廳より**三萬餘部**の御買上を蒙り其他全國の**郵便局、諸會社、銀行**等より二百部三百部乃至五百部一千部等の注文は陸續として絕へず。

今回大增補するに及びて安田銀行。第三銀行。第十七銀行。明治商業銀行より通計一萬部の御用を蒙れり、まことに弊店の光榮とする所にして、亦以て本書がよく世の時弊に適するかを知るを得べし、實業家は勿論、宗教家も讀むべく教育家も讀む可く、進物用としては尤も適當せり。

東京本鄉四丁目
發行所　文明堂